

真理

実践を通じた真理入門

Kai Froeb

この翻訳について

この翻訳はAIによる機械翻訳で作成されたもので、まだ人の手による完全な校閲を経ていません。誤りを見つけられた場合は、feedback@reflexivitypress.comまでお知らせください。本書をご購入のうえ誤りをお知らせくださった方には、訂正版を電子書籍で無料でお送りします。

著者

Kai Froeb

https://kai.froeb.net

出版社

Reflexivity Press

リスボン

カイ・フローブ版

最新版と訂正のお知らせ: https://reflexivitypress.com/ja/books/froeb-wahrheit

ご意見: feedback+ja.wahrheit.v1.10.54@reflexivitypress.com

表紙: © Reflexivity Press, Kai Froeb. https://reflexivitypress.com/en/about/cover-art/

刊行

2026-11-21

翻訳: 2026-11-25

版 1.10.54

Typeset with LaTeX (LuaHBTeX, Pandoc + Eisvogel)

成立についての注記

本書は言語モデルClaude (Anthropic)を用いて執筆された。構成、内容および責任は著者に帰する。翻訳はAI言語モデルの支援を受けて行われた。作業の進め方については著者の論考を参照：https://reflexivitypress.com/ja/about/machines-that-write/

© Copyright 2026 by Reflexivity Press, リスボン.

無断転載を禁じます。本書の無断複製（コピー、スキャン、デジタル化等）ならびに無断複製物の譲渡および配信は、著作権法上での例外を除き禁じられています。

AI学習: 明示的に許諾（ZMC 1.4、第11条）。

Zero Marginal Cost License 1.4 (ZMC 1.4)

読者向けの要約

限界費用がゼロのものには、障壁があってはならない。

許可されること

- 本著作物を無料で読み、ダウンロードし、複製することができます。
- 内容を変更していない著作物を、著作者名・出典・ライセンスを表示したうえで、非営利目的でデジタル形式により再配布することができます。
- 内容を変更しない範囲で、ファイル形式を技術的に変更し、アクセシビリティのために必要な調整を行うことができます。
- 個人的・非営利目的の利用のために個々の部数を印刷し、または印刷を依頼して贈呈することができます。直接費用については、利益を上乗せせずに実費精算が可能です。
- 自身の個人的、非公開かつ非営利の利用のために翻訳を作成することができます。
- 変更のない著作物を、非営利で、版・日付・最新版への参照を付けて公開でミラーリングすることができます。
- 著作物を教育・研究のために個人的に利用し、非営利の利用において学術上の基準に従って引用することができます。ただし、引用集によって著作物そのものを代替してはなりません。

条件

利用は非営利に限られます。公衆へ再配布する場合は、合理的に可能な限り著作者、著作物の出典、ライセンスを表示してください。著作物を再ライセンスし、新版を発行できるのは権利者のみです。追加の法的または技術的な制限を課してはならず、著作者や出版社による支援・推奨があるかのように装ってはなりません。

その他のすべての権利は留保されます

このライセンスは、明示された利用のみを許可します。明示されていない利用は、すでに法律で認められている場合を除き、権利者の別途の許可が必要です。

法律上の利用権限および報酬請求権は影響を受けません。 第三者の権利には別途の条件が適用される場合があります。

重要なお知らせ： この要約は理解の助けとなるためのものであり、独立したライセンス契約ではありません。拘束力を持つのは完全版の**ZMC 1.4**です：

https://reflexivitypress.com/ja/zmc/



著者について

Kai Froeb（*1963）はポルトガルの大西洋岸に在住。

あなたがこの本を手に取っているということは、著者について最も重要なことはもうご存じだということです。彼はあなたに「信じてほしい」とは言いません。彼のすべての本は、そこに書かれていることが自分の思考で検証できるように構築されています。それは謙虚さの表現ではなく、構造そのものなのです。あなたの判断が本文と異なる場合、それはこの本の限界に達したか、あなたの思考の特質が可視化されたかのどちらかです。どちらも同意よりも価値があります。

この道は、長く並行して走ってきた二つの軌跡を経てきました。一つはリューネブルクの高校時代とゲールデ公民大学のサマースクールで始まりました。そこで三週間かけて一つのテキストを徹底的に読み込んだのです。その道は数学、情報科学、経営学、文化学、法学へと続きましたが、学位は意識的に取得せず、学問分野を横断する道を確保しました。もう一つは1980年、コモドールCBM 8032でワイゼンバウムのELIZAの再現版を使ったことから始まり、それが職業となりました。プログラミング、アプリケーションサポート、プロジェクト管理、トレーニング——最初は小規模ソフトウェアハウスで、次に大規模IT企業で、最後は十数年にわたり企業内委員会と労働組合で活動しました。

二つの軌跡が一体であることは、遅れて明らかになりました。四十年のソフトウェア仕事で習慣となること——構造の分解、依存関係の可視化、引っ張ったときに何が耐えられるかの検証——は、哲学的論証に必要なものと同じ手法なのです。

1998年以来、Froebは**hegel.net**を編集しています。これは11言語で利用可能な、おそらくインターネット上で最も包括的な多言語ヘーゲルリソースであり、ヘーゲルと19世紀ヘーゲル派のデジタル化オリジナル版500点以上を含む公開アーカイブを備えています。

hegel.netを通じてJohannes Heinrichsとの接触が生まれ、Froebは現在、Heinrichsの作品を出版者として刊行しています。

彼のモットーは学生時代に由来し、それ以来、有用であることが証明されています。「真理は全体である。」この言葉は、何も抑圧する必要のない統合を要求します——だからこそ、聞こえほどには実現が難しいのです。

もしこの本の中に誤りや見落としを見つけられたなら、あなたの批評はこの本に贈ることができる最も価値ある貢献です。

問題の由来について

ベルギーでは私はドイツ人であり、ドイツでは私はドイツ語をあまり上手に話せない人間だった——別の場所で育ったからだ。私は多くの本を読んだ。私が読んだのは、よそ者だったからなのか、それとも読むことでよそ者であり続けたのかは、私にはわからない。

私が通っていたベルギーの学校には、多くの国から来た子どもたちがいた。その街はヨーロッパの企業本社が集まる場所だった。家庭には外では語られないことがあり、私はそれを口に出した——反抗心からではなく、なぜそれが隠されているべきなのかという好奇心からだった。

学生新聞の編集者として、私は当時まだ紙媒体だったドイツの各政党のニュースサービスを購読していた。同じ出来事が、どのサービスでも異なる出来事になっていた。私を悩ませたのは、その差異そのものよりも、事実がそれによってほとんど妨げられていないように見えることだった。

宗教の授業ではキリスト教だけが扱われた。他の宗教については自分で調べた。そして、代替的な世界観、競合する物理学理論、異なる歴史学——歴史という概念そのものを否定するものに至るまで、様々なものを調べた。政治的スタンドや戸別訪問での会話の中で、常に同じ問いが浮かんだ：相手が自分の土台を共有していないとき、どこから始めるのか？「書かれている」と言っても、その文書を認めない者には届かない。「証明されている」と言っても、その証明の権威を疑う者には届かない。

中学時代に私は気づいた。読んだ多くのものが互いに矛盾しているということに。それ以来、私はそれらを共に思考できるような視点を探している。

その問いはその後、ますます大きくなった。コロナ禍で、ウクライナ戦争で、ネットのエコーチェンバーの中で——一方の側を信じないことは、他方の側を信じることではない。では、何をよりどころにすればいいのか？

誰もが毎日それをしている。検証し、退け、何かに留まる。問題は、何をよりどころにするかだ。

目次

本書はどのような本か 1

序文 3

第I部：われわれがすでに行っていること 5
第1章：あなたは、ここでこれが真であるかどうかをまさに検証している 5
第2章：あなたは空気のない空間で考えているのではない . . 8
第3章　あなたはすでにすべてを持ってきている——認識の隠れた働き 10
3.1 隠された交響曲 11
3.2 私たちの感覚の拡張 12
3.3 認識の源泉としての行為 13
3.4 古い論争の止揚 13
第4章： 生産的な出発点としての先-判断 14
第5章 多くが一つになること——生きている象の原則 18
第6章 生きている全体 22
6.1 突然「死んだ」コンピュータ 23
6.2 機能するチーム——あるいは機能しないチーム 23
6.3 音の中にはないメロディー 24
6.4 あなた自身の人生——出来事以上のもの 24
6.5 生きている全体としての象 24
6.7 創発——何か新しいものが生じるとき 25
6.8 実際的な意義 25
6.9 象の原則に戻る 26
第7章 何かがそれ自身と矛盾するとき 26
第8章 すべては合致しなければならない——生きた探偵の原則 28
8.1 整合性の普遍的構造 29
8.2 現象を救う 29
8.3 交通事故のパズル 30
8.5 抵抗が姿を現すとき 31
8.6 探偵の仕事としての科学革命 32
8.7 生きている整合性 32
第9章：手がかりのさまざまな種類 33
9.1 無意識の能力の知恵 33
9.2 手がかりのさまざまな質 34
9.3 日常の探偵たち——あなた自身の経験則 34

9.4 統合の技法 35
9.5 情報源が互いに矛盾するとき 36
9.6 反省的な探偵の仕事 36
9.7 二つの一面性に抗して 36

第II部：一致とは何を意味するか **39**
第11章：存在しない比較——整合性と対応はいかにして結びつくか 39
11.1 見せかけのジレンマ 39
11.2 学ばれた内と外の分離 40
11.3 私たちが確かめるためのすべてのもの 41
11.3a 実際に起こる比較 43
11.3b 私たちは行為することによって確かめる 45
11.3c 事物そのものは私たちの現在の像以上のものである 46
11.4 道しるべとしての抵抗 48
11.5 整合性と対応はいかにして共に働くか 49
11.6 なぜこの洞察は私たちを解放するのか 50
11.7 実践的応用 50
第11a章 押し返すもの——そしてその過程で私たちが変えるもの 52
11a.1 抵抗はいかに異なって自らを知らせるか 52
11a.2 検証する者は変わる 55
11a.3 フィードバック 56
11a.4 抵抗が取り除かれるとき 57

第III部：さまざまに吟味する **59**
第13章 現実の異なる諸領域 59
13.1 存在するものと、私たちが誰であるか 59
13.2 作られたものと、作られていないもの 59
13.3 真理が異なる仕方で自らを証明すること 60
13.5 カテゴリー錯誤 61
13.6 分離せずに区別する 62
第15章 作られたものを理解する 62
15.1 あなたは絶えず解釈しています 62
15.2 目的 63
15.13 異なるテクストに関して人は真理をどのように語るのか 64
15.3 それなしでは盲目になる問い 64
15.8 再構成だけでは十分でないところ 65
15.10 作品の全体 66
第14章 心が考え、頭が感じるとき 67
14.1 統一を指し示す矛盾 67
14.3 感情が達成することと、感情が欺くところ 68
14.4 矛盾はどのように解消するのか 68

第IV部：吟味することを育み、守る **71**
第19章 科学とパラダイム転換 71
18.1 自らを検証する検証 71
18.3 方法を成り立たせているもの 72
19.2 建物全体が揺らぐとき 72
19.4 大変動の中でも理性的 74
第20章 なぜ吟味は自由にするのか 75
20.3 理解が可能にするもの 76
20.5 共に検証する 76
20.4 欺く者は吟味を妨害しなければならない 77
第21章 真理の名において吟味が妨げられるとき 77
21.1 陣営思考 78
21.2 善の名において 79
21.5 反転した原則 80
21.6 反転した吟味の見分け方 80
21.8a 内に真、外に偽 82
21.8 国家が検証を操縦するとき 82
21.8b パンデミックにおける舵取り 84
21.8c 倒れずに自らを守ることができるもの 86
21.9 真理省ではなく成熟した市民 86
第22章：方法そのものが偽造されるとき 87
22.1 基礎の偽造 87
22.2 偽造の進行のしかた 88
22.3 偽造をどう見分けるか 89
22.4 外部での偽造 90
22.5 分析が障壁になるとき 91
第10章：較正 92
10.2 外国についてあなたが知っていること 92
10.1 すべての言明が正しいとき 95
10.3 プロパガンダ 96
10a.3 第一のレベル: 個々の陳述を検証する 97
10b.1 第二のレベル：配分 99
10.5 誰も検閲しないのに、それでも濾過されるとき . . . 101

第V部：過程としての真理 **103**
第23章 真理と真理の過程 103
16.4 「真理は全体である」が意味すること 103
23.5a 過程としての真理 104
23.5 踏み車と他なる無限 106
23.1 多くの道、一つの方向 107
第24章：このテキストは、自らが言っていることを実行しているか？ 108
17.2 道のり 108
24.1 試し 109

25.1 ここから先へ 111

付録B：真理の諸理論が見てきたもの **113**
B1 導入: 古い論争 113
B2 論争はいかにして生じたか 114
同じ探求の異なる契機 114
なぜそれぞれが順番に尺度となったのか 114
B2a ピュロン主義的懐疑主義：判断保留 114
B3 対応説——抵抗が方向を示す 116
B4 整合説——体系は適合しなければならない 117
B5 プラグマティズム：果実が木を示す 118
B6 合意説: 真理の基準としての共同的探求 119
B7 カント——内部からの限界 120
B7a カント以後——一致ではなく妥当性 123
B8 構成主義：私たちは現実を創造する 124
B9 言語論的・語用論的転回：ウィトゲンシュタイン、オースティン、ストローソン 125
言語ゲームとしての真理 125
真理ゲームの規則 126
B9a ハインリヒス：真理の四重概念 126
B10 分析哲学による精密化：真理述語から真理多元主義へ . . 129
タルスキ：形式に限定された特殊ケースのための精密さ 129
デフレ主義：薄い述語と濃密な実践 129
真理作成者：抵抗が名前を得る 130
真理多元主義：諸領域の分析哲学的近接性 131
方法論上の隣人：ベイズ較正 131
B11 批判理論：真理と解放 132
ホルクハイマーとアドルノが見たもの 132
真理の探求が解放する理由 132
何が残り、この本がどこへ進むのか 133
B12 それぞれの立場が見たもの 133
諸契機とその絶対化 133
なぜこれは折衷主義ではないのか 134
なぜこれは調和の探求ではないのか 134
B13 象の原則の哲学史への適用 135
並行関係 135
象 135
自らの方法の検証 135
B14 実践的帰結：論争から協力へ 136
哲学史の理解のために 136
現在の議論のために 136
哲学的陣営戦争に反対して 136
B15 生きた資源としての伝統 136
この概観が果たすこと 136

生きた伝統 137
課題 137

付録C：真理の探求とヘーゲルの論理学——相互的な解明 **139**
C.1 なぜこの付録なのか 139
C.2 三つの段階：存在—本質—概念 139
存在論：直接的な経験 139
本質論：反省の諸構造 140
概念論：自己規定 141
C.3 主要な主題の詳細 142
映現と反省 142
現象と現実性 142
根拠の三形式 143
止揚 144
C.4 方法論的収束 144
遂行的自己適用 144
定義ではなく発展 145
体系的完全性 145
「真理は全体である」 145
悪無限と真無限 146
C.5 テクストが異なる仕方で進む箇所 147
ヘーゲル：体系的・思弁的 147
このテクスト：遂行的・実践的 147
C.6 我々がヘーゲルから学べること（ヘーゲル主義者にならずに） 147
C.7 ヘーゲルがこのテキストから学べること 148
C.8 結論：相互照明 148

付録D 根拠 **151**
第19章について 151
第21章について 151
第22章について 155
第10章について 155
付録Bについて： ピュロン的懐疑 156
付録B カントについて 156
付録Bについて：ハインリヒス 157

用語集 **159**
本書の使い方 159
パラダイム転換 159
ミュンヒハウゼンのトリレンマ 160
先-判断 160
免疫化 161
吟味の経済 162

基礎の偽造 162
実践的検証（Bewährung） 163
実験 163
対応 164
抵抗 164
探偵の原則 165
整合性 166
方向づけられた多元主義 166
止揚 167
現象を救う 167
生きている全体性 168
真理 168
真理の諸形態 170
真理過程 170
矛盾 171
知識 171
確信（Gewissheit） 172
統合 172
自己言及 172
視点 173
解釈 173
認識 (Erkennen) 174
象の原則 174
転倒（Verkehrung） 175
較正 176
遂行的 176
遂行的一貫性 177
陣営思考 177

本書はどのような本か

本書は、自分自身の思考と照らし合わせて確かめることができない思考については、何も主張しません。本書はそのように作られています。そのことは、本書の読み方にも影響を及ぼします。

本書は真理を外部から説明するのではありません。本書は、あなたが何かを確かめるたびにすでに生じている過程をたどらせ、その過程で何が起こっているのかをはっきりとさせます。だからこそ、本文に実験が登場するのです。そのうち最も重要な実験では、ここに書かれていることが正しいかどうかが決まります。それ以外の実験は、ある考えが、自分自身で実行してみるとどのように見えるかを示します。

各章は互いに積み重なっています。それぞれの章は前の章を前提としています。実験に一分以上かかることはめったにありません。実験が示そうとしていることが見えてくるのは、実際にそれを実行した人にだけです。

本文は、権威に訴えることもなければ、自ら展開していないことを前提にすることもありません。ある章が先を指し示す場合でも、その章の議論は、その先取りなしでも成り立ちます。すでに認められているものに寄りかかる真理についてのテクストは、自らの主題を取り逃がしていたでしょう。

付録。本書の歩みが、よく知られた真理の理論——対応説、整合説、合意説、プラグマティズム、その他——とどのように関係しているかは、付録Bに示されています。ヘーゲルの論理学とどのように関係しているかは、付録Cに示されています。どちらも後ろに置かれているのは、主要部分がそれらなしで済むように意図されているからです。それらを先に読んでも、何も失いません。付録Dは、第IV部で取り上げられている事例の出典と、付録Bのピュロン主義的懐疑論およびカントに関する節の論拠を挙げています。事例は議論を担いません。事例は、現実にあるもののなかでその議論を示します。したがって、事例は正しくなければなりません。

序文

このテクストは、真理を遂行することによって、真理について語ります。このテクストは、あなたがご自身で確かめることのできる一つの主張から出発します。すなわち、あなたは真理が何であるかをすでに知っている、という主張です。というのも、あなたは何かを真であるか偽であるかとみなすときはいつでも、真理に依拠しているからです。

ここで浮かび上がるものは、その日を超えて持ちこたえることを意図しています。というのも、それは、考える人なら誰でも、確かめるときにいずれにせよ行っていることから展開されるからです。古い哲学的な問いのいくつかが、その過程で解消するかどうかは、それぞれの箇所でご自身で確かめることができます。

硬化した前線をもつ陣営どうしが対峙する時代にあって、このテクストは第三の道を模索します。それは、説教や道徳ではなく、誰もが確かめることのできる洞察に依拠します。思考のなかで自分が何を行っているのかを理解する人は、それまで気づかずに従っていたパターンを、より意識的に扱うことができます。

読み方についての注記です。このテクストの概念は、あらかじめ定義されるのではなく、叙述の進行のなかで展開されます——道を進む人は語彙表を必要としません。それでも最後に用語集があります。それは、ある語が、慣れ親しんだ意味から外れた意味で現れる場合や、後になって誰かが、元の箇所を再び見つけられずに何かを調べ直したい場合のために用意されています。順に読む人は、それを安心して無視することができます。

引用の翻訳について：ヘーゲルおよびその他のドイツ語圏の著者からの引用は、本版のために、ドイツ語の原文から、本書の用語で翻訳されており、既存の翻訳から引き継がれてはいません。権威ある翻訳が複数ある場合、それぞれの解釈は異なります。ここでの翻訳は、本書の解釈に従います。訳文を確認できるように、ドイツ語の原文が併記されています。短い引用では引用の後の括弧内に、長い引用ではその下の別の段落に、または引用の出典を示す脚注のなかに示されます。ごく短い句（四語未満）は原文なしで示され、ドイツ語のテクス

トのなかですでに別の言語で提示されている引用は、そのままにされます。

第i部：われわれがすでに行っていること

第1章：あなたは、ここでこれが真であるかどうかをまさに検証している

ちょうど何が起こっているかに気づいていますか？　あなたはこれらの行を読んでいます――そしてその際にあなたの判断は何をしていますか？　これは正しいか？　これは説得力があるか？　著者はどこへ向かおうとしているのか？

この検証は、あなたがそれに決断することなく進行している。それを止めることができるかどうかは、反対検証が示す。評価せずに読み続けてください。それがうまくいくかどうかの確認も、すでに再び検証である。

あなたがたった今終えたものが、最初の実験でした――それは、実験が存在することを知る前に始まりました。このように続きます。あなたの思考について、あなた自身が検証できないようなことは何も主張されません。したがって今後の実験には印が付けられています。あなたが立ち止まり、実際に試すことができるように。あなたの評価は比較の提案であって、指示ではありません。あなたの所見が異なるなら、あなたはこの本の限界か、あなたの思考の特異性のどちらかを発見したのであり、どちらもさらに検証することができます。

この検証が進行しているなら、あなたは真理が何であるかをすでに知っています。そうでなければ検証することはできないからです。まだ真と偽を区別できない子どもは、この検証を遂行しないでしょう。区別は嘘よりも多くのものを含みます。誤り、無知、誤解も含まれます。それらに共通するのは、それらが検証されうるということです。

「真理とは何か？」という問いは、それによって特別な性質を持つ。それは必然的に自己自身へと立ち返る。なぜなら、もしあなたが「真理とは何か？」と問うなら、あなたは真なる答えを欲しているからです。問いは、それが明らかにしようとしているものをすでに前提しているのです。

これは誤りでも循環でもありません。それは、真理は私たちが外から対象のように考察できるものではないことを示しています。私たちは常にすでに真理過程の真っただ中にいます。探し、見つけ、さらに探し続ける過程の中に。私たちはその中を魚が水の中を泳ぐように泳いでいます。

誰かが「明日は雨が降るだろう」 (DE: „Morgen wird es regnen“)と主張するなら、あなたは彼が「それはまあそういうことだ」 (DE: „Das ist halt so“)とか「それを私に信じなければならない」 (DE: „Das musst du mir glauben“)と言うことを期待しないでしょう。あなたは根拠を期待します。「天気予報がそう言っている」 (DE: „Die Wettervorhersage sagt das“)とか「雲がそう見える」 (DE: „Die Wolken sehen danach aus“)など。そのような主張を根拠なしに行い、また根拠を与えようともしない者は、確かに何かを主張しますが、それを検証に付しません。他の人々にとっては、それは単なる意見や信仰の問題に留まります。

真理と基礎づけは、したがって問いと答えのように共に属しています。原理的に基礎づけることのできない「真理」は、それ自体で矛盾です。あなたはそれを自分の読書において観察できます。検証されるのは、何が主張されているかだけでなく、それが基礎づけられているかどうかでもあります。

あなたが論証するとき、たとえ思考の中だけであっても、あなたはさらに、あなたの論証を理解し判断できる他者がいることを前提しています。あなたの部屋に一人でいるとしても、あなたは孤独に真理を探しているのではありません。あなたは他者と共有する言語で考え、他者が理解する概念を使用し、あなただけに妥当するのではない合理性の尺度に方向づけられています。

真理についての問いが自己自身に関係することを、自己言及性と呼びます。意図されているのは、ある問いはすでに答えを自分自身のうちに担っている、完成された結果としてではなく、すでに問うことを遂行している実践として、ということです。

ここで、いわゆる基礎づけのミュンヒハウゼンのトリレンマという古い哲学的問題を解消することができます。名前がすでに事柄を物語っています。トリレンマとは、二つではなく三つの逃げ道を持つジレンマであり――そして三つとも塞がれています。そしてミュンヒハウゼンとは、自分の髪を掴んで沼から自分を引き上げたと主張したあのほら男爵です――まさにそれが、自己自身を基礎づけようとするあらゆる基礎づけが試みなければならないように思われることです。トリレンマは言います。あらゆる基礎づけは、無限後退（AはBによって基礎づけられ、BはCによって、など）、循環（AがBを基礎づけ、BがA

を基礎づける）、または独断的な中断（Xは単に妥当する、以上）のいずれかに陥る、と。

トリレンマは暗黙のうちに何かを前提している。それは基礎づけを鎖として考えることです。文が文を支え、文が文を支える――そして鎖は永遠に続くか、閉じるか、どこかで断ち切れるかのいずれかでなければなりません。この前提の下ではトリレンマは正しい。三つの道はすべて塞がれています。ただ前提が当たっていないのです――そして私たちがここでまさに行っていることがそれを示しています。私たちは最初の文をゼロ番目の文に掛けたりしません。真理についての問いは別の仕方で持つのです。それは、否定がそれ自身を遂行することなしには否定されえません。これが遂行的自己基礎づけです。遂行的というのは、それが文のうちにではなく行いのうちに存するからです。それは外から措定された公理ではなく、遂行のうちにある支えです。そしてそれは、それから生じるものにおいて実証されます。つまり、その上に築かれる全体が支えるかどうか、検証されうるかどうかにおいてです。始元の根拠は、始元から生じる構造であり、最初のものの前にあるさらなる項ではありません。

アーチが立つのはこのようにしてである。どの石も天の鉤に掛かっているのではありません――石たちは互いを掴み、まさにそれによってアーチは支えるのです。循環は、あらゆる穹窿が循環であるという意味でのみ循環です。石たちは互いを支え、どの石も、自分が初めて証明すべきものを前提してはいません。このアーチの石はもちろん、互いを前提する文ではありません。なぜならそのような文の円は、すべてが互いに適合することだけを保証するからです。それらは、否定されえない遂行と、それから生じる構造です。ミュンヒハウゼンの物語が嘘であるのは、彼が引くべきものがないところで引くからです。思考は自分の髪を引っ張りません――それはアーチへと組み合わさり、証明はそれが立っていることなのです。

ですからあなたは、真理が何であるかを苦労してまず学ぶ必要はありません。あなたはすでにそれを探しています。課題は、真理の概念を外から獲得することではなく、探すときにあなたが何をしているかを自覚し――そしてそれをより良く行うことです。

第2章：あなたは空気のない空間で考えているのではない

あなたは実際、何によって真理を確かめるのでしょうか。あなたの思考によってです。しかし、この思考は無のなかを自由に漂っているわけではありません。思考には、上着のように脱ぎ捨てることのできない前提があります。

> **□□ 2: □□□□□□□**
> 次の文を、言葉が意味を持つということを前提せずに理解しようとしてみてください。「空は青い。」
> 本当に試してみてください——先に読み進めずに、まず試してください。
> 何が起きましたか。それはできなかった——できるはずがないのです。記号の意味を否定しようとしながら、その記号を読んでいるという試みは、それ自体を止揚します。この前提を取り除くためには、読むのをやめなければなりません——しかし、そうすれば実験は終わりますが、合格ではありません。
> あるいは、こういうことを試してみてください。自分の考えが或るものへ関係しうるということを前提せずに、考えてみてください。それもまた不可能です。何ものにも関係しない考えは、考えではありません。それは、標的のない矢、方向のない指し示しのようなものになるでしょう。

この実験は最初の実験とは異なる作り方をしています。最初の実験では、或るものがそれ自体において観察できるかどうかが問題でした。ここでは、或るものが、それを行わずには否定できないということが問題です。

この差異が、所見が異なる場合に何を意味するかを決めます。実験が観察を求める場合、異なる結果は所見です。実験がそれ自体を止揚する場合、「私の場合にはうまくいった」 (DE: „bei mir ging es doch“)という報告は、実行できない主張になるでしょう。つまり、何が成功したはずなのかを述べることができないのです。

両方の種類があります。区別は、その反対が無矛盾に定式化できるかどうかにあります。

これらの行を読んで評価しているとき、あなたはすでに多くのことを前提しています。つまり、あなたの考えが或るものへ、つまりこれらの言葉や理念へ関係しているということ、言われたことが正しい

かどうかを認識できるということ、そして或るものが正しいか間違っているかには根拠があるということ、熟考が真理へ近づけるということ、そして誤りは発見され訂正されうるということ、他の人々があなたの考えを理解できるということ、そして論理的原理、無矛盾性と帰結の必然性が妥当するということです。

たいていの場合、あなたはそれを意識していません。それは思考の構造に属しています。これらの前提なしには、思考することはできません。

それゆえ人々はそれを「遡行不可能」と呼びます。つまり、あなたはこれらの前提の背後の遡ることも、それらを「外部から」眺めたり基礎づけたりすることも、それらをすでに使用することなしにはできないのです。それは、自分の外見を見るために自分の皮膚から抜け出そうとするようなものです。

そしてここで検証しているのは誰でしょうか。抽象的な「思考」ではなく、思考する人格としてのあなたです。あなたはこれらの言葉を一つの考えに組み合わせ、それが正しいかどうかを決定します。

徹底的な懐疑論者——「私たちは何も知ることができない」(DE: „Wir können gar nichts wissen“)と主張する人——は、遂行的自己矛盾に陥ります。遂行的とは、遂行において、実行においてという意味です。彼の矛盾は、彼が言うことの中にあるのではなく、彼が言うことと、彼がその際に行うこととの間にあります。

「私たちは何も知ることができない」(DE: „Wir können nichts wissen“)と言う人は、私たちが何も知ることができないということを知っていると主張しています。彼は概念を使用し、理解されることを期待しています。彼は自分の懐疑に根拠を与え、それによって根拠が何かを意味するということを前提しています。彼は他者を説得しようとし、それによって人々が洞察によって意見を変えうるということを想定しています。要するに、彼は自分の定立を、それを主張するやり方によって反駁しているのです。

その中にトリックを疑う人は、試しをしてみることができます。つまり、根拠を与えず、理解されることを望まずに懐疑を主張してみてください。根拠と意味の空間から退出することはできません。それを否定しようとするあらゆる試みは、それを利用しています。何も主張せず、ただ判断を差し控えるだけの人は、自己矛盾を免れます。しかし、彼もまたその際に根拠を比較考量しているということを、付録Bが示します。

この所見には、さらに別のことが含まれています。疑う人は、信頼しているのです。彼は、疑うことが価値があるということ——盲目的な受け入れよりもよく検証し、真理に仕えるということ——を信頼し

ています。この信頼は、疑うこと自体を放棄せずには疑い去ることができません。疑いと信頼は敵ではありません。それらは同じ探求の二つの側面なのです。

ゼロから始めて、疑いうるすべてのものを疑うことを試みることができます。それを真剣に行う人は、この限界に突き当たります。最も徹底的な疑いにおいても、疑うこと自体は疑いえないままなのです。疑う人は考えており、考える人は存在しています。しかし、この「私は考える」の中には、すでに多くのことが含まれています。あなたは言葉を理解し、連関を認識し、世界に関係し、他者があなたを理解できることを期待しています。

「私」は、空間の中の物のように単にそこにあるのではありません。それは遂行において——あなたが自分のすべての経験、概念、洞察を自分の世界像へ統合するその瞬間に——生成します。

ゼロから始めるという試みを、ルネ・デカルトが最も有名な仕方で行いました。彼の「我思う、ゆえに我あり」 (DE: „Ich denke, also bin ich“)は、その際に彼が突き当たった限界の最もよく知られた表現です。

こうして堅固な基盤が見出されます。それは疑いえないドグマではなく、自分自身を確認せずには否認できない、自分自身の思考の実践です。疑いはこの基盤を揺るがすのではなく、確認します。「もしかすると私は何も知ることができないのかもしれない、もしかするとすべては幻覚なのかもしれない」 (DE: „Vielleicht kann ich gar nichts wissen, vielleicht ist alles Illusion“)という問いは、こうしてその刺を失います。この問いを立てる人は、知識が何であり、幻覚が何であるかをすでに知っているからです。

第3章　あなたはすでにすべてを持ってきている——認識の隠れた働き

> **□□ 3□□□□□□□□□**
>
> 見回してみてください。おそらく、テーブル、椅子、窓が見えるでしょう。「これは茶色のテーブルです」 (DE: „Das ist ein brauner Tisch“)——これ以上単純なことはないように思えませんか。あなたは見て、それを目にし、それを知っています。それでおしまいです。しかし、本当にそれほど単純なのでしょうか。

この一見単純な瞬間に何が起こっているのでしょうか。「これは茶色のテーブルです」 (DE: „Das ist ein brauner Tisch“)と言うために、あなたはすでに、認識の交響曲全体を遂行しています。そのほとんどにあなたは気づいていません。

3.1 隠された交響曲

「テーブル」という概念をあなたは単に読み取るのではありません——あなたはそれを持ち込んでいます。テーブルについて知っているすべてのものから。それがテーブルであることをどこから知るのでしょうか？　テーブルを見たことのない別の星からの訪問者は、ただ謎めいた構造物を見るだけでしょう。彼に経験が欠けているところでは、概念も欠けており、概念なしには彼は自分が見るものを再認できません。しかしあなたは即座に認識します。それは食べるため、書くため、置くために考えられたものです。あなたはそれをスツール（低すぎる）、棚（垂直）、ベッド（横たわるため）から電光石火に区別します——いかなる定義からも来ない確実さをもって。

「茶色」も同様に複雑です。それは本当に「茶色」でしょうか？　あるいはマホガニー色、クリ色、クルミ色？　茶色はどこで終わり、赤や黒が始まるのでしょうか？　この限界は自然のうちに予め与えられてはいません——それは文化的に刻印されています。異なる言語は色スペクトルを異なって区分します。例えばロシア語にはライトブルーとダークブルーに二つの独自の基本語があり、ロシア語を話す人はこの限界の異なる側にある青の色調を測定可能なほど速く区別します。あなたの言語は、あなたが見るものを共に刻印します。

おそらくあなたと隣人はこの「茶色」を実際に異なって見ています。あなたが明確に黄色と呼ぶものが、パートナーには緑がかって見えるかもしれません。それは必ずしも文化的な差異によるのではなく、単にどちらかが特定の色を異なって知覚することによる場合があります。北ヨーロッパ系の男性のうち約12人に1人は、赤と緑を大多数よりも分離して見ません。赤いベリーは彼にとって葉からほとんど際立ちません。

一つの感覚が制限されていると、しばしば他の感覚がより強く訓練され、時には制限そのものが利点になります。多くの盲目の人は、足音の響きから部屋の大きさを聞き取ることを学び、指で読むことを学びます。そして赤緑色盲の人は、正常視力者を欺くある種の色彩迷彩を見破ります。なぜなら色が彼を形や質感から逸らさないからです。

つまり「正しい」見方という唯一のものは存在しません。現実への異なるアクセスは互いに補い合うことができます。

あなたの綜合能力——多様なものを一つのものへと組み合わせること——は、最も目立たない業績です。あなたは孤立した色や形ではなく、統一的な物を見ています。感覚的印象の洪水——色、形、影、反射、おそらく音や匂い——から、あなたは「一つのテーブル」を組み立てます。これはあなたの精神の業績であり、あらゆる瞬間に新たに成し遂げられ——そして失敗しうるものです。持ち上げたときに「テーブル」が、緩い板を載せた二つの架台であることが判明したなら、あなたは間違って組み合わせたのです。

背景からの区別をあなたは無意識に、しかし能動的に遂行します。テーブルはどこで終わりますか？　テーブルクロス？　その上のグラス？　その下の影？　あなたは限界を引き、何が属し何が属さないかを決定します。これらの決定は恣意的ではありませんが、単に「与えられて」いるわけでもありません——それらは知覚、経験、注意の相互作用のうちで生じます。

社会的媒体としての言語は過程全体に浸透しています。「テーブル」は単なる音の連続ではなく、意味を担っています——そしてこの意味をあなたは他者と共有しています。すでに「これはテーブルです」(DE: „Das ist ein Tisch“)という単純な認識は、あなたが部屋に一人でいる場合でさえ、コミュニケーションの行為です。

3.2 私たちの感覚の拡張

これらすべては一瞬のうちに、ほとんど気づかれずに起こります。カメラは像を記録します。それに対してあなたは、見るものを解釈し、印象の奔流から秩序を組み立てます。

この知覚には限界がありますが、それは固定されていません。蜂は、私たちには隠れたままの紫外線領域にある花の模様を見ます。コウモリは超音波の反響によって空間構造を「見ます」。他の生物に直接アクセス可能なものを、私たちは技術的装置を通じて自分自身に開くことができます。

私たちは知覚の限界を体系的に拡張します。顕微鏡は極微の世界を見せ、望遠鏡は星々へ届き、X線装置は皮膚を通して見、赤外線カメラは熱のパターンを示し、超音波装置は体内の動きを可視化します。新しい装置のたびに、私たちは現実の新たな側面を発見します。

3.3 認識の源泉としての行為

あなたはいったい、テーブルとは何かをどのように学びましたか。辞書の定義によってではなく、行為によってです。

子どものころ、あなたはテーブルに座り、その上で絵を描き、その下を這い回り、それにぶつかり、そこから食事をしました。テーブルについてのあなたの知は、あなたの身体に、あなたの習慣に、あなたの世界内での動き方に宿っています。あなたは、人が快適に座るためにテーブルがどれほどの高さでなければならないかを知っています——測定によってではなく、長年の経験を通じてです。あなたがたった今テーブルをスツールから区別した、電光石火の確信は、ここに起源を持ちます。それは凝固した実践なのです。

大工は植物学者とは異なる仕方で木材を「知って」います。大工が木材に手を走らせると、彼はすぐに、その安定性を伝える木目を感じ取ります。彼は木材が適切に乾燥されたかどうかを匂いで判断します。彼がそれを叩くと、音がその密度を伝えます。鋸を最初に引いた時点で、彼は自分がどのような構造を扱っているかをすでに知っています。彼の認識は彼の行為から切り離せません。彼は手、目、鼻、数十年の経験を通じて木材を「読み」ます。この種の知は本から学ぶことはできません——あなたはそれを実行しなければなりません。

3.4 古い論争の止揚

ここから古い論争を解決することができます。経験論者たちは言った。「すべての知は外から、感覚を通じてもたらされる」 (DE: „Alles Wissen kommt von außen, durch die Sinne.“)。合理論者たちは答えた。「精神は秩序づける構造を携えてくる」 (DE: „Der Geist bringt die ordnenden Strukturen mit.“)。

両者とも部分的には正しいが、両者とも同じものを見落としている。すなわち、後から精神によって処理される「純粋な」感覚与件は存在しない。最も単純な知覚でさえ、概念的区別、言語的カテゴリー、実践的意味に貫かれています。いわゆる「直接的なもの」は、それ自体が一つの結果です——個人的および文化的な長い媒介過程の産物なのです。

したがって認識は決して単純で直接的なものではありません。最も単純な成果においても、活動性と知性が働いています。認識は媒介されており、この媒介はあなた自身の活動です。あなたは単に情報を受け取るのではなく、世界があなたに現れる仕方をともに形作っていま

す。この活動の限界もまた——色彩の見え方や音の聞こえ方の違い——出発点です。人はそれらに気づき、拡張することができます。

しかし、これらの「媒介する構造」——概念的区別、言語的カテゴリー、実践的意味——には、私たちの文化ではたいてい否定的に響く名前があります。前判断（あらかじめ下されている判断の意であり、「偏見」ではない）です。

前判断そのものについてほど、頑固な偏見がつきまとうものはほとんどありません。

第4章：生産的な出発点としての先-判断

あなたはこの理想を知っています。「事柄にまったく先入観なしで取り組みなさい！」 (DE: „Gehen Sie völlig unvoreingenommen an die Sache heran!“)それは理性的かつ科学的に聞こえます。しかし前章によれば、それは実現不可能であり、望ましくもありません。

私たちが今まさに発見した、すべての認識の持つ「媒介性」は、哲学が「先-判断↑」と呼ぶものにほかなりません。私たちの理解を初めて可能にするあの概念的構造、言語的カテゴリー、文化的意味は、本来の意味での先-判断です。

> **[illegible]**
>
> このテクストを、一切の前提なしに読んでみてください。文字が何であるかを知らずに。文が意味をなすと期待せずに。自分の人生経験もなしに。
> 何が起こりますか。それは不可能です。ただの落書きしか見えないでしょう。

あなたの理解のこの「前較正」は、真理にとって妨げではなく、その条件なのです。

私たちの文化では「偏見がない」ことが徳とされています。「君はまさに囚われている！」は重大な非難です。

しかし、先-判断を持つとはどういうことでしょうか。文字どおりには、検証が導く判断に先立つ判断。作業仮説。出発点。

そのような出発点がなければ、考えることすら始められません。机が何であるかをすでに知っていなければ、どうやって机を認識できるでしょうか。色彩の経験なしに、「茶色」が何を意味するのかをどうやって理解できるでしょうか。

> [illegible]
> この実験は実行できず、考え抜くことしかできません。誰も、そうしたものを何ひとつ持たない人の立場に身を置くことはできません。また、何かを証明するのではなく、問題を先鋭化させるためのものです。ここで自明とされているものを何ひとつ持たなかったとしたら、何が残るでしょうか。
> 地球外生命体が地球に着陸したと想像してみてください。彼の出身地に家具があるかどうか、そこで私たちと同じように食べるのかまったく違うのか、誰にもわかりません。彼がそうしたことを何も知らないと仮定しましょう。彼は人々が椅子に座り、机に向かっているのを見ます。彼には何が見えるでしょうか。
> おそらく謎めいた形だけでしょう。家具、食事、共にする食事の経験がなければ、概念が欠けており、それらがなければ目の前で起こっていることを認識できません。より小さな規模では、異文化や異なる時代に身を置く誰もが同じ経験をします。それに対してあなたはすぐに目にします。そこでは家族が朝食をとっている、と。あなたのあらゆる予備知識がこの単純な認識に流れ込みます。家族、食事、家具についてのあなたの「偏見」が、理解を初めて可能にするのです。

「しかし、それは循環論法ではないでしょうか」 (DE: „Aber ist das nicht ein Zirkelschluss?“)とあなたは問うかもしれません。「自分がすでに知っているものを見ているだけではないか、と。」

はい、でもいいえ。それは循環ですが、同じ地点には戻りません。一周するごとに、次が始まるものを変化させます。文字を学ぶことを考えてみてください。初めは個々の文字を知っています。文字から言葉を理解します。言葉から文を理解します。しかしその後、文の理解が言葉の理解を改善します。そして改善された言葉の理解が、文字をこれまでとは違う見方をさせます。

これが解釈学的循環であり、理解と解釈の古い技法である解釈学にちなんで名づけられています。それは日常的な経験を記述します。私たちは全体を部分から理解し、部分を全体から理解します。これは誤りではなく、理解そのものの構造なのです。

決定的なのは、生産的な先-判断と独断的な先-判断の違いです。生産的な先-判断は、外すことのできる眼鏡のようなものです。見る助けになりますが、それが眼鏡であることはわかっています。別の眼鏡のほうがよく合うなら、取り替えることができます。

例：「ドイツ人は時間を守る」。作業仮説としては役立ちます。ドイツ人との約束には、大学の慣習である15分の遅刻を見込みません。しかし、あなたは開かれたままでいます。このドイツ人は違うかもしれません。そして実際、彼は遅れてきます。あなたの先-判断は出発点として有益でしたが、修正可能でした。

それに対して独断的な偏見は、『オズの魔法使い』のエメラルドの都の緑の眼鏡のようなものです。そこでは誰もがそれをかけており、あまりに長い間かけているため、ほとんどの人が街がエメラルドグリーンだと思い込んでいます。しかし、それはただのガラスにすぎません。眼鏡を自分の目だと思う者は、もうそれを外すことができません。「すべてのドイツ人は時間を守る」 (DE: „Alle Deutschen sind pünktlich“)——そしてもし誰かが遅れてきたら、その人は「本当のドイツ人ではない」か、「規則を確認する例外」 (DE: „die Ausnahme, die die Regel bestätigt“)だということになります。その偏見は経験に対して免疫化します。

第2章の根本的懐疑は、同時にすべての偏見を取り除こうとする試みでした。そしてそれは必然的に失敗しました。「私は考える」のうちに、すでに言語、論理、自我の観念が潜んでいるからです。しかしその試みは無駄ではありませんでした。それは自らの前提を可視化しました。それによって得られたのは前提のない状態ではなく、むしろ自らの前提についての意識です。

> **[illegible]**
>
> あなたはちょうどこのテクストを読む際に、どのような先-判断を持ち込んでいるでしょうか。たとえば次のようなものが考えられます。哲学のテクストは難解であるとか、議論は論理的に構成されているべきだとか、著者はあなたを説得しようとしているとか、それは娯楽ではなく真理をめぐるものだとか。あなたの場合は別のものであるかもしれません。

また別の種類の実験です。この実験は何も証明せず、何かを表面化させます。その際に現れてくるものは、それを見出す人のものであり、別の人ではまったく違って見えるかもしれません。まさにこの章の主題はそれであり、反論ではありません。

そのような先-判断は生産的です。それらはテクストを正しく位置づける助けになります。それがなければ、人はそれを小説か取扱説明書だと思うかもしれません。

私たちの先-判断はどこから来るのでしょうか。大部分は伝統から来ます。すなわち、私たちが育つ文化、話す言語、聞く物語からです。

伝統には、何世代もの凝縮された経験が潜んでいます。そのすべてが真であるわけでも、今日なお有効であるわけでもありません。しかしそれは豊かな出発点です。

その代案は、ゼロから始めることでしょう。各世代が車輪を再発明しなければならなくなります。火の起こし方。ある種の木の実が有毒であること。協力が闘争よりもうまくいくことが多いこと。実践的検証を経てきた何百万もの先-判断。

それでも、どの子どもも多くのことを新たに学びます。赤ん坊はこの知識なしに生まれてきます。それぞれが、火が熱いことを自ら経験しなければなりません。ある種のことはそのようにしてしか学べません。しかし子どもはひとりで学ぶのではありません。両親、教師、周囲全体が凝縮された経験を手渡します。コンロの熱さへの警告として、物語として、学校として。各世代は知識をもう一度自分のものにしますが、無からではなく、前の世代の手からです。そのうちに文化が再生産されます。文化は書物のうちにだけではなく、この伝達のうちに生きているのです。

技術は、先-判断を持たないことにあるのではなく、それらを透明にすることにあります。知ることです。これらは私の出発点である。それらが私をここまで連れてきた。しかし私はそれらを検証し、改訂し、さらに発展させることができる。

実際にはどうするのでしょうか。自問してみてください。そもそもなぜ私はそう考えるのか。この確信はどこから来るのか。どのような経験が根底にあるのか。何が私を反対のことを確信させるだろうか。

最後の問いが決定的です。答えが「何もない」なら、あなたは生産的な先-判断ではなく、教義を発見したことになります。この問いは、反対のことを考えることのできる確信に当てはまります。第2章の前提は別の構造をしています。それらの反対は、それらを用いずには主張することさえできません。その試しは誰にでも開かれています。

最後に、この章が始まったときの偏見にこれらの問いを当てはめてみましょう。「偏見をもってはならない」 (DE: „Man darf keine Vorurteile haben.“)。それはどこから来るのでしょうか。あらゆる修正に対して免疫化する独断的な偏見との、もっともな経験からです。反対のことを確信させるのは何でしょうか。この章が提案した試み、すなわち前提なしにたった一文を読むことです。偏見についての偏見は、実践において実践的検証を経ませんでした。そのように検証する人は、偏見を先-判断に変え、それを修正します。それによってそれ自身が、

先-判断とは何かを示しました。先-判断とは、私たちがそこから出発しなければならない出発点であり、それ自体としては問題ではありません。それが誤解だったかどうかは、あらかじめではなく、事後になって初めて、その実践的検証において示されます。

認識の妨げに見えたもの、先-判断は、実は認識の条件であることがわかります。それらは、それに気づき、変える用意があるときに生産的になります。それらなしで済むと思い込む者は、それらを不可視にしただけです。それらを計算に入れる者は、それらを改善できます。

第5章 多くが一つになること——生きている象の原則

あなたはたくさんの個々の言葉を読みながら、一つのまとまった考えを理解しています。異なる音を聞きながら、一つの旋律を認識しています。無数の細部を見ながら、一つの光景を把握しています。あなたの心は、いかにして多くから一つをつくるのでしょうか。そして、その一つが生きているとは、どういう意味でしょうか。

このことをめぐる古い物語が、多くの版で語り伝えられています。六人の目の見えない学者が、象とは何かを知りたいと思っていました。彼らは象のいない国に住んでいましたが、この巨大な動物について聞いたことがありました。王は彼らを、象が実際には何であるかを突き止めるためにインドへ旅立たせました。

インドに着くと、彼らは案内役に連れられて、飼いならされた象のところへ行きました。六人の学者はその動物の周りに立ち、触れることで像を描き出そうとしました。

最初の学者は象の脚を触っていました。彼らが王のもとに戻ったとき、彼は次のように報告しました。「象は力強い柱のようなものです。強く、しっかりしていて、皮膚はざらざらしています。」（DE: „Ein Elefant ist wie eine mächtige Säule. Stark und fest, mit rauer Haut.“）

二人目の学者は鼻を触っていて、反論しました。「いいえ、象は大きな蛇のようなものです。長く、動きやすく、とても器用です。」（DE: „Nein, ein Elefant ist wie eine große Schlange. Lang und beweglich und sehr geschickt.“）

三人目の学者は耳を触っていました。「お二人とも間違っています！ 象は大きな扇のようなものです。薄くて幅が広く、動くことで

きます。」 DE: „Ihr irrt euch beide! Ein Elefant ist wie ein großer Fächer. Dünn und breit und er kann sich bewegen.“

四人目は腹に触れていました。「ナンセンスです！ 象は大きな壁のようなものです。高く、幅が広く、しっかりしています。」 DE: „Unsinn! Ein Elefant ist wie eine große Wand - hoch, breit und fest.“

五人目は尾をつかんでいました。「いいえ、象は一本の縄のようなものです。細く、しなやかで、毛が生えています。」 DE: „Nein, ein Elefant ist wie ein Seil - dünn, flexibel und behaart.“

六人目は牙を触っていました。「すべて間違いです！ 象は滑らかで硬い槍のようなものです。」 DE: „Alle falsch! Ein Elefant ist wie ein glatter, harter Speer.“

学者たちは言い争いを始めました。それぞれが、自分だけが真理を認識したと確信していました。他の者たちは勘違いしているか、嘘をついているに違いない、と。

この物語のよくある教訓は次のようなものです。誰もが真理の一部を持っている、と。異なる人々には異なる視点があり、そのすべてが尊重されるべきである、と。そこには多くの正しさがあります。誰も全体像を見ていないこと、あらゆる視点が何かを寄与しうること、傲慢さや不寛容は場違いであること。

なぜこの物語はこれほど説得力があるのでしょうか。なぜ私たちは、全員が部分的に正しいという解決を受け入れるのでしょうか。

この物語がうまくいくのは、異なる記述が互いに適合するからです。一頭の動物が本当にこれらすべての性質を持っていると想像できるからです。矛盾が一貫した全体像へと解消されるからです。そして何よりも、実際に象が存在するからです。

この最後の、何気なく述べられた前提に物語全体がかかっています。そして、まさにこのことがほとんど見落とされています。

したがって、この物語は、各人が自分自身の現実を持っていることを前提にしているのではなく、全員が同じ一つの現実へと関係していることを前提にしています。だからこそ、異なる視点は、単に同等に妥当なものとして並び立つ代わりに、互いに補い合うことができるのです。

> **7:**
>
> この物語が違った展開をしたと想像してみてください。六人の目の見えない男たちは、まったく別のものに触れていました。一人目は「象は一杯のワインのようなものだ」と言い DE: „Ein Elefant ist wie ein Glas Wein“）、二人目は「象は一握りの砂のようなもの

> だ」と言い DE: „Ein Elefant ist wie eine Handvoll Sand“）、三人目は「象は風のようなものだ」と言いました DE: „Ein Elefant ist wie der Wind“）。あなたはこの物語を同じくらい説得力があると思いますか？
> おそらくそうは思わないでしょう。それは完全に不自然です。私たちは、ここでは何かが根本的に間違っている、と考えるでしょう。食い違う報告は、共通の対象そのものを信じがたいものに見せてしまうのです。

同じ現実、異なる見方

同様の構造は、ポルトガルの詩人フェルナンド・ペソアに見られます。彼は「異名（ヘテロニム）」を生み出しました。それは単なる偽名ではなく、それぞれ独自の伝記、独自の文体、独自の世界観を持つ、完全な別の詩人たちです。アルベルト・カエイロは世界を直接的な感覚経験として見ます。リカルド・レイスは古典的秩序として見ます。アルヴァロ・デ・カンポスは近代的な断片化として見ます。三人とも同じ現実を見ていますが、それぞれが異なった見方をしています。ペソアは彼らを一つの意見へと統合せず、互いに生産的な対話をさせます。

しかし、ここには目の見えない男たちとの違いがあります。カエイロが世界の鼻を触ったのでもなく、カンポスが世界の脚を触ったのでもありません。三人のそれぞれが世界全体を見ています。ただ自分の立場から見ているだけです。カエイロが語ることは、レイスとカンポスによって初めて補完されるような部分的記述ではなく、世界を見る一つの完全な仕方です。カエイロだけを読む者は、その前に完全な一人の詩人を持っており、他の二人を読むことでさらに豊かになります。しかし、その人は以前も貧しくはなかったのです。

このようにして、容易に混同される二種類の視点が姿を現します。目の見えない男たちは部分をつかみます。鼻、脚、耳。彼らの報告は積み木であり、統合がそれらを組み立てます。すべてが合わさって初めて象が得られます。手がかり、測定値、証言はこのように機能します。それぞれ単独では不完全です。それに対してペソアの異名者たちは全体をつかみます。それぞれが一つの場所から現実全体を見ます。まるで、山を東から、あるいは西から見るように。そのつど山全体を見ています。彼らの統合は何かを組み立てるのではなく、豊かにします。

この混同は両方向に結果をもたらします。全体の見方を部分として扱う者は、それぞれに対して「あなたは不完全であり、他の者を必要

としている」と言い、敬意を払おうとしたまさにその瞬間に、その価値を下げています。逆に、部分を全体の見方へと格上げする者は、あらゆる手がかりをそれ自体の真理にしてしまい、共同での吟味が不可能になります。

そして、通常語られるこの物語ではもう一つのことが見落とされています。学者たちが触れている間、象はじっとしていません。「扇」はあおぎ、「蛇」は触り返してきます。彼らがつかもうとしている現実は、それ自体が動いています。このことが統合をより困難にし、同時により重要なものにしています。

日常の例が同じ原理を示しています。夜、台所から物音が聞こえます。それは何でしょうか。耳は、金属的な音を報告します。律動的な音です。嗅覚は玉ねぎの匂いを嗅ぎ取ります。記憶は野菜を刻む音を思い出します。経験は言います。「この時間にはたいてい、私の同居人が料理をします。」（DE: „Um diese Zeit kocht oft mein Mitbewohner.“）

すべての感覚と経験が協働しています。統合が成功するのは、すべてが同じ出来事へと関係しているからです。もしあなたの感覚がまったく別のことを報告したなら——金属音とバラの香りと子どもの誕生日の記憶——あなたは誤りを探すでしょうし、「異なる視点」について語ったりはしないでしょう。

あなたは都市についても、このように理解します。最初は見知らぬ、混乱させる場所です。一週間後には通勤の道がわかります。一ヶ月後にはお気に入りの場所が結晶化してきます。一年後には、さまざまな地区の魂がわかるようになります。

しかし、あなたが都市を知るあいだにも、都市は変化します。新しい建物が建ち、古い建物は取り壊され、人々は転居し、新しい人々が来ます。店は閉まり、また開き、季節が公園や街路を変貌させます。

したがって、「都市についての真理」（DE: „Wahrheit über die Stadt“）は、完成された像ではなく、生きた過程です。一年後にあなたが都市について語れることは、単なる意見よりは多く、しかし最後の言葉ではありません。次の年はいくつかのことを訂正し、ほとんどのことを保持します。あなたの成長する認識は、それ自体が変化する現実と出会います。この両方——発展したあなたの理解と、発展した都市——が、具体的な真理を形づくります。

事物そのものが変化することは、認識をより困難にしますが、同時に一つの通路を開きます。

通りを所与のものとして受け取る者は、通りを見ます。なぜそれがちょうどここを通っているのかを問う者は、古い川、もはや存在しない城壁、二百年前の二人の土地所有者の争いを見いだします。通りは同じです。その中で見えてくるものは異なります。

同じことは、固定して見えるほとんどすべてのものに当てはまります。ある言葉はかつて別の意味を持っていました。ある規則は、忘れられた機会に、抵抗に抗して導入されました。ある山脈はかつて海底でした。ある当然のことが、かつては人々が議論した新しい工夫でした。

吟味にとって、次のことが帰結します。何かが固定して見えるところでは、「いつからか」という問いが許されます。そして、その答えが日付であるところでは、その固定したものは生成したものであり、したがって別様でもありえたものです。

これはどこでも同じ程度に当てはまるわけではありません。交通規則の場合、規則そのものが日付を持っています。自然法則の場合、それについての私たちの知識が日付を持っています。「いつからか」という問いは両方に当てはまりますが、異なった仕方で当てはまります。

そして、それは吟味そのものにも当てはまります。この本が当然のこととして扱っている事柄——根拠が重みを持つこと、矛盾が許されること、主張は自らについて説明しなければならないこと——は、常に当然のことだったわけではありません。それは闘争の中で獲得されたものであり、再び失われうるものです。

したがって、変化するのは都市だけではなく、それを知る者だけでもありません。このことがどこまで及ぶのか、そして、あらゆる知ることは同時に介入であるということは、現実との一致が何を意味するのかが明らかになったときに初めて姿を現します。

信頼できる知識は、同じ現実についての異なる視点の統合を通じて生じます。これは意見の足し算ではありません。正当なのは、同じ事物へと関係し、一貫した像へと組み入れられうる視点です。どの見方も他の見方と同じくらい良いと考える人に対して、このことは次のことを意味します。認識可能な現実が存在する、と。一瞥でその現実を見ていると考える人に対しては、次のことを意味します。それは複数の視点を通じてのみ開かれる、と。同じことは、あなたが行為し、異なる懸念をまとめなければならないところにも当てはまります。

第6章 生きている全体

あなたは毎日、部分の総和以上のものとかかわっています。神秘的にでも超自然的にでもなく——まったく具体的に、日常的な仕方で。

6.1 突然「死んだ」コンピュータ

あなたのコンピュータが何時間も動いていたとします。すると突然——クラッシュです。画面が固まります。マウスを動かし、キーを押します。何も起こりません。すべての部分はまだそこにあります——プロセッサ、メモリ、ハードディスク、キーボード。何も消えていませんし、壊れてもいません。それにもかかわらず、コンピュータはある意味で「死んで」います。

何が起きたのでしょうか。組織化の原理が機能しなくなったのです。ハードウェアの部分はもはや協調した仕方で一緒に働くことができません。すべてを統率しているソフトウェアがクラッシュしたのです。機能しているシステムの生きている統一が壊れたのです。

再起動の後には、すべてが再び動きます。同じ部分ですが、再び組織化され、再び生きています。失われ、いま戻ってきたものは何でしょうか。部分ではなく、部分同士の相互作用です。確かに、誰かが再起動のきっかけを与えなければなりません。コンピュータは自分で自分の相互作用を回復するわけではありません。したがって、「死んでいる」と「生きている」はここでは比喩にすぎません。自分の働きによって自らを維持する象（第6.5節）とは違います。

6.2 機能するチーム——あるいは機能しないチーム

このことはグループワークからご存じでしょう。同じ人々が、見事に協力することもあれば、完全に失敗することもあります。「相性」が合っているときには、考えが飛び交い、誰もが互いを補い、結果は一人だけで達成できたはずのものより優れています。

別のときには——おそらく同じ人々でも——何も機能しません。誤解、権力争い、誰もが自分のことだけを考えます。結果は、各自が単独で働いた場合よりも悪くなります。

違いは何でしょうか。相互作用の質です。部分（人々）は同じです。しかし全体——機能しているグループ——は、あるときには存在し、別のときには存在しません。

このグループの質は、触れることも測定することもできません。それにもかかわらず、それは現実のものです。ときには、状況全体の中で最も重要なものであることさえあります。

6.3 音の中にはないメロディー

このことは音楽ではさらに明らかになります。あなたの好きな曲は、個々の音――ド、レ、ミ、ファ、ソ――から成り立っています。それらの音をピアノで一つずつ鳴らすことができます。しかしメロディーは個々の音の中にあるのではありません。メロディーは音同士の相互作用――秩序、リズム、調和――を通して初めて生じます。

同じ音でも、美しいメロディーにも、ひどい騒音にもなり得ます。鍵盤をでたらめに叩く子どもは、モーツァルトと同じ音を使っています。しかし、秩序、構造、組織化の原理が違いを生み出します。

さらに、同じメロディーを異なる調で、異なる楽器で、異なる速さで演奏することができます。具体的な音は変わります――しかし、メロディーはそれと分かる仕方で同じままです。このメロディーとは何でしょうか。音の総和以上のものですが、音なしには存在できないものです。

6.4 あなた自身の人生――出来事以上のもの

あなた自身の人生も一つの例です。それは無数の個々の瞬間――会話、経験、思考、決断――から成り立っています。しかし、あなたの人生はそれらの瞬間の単なる総和でしょうか。

自分の人生の物語を語るとき、あなたは個々の出来事だけを語るわけではありません。どのように筋が通っているか、どのようにテーマが展開するか、かつての子どもがどのように今日の人間になったかを語ります。あなたはパターン、発展、一本の赤い糸を認めます。

この赤い糸は、個々の出来事の中にはありません。それは、それらのつながり、発展、意味の一貫性を通して生じます。それにもかかわらず、それは現実のものです。

6.5 生きている全体としての象

六人の盲目の学者たちは、異なる部分を触って確かめます。しかし生きている象は、柱＋蛇＋扇＋壁＋綱＋槍以上のものです。

彼らが触れている間、象は反応します。象の鼻は探るように動き返します。耳は音を追います。全身は協調した動きの中にあります。象が一歩踏み出すとき、個々の部分が次々に動くのではなく――象全体がその一歩を踏み出します。

この生きている協調こそ、部分の機械的な列挙が見落とすものです。死んだ象には依然として脚も鼻も耳もありますが、名前だけです。鼻はもはや何も感じず、耳は音を追いません。すべてを統一された全体にする生命がなければ、部分でさえもはや以前のものではありません。

6.7 創発——何か新しいものが生じるとき

この現象には名前があります。創発です。創発的性質とは、全体の水準でのみ生じ、どの部分にも単独では属さない性質のことです。それらは部分だけから予測することはできません。ただし、部分がどのように組み合わさっているかを知れば、多くの場合には予測できます。これがすべての場合に、たとえば意識の場合に成功するかどうかは争われています。この名前によって何かが説明されるわけではありません。それは、ここで何か新しいものが現れると言っているのであり、その仕方は開かれたままにしています。

生命は、個々には生きていない化学的過程から創発します。意識もまた、私たちが見ることができる限りでは、何十億もの神経細胞に結びついていますが、そのどれも単独では意識を持ちません。文化は、個々にはまだ文化ではない人間の相互作用から創発します。

> ▯▯s▯▯▯▯▯▯▯▯
>
> この現象を確かめるために、この言葉は必要ありません。ご自身で比べてみてください。れんがの山と人が住んでいる家、単語のリストと何かを述べる文。何が現れるでしょうか。
>
> それが部分の数を超えた違いであるなら、あなたはここで問題になっている生きている全体を見つけたのです。

6.8 実際的な意義

この洞察は、あなたの真理の探求に影響を及ぼします。複雑な現象を理解しようとする人は、それを個々の部分に分解するだけでは十分ではありません——部分の相互作用も理解しなければなりません。あるものは全体においてのみ姿を現します。人の人格はその臓器のうちにではなく、物語の意味はその単語の数にあるのではありません。そして、生きている全体は発展し、反応し、変化するので、私たちがそれらについて認識したことは最後の言葉ではありません。それはそれらと歩調を合わせなければなりません。

6.9 象の原則に戻る

象の原則にとって、これは次のことを意味します。異なる視点の統合は機械的な足し算ではありません。それは、個々の観察の総和以上の生きている全体を把握するためのものです。

学者たちは、自分たちの報告を集めるだけでは十分ではありません。すべての部分がどのように組み合わさり、一つの協調し、行動し、反応する生きている存在になるかを理解しなければなりません。

真理の探求にとって、それは次のことを意味します。事実を集めることには、それらがどのようにつながっているか、どのようなパターンを形づくるか、そしてどのようなより大きな全体をもたらすかという問いが含まれます。

全体はその部分の総和以上のものです。この「以上」は神秘的なものではなく、多くの要素から機能する全体を作り出す組織化の原理です。ただ分解し収集するだけの人は、最後には部分を手にしていることになります——そして生きているつながりはその人から逃れ去っています。

第7章 何かがそれ自身と矛盾するとき

異なる見方を結びつけようとする人は、いつも矛盾に突き当たります。最初はこれが障害に見えます。

まっすぐな木の棒を手に取ってみてください。それを空中で持ってみてください——それはまっすぐです。水に浸してみてください——それは折れて見えます。真なのはどちらでしょうか。「棒はまっすぐである」（DE: „Der Stab ist gerade“）でしょうか、それとも「棒は折れている」（DE: „Der Stab ist gebrochen“）でしょうか。

両方の言明は直接的な観察に基づいています。どちらもその文脈では正しいのです。しかし両者は互いに矛盾します。この矛盾を無視することはできません——それは私たちに考え続けることを強います。

この矛盾に直面したとき、私たちには三つの基本的な可能性があります。

一方を偽だと宣言する：「目は水中では欺く」（DE: „Die Augen täuschen im Wasser“）——しかし、なぜそうなのでしょうか。そして、どちらの側が正しいのかをどうやって知るのでしょうか。この「解決」は説明するのではなく、ただ退けるだけです。観察はたしかに、誤って行われたり、悪い角度から見られたり、調整の狂った計器で測定されたりすることがあります。そうだったかどうかは、その観察がどの

ようにして成立したかを調べることによって示されるのであって、それが残りの全体像と矛盾することによって示されるのではありません。

両方を等しく正当だとみなす：「それは立場による」（DE: „Es kommt auf den Standpunkt an“）——しかし、それでは先へ進みません。私たちに必要なのは説明であって、多様性の指摘だけではありません。

矛盾の統一を見いだす：両方の観察を包み込み、それらがなぜ最初は矛盾して見えたのかを示す、より包括的な説明を展開します。

第三の可能性は、光の屈折の発見へと導きます。この理論は、空気中でのまっすぐさと水中での見かけの曲がりの両方を説明します。その結果は、元のどちらの観察よりも豊かです。

この思考の運動には名前があります。弁証法です。ギリシア語のディアレゲスタイ（dialegesthai）、つまり対話することに由来します。それは差異をぼやかすことでも、ソフィスト的な言葉遊びでもなく、見かけ上の対立を体系的に理解することです。

この構造には、同時に生じる三つの契機があります——これが止揚と呼ばれます。

保存：元の両方の観察は依然として妥当です。棒は実際にまっすぐであり、実際に折れて見えます。

克服：問題としての矛盾は解消します。私たちは今、なぜ両方が正しいのか、そして両者がどのように結びついているのかを理解します。

より高い水準への引き上げ：私たちの理解は成長しました。私たちは、両方の現象を説明し、新しい予測を可能にする包括的原理（屈折）を知っています。

この三重の意味での「止揚」は、矛盾が解決されるときに学習において起こることを記述しています。

日常的な例です。母親は息子にもっと勉強してほしいと思っています。息子はもっと自由な時間がほしいと思っています。最初はこれは解決不可能な矛盾に見えます——どちらか一方しか自分の望みを通せません。

母親は本当は何を望んでいるのでしょうか。彼女は息子の将来を心配しています。息子は本当は何を望んでいるのでしょうか。彼には自分の成長のための余地が必要です。

弁証法的解決は、なぜ口論が生じるのかという問いから始まります。母親は勉強を机に向かう時間で測り、息子は自由を監督のない時間で測ります——両者とも時間を数えています。もし両者が代わりに、息子が何をできるようになりたいのかを問うなら、尺度は移りま

す。自分のプロジェクト、楽器、プログラム、チームのなかで学ぶ人は、忍耐と自立を同時に練習します。時間の問題は、分裂させられることなく自ずと片付きます。なぜなら、それはもはや正しい問いではないからです。

結果において、元の両方の心配事は保存されます——将来への心配も、成長の余地も——その矛盾は克服され、解決はそれがどこから来たのかを説明します。共有された、あまりに狭い尺度からです。

すべての矛盾が、両方の側が並び立つように解決するわけではありません。あるときには一方の側が他方の側を生み出します。病原体が体内で広がり、それによって通常はそれを破壊する防御を呼び起こすようなものです。また、あるものは両側の間の移行そのものにほかなりません。運動のように、「この場所にある」（DE: „ist an diesem Ort“）でも「この場所にない」（DE: „ist nicht an diesem Ort“）でも捉えられないものです。その場合も、たとえ対立が残り続けるとしても、思考は両側が理解可能になる原理を求めます。

矛盾は真理へ向かう道の途上での破綻ではありません——それは思考を動かします。すべてが滞りなく進んでいる間は、私たちは、あなたがこれらの行を読みながら確認しているように、気づかずに傍らで確認しています。何かが合わないとき、私たちの期待が裏切られたときにはじめて、明示的な反省が始まります。私たちは立ち止まり、不思議に思い、それがどうしてありうるのかと問います。

それによって矛盾は認識の原動力となります。弁証法とは、矛盾を説明する包括的原理のうちに矛盾の統一を見いだすことです。矛盾のところで立ち止まる人は、二つの主張を抱えたままです。一方の側を切り捨てる人は、情報を失っています。両側が理解可能になる原理を求めることで、人はさらに先へ進みます。

第8章 すべては合致しなければならない——生きた探偵の原則

優れた探偵小説の多くには、こうした場面があります。エルキュール・ポアロは居間に全員を集めます。ミス・マープルは編み物を脇に置きます。シャーロック・ホームズはパイプに火をつけます。まもなく彼らは、すべてがどのように合致するかを示すでしょう。どんな手がかりも、どんな観察も、どんなに偶然の一言も——すべてがそれぞれの位置を得るのです。しかし現実はどんな探偵小説よりも複雑です。現実は、私たちが調査している間、静止してはくれません。

8.1 整合性の普遍的構造

探偵が居間で行うことは、他の場面にも見られます。診断を下す医師は、さまざまな症状、検査値、そして病歴の細部を、整合的な臨床像へと統合しなければなりません。あらゆる細部は、それ自身の位置を持たなければならないのです。

歴史家は、さまざまな史料、考古学的発見、同時代の報告を収集します。それらは過去についての整合的な像をもたらさなければなりません。

探偵の原則は次のように述べます。最終的には、すべてが合致しなければならない、と。いかなる観察も机の下に落ちてはならず、いかなる現象も説明されないまま残ってはなりません。それは、すべてのピースがそれぞれの場所を持つパズルのようなものです——ただし、このパズルは生きているのです。

8.2 現象を救う

あらゆる真正な観察、あらゆる現象、あらゆる手がかりは、私たちの最初の解釈が誤っていたとしても、真理の分け前を含んでいます。観察が完全に誤っていることはほとんどありません——観察は「救われる」（正しく位置づけられる）必要があります。理論や解釈は完全に誤っていることがあり、その場合は統合されずに捨てられます。

推理小説からの例です。執事は、神経質だったので怪しく見えました。それは真正な観察でした。「彼が殺人犯だ」(DE: „er ist der Mörder“) という解釈は誤りでした。正しい説明はこうです。彼は、犯行当日に酔っていたために仕事を失うことを恐れていたのです。神経質は現実のもので重要でした——しかし、それは事件の解明のためのものであって、殺人の動機としてではありません。

「現象を救う↑」——この表現はギリシャの天文学に由来します。「ソーゼイン・タ・ファイノメナ」、つまり現象を救うことです。そこでは、天空の運動を、いかなる観察も切り捨てられないように説明するという課題がそう呼ばれていました。それはつまり、すべての真正な観察が説明の中でその場を見つけなければならないという意味です。地動説が天動説に取って代わったとき、それにもかかわらずすべての観察が説明されなければなりませんでした——なぜ太陽が地球の周りを回っているように見えるのか。新しい理論は古い観察をよりよく説明するのです。

そして救うということはまた、まだ説明できないものを保存しておくということも意味します。優れた探偵は、どの解釈にも当てはまら

ない手がかりを捨てず、目に見えるように机の上に置きます。何を説明していないのかを知ることは、説明に属します。開かれた項目は、次のよりよい解釈が取り組む抵抗の契機なのです。

そして最も困難なケースがあります。嘘をつく手がかりです。犯人は偽の手がかりを置き、証人は、真理が自分自身を罪に問うことになるので、意識的に虚偽を述べます。ここで優れた探偵は捨てます——しかし、特定の仕方で捨てます。彼はその陳述を犯行経過についての報告としては削除し、それを独自の権利を持つ事実として救います。つまり、嘘がつかれたということ自体が一つの手がかりであり、しばしば最も価値のあるものなのです。偽の手がかりは、それが指し示す方向を示してはいません——それは、誰かがそれを置くことに利益を持っていたということを示しています。それゆえ、優れた探偵にとって捨てることは決して投げ捨てることではありません。欺きもまた現象として救われます——それがまさにそうであるところの現象として。

8.3 交通事故のパズル

状況：交通事故で、4人の目撃者がまったく異なる証言をしています。退職者はこう言います。「赤い車がはるかに速すぎる速度で走り、青い車に衝突した」 (DE: „Das rote Auto ist viel zu schnell gefahren und hat das blaue gerammt.“)。10代の若者はこう主張します。「青い車が赤信号を無視して交差点に入り、赤い車にぶつかった」 (DE: „Das blaue Auto ist bei Rot über die Ampel und hat das rote erwischt.“)。子連れの母親はこう述べます。「犬が道路に飛び出したので、両方とも急ブレーキをかけた」 (DE: „Ein Hund ist auf die Straße gelaufen, deshalb haben beide abrupt gebremst.“)。トラック運転手はこう言います。「信号機が故障していて、黄色の点滅だけだった」 (DE: „Die Ampel war defekt und blinkte nur gelb.“)。

表面的な反応は、懐疑的（「誰もが互いに矛盾しており、実際に何が起きたのかを私たちは決して知ることができない」 (DE: „Alle widersprechen sich, wir können nie wissen, was wirklich passiert ist“)）、権威主義的（「警察官だけが誰が正しいかを決定できる」 (DE: „Nur der Polizist kann entscheiden, wer recht hat“)）、あるいは相対主義的（「誰もがそれぞれの真理を持っており、すべてのヴァージョンが等しく妥当である」 (DE: „Jeder hat seine Wahrheit, alle Versionen sind gleich gültig“)）でしょう。

探偵的分析は異なる進め方をします。それはまず、すべての観察を真剣に受け取ります。どの陳述も、おそらく真実の要素を含んでいます。目撃者の誰も故意に嘘をついてはいません。次に、それぞれの人がどこから観察したのかを問います。退職者は脇に立っていて、速度はよく見えますが、耳は遠い。10代の若者は目は良いが、スマートフォンに気を取られていました。母親は子どものおかげで非常に注意深く、細部を見ます。トラック運転手は高い位置から全体を見渡し、交通状況を知っています。

最後に整合性を求めます。すべての陳述が部分的に正しいとすればどうなるでしょうか。可能な再構成はこうです。信号は故障していた（トラック運転手）。犬が道路に飛び出した（母親）。青い車は強くブレーキをかけ、停止線を越えてようやく止まった。赤い車は、その状況に対して速すぎたために後ろから青い車に突っ込んだ（退職者）。10代の若者は、青い車が停止線を越えて進むのを見た。それは事実です。「赤信号で」と彼は頭の中で付け加えたのです。なぜなら、信号は赤を示しておらず、誰が誰にぶつかったかは、スマートフォンを見ていたために見失われたからです。誰も完全に正しくはありませんでした。それぞれが何か正しいものを見ていたのです。救われるのは、各人が見たものであり、各人がそれから作り上げたものではありません。

8.5 抵抗が姿を現すとき

時には、最初の統合では十分ではありません。ある目撃者が他のすべての証言と矛盾します。ある観察が像に合いません。ある手がかりが美しい理論を乱します。ここで、優れた探偵の仕事と悪い探偵の仕事は道を分かちます。

悪い探偵は、邪魔になる手がかりを無視するか、曲げて形を合わせようとします。「証人は思い違いをしているに違いない」 (DE: „Der Zeuge muss sich irren.“)。「それは重要ではない。」「それはどうにか合うだろう」 (DE: „Das passt schon irgendwie.“)。

優れた探偵は、抵抗を真剣に受け取ります。それらは、現在の理論が不完全であるか誤っているという手がかりであり、邪魔になるものをも取り込む説明を探すことを強います。私たちの予想に頑固に抵抗するものが、真理への方向を示すのです。

8.6 探偵の仕事としての科学革命

胃の細菌ヘリコバクター・ピロリの発見は、探偵の原則が実際に機能していることを示しています。何十年もの間、胃潰瘍はストレス、刺激の強い食べ物、そして胃酸の過剰から生じるという教義が支配していました。酸性の胃の中では、一般的な見解によれば、細菌は長く生きられないはずでした。それでも細菌を見つけた者は、それを混入物と見なしました。

二人のオーストラリア人医師は、その邪魔になる発見を真剣に受け取りました。細菌はほとんどすべての潰瘍患者に見られ、培養することができました。二人のうちの一人は培養液を飲み、数日のうちに胃粘膜の炎症を発症しました——まだ潰瘍ではありませんが、その菌が胃で病気を引き起こすという証拠です。それが潰瘍も引き起こすことは、治療において初めて示されました。抗生物質によってそれを除いた人は、はるかに低い頻度でしか再発しませんでした。

その結果は、胃腸病学における激変でした。古い観察も救われました。ストレスと胃酸は確かに潰瘍を悪化させることがあります——ただ、主な原因は別のものなのです。

8.7 生きている整合性

探偵の原則は、探偵小説や科学研究のための方法であるだけではありません。あなたは、自分の周りで何が起きているかを理解しようとするとき、毎日それを適用しています。新聞を読むとき、人を理解するとき、問題を解決するとき——どこでも、あなたは手がかりを集め、それらを整合的な像に組み入れています。

しかし、この整合性は生きており、固定されたものではありません。新しい経験は全体像を変えることができ、邪魔になる観察は修正を強制し、より優れた理論がより劣った理論に取って代わります。それが真理の探求を、一回きりの出来事ではなく、動的なプロセスにします。

ここで、古い命題「真理は全体である」が最初の意味を得ます。真理は、個々の孤立した陳述の中にあるのではなく、すべての側面を整合的な全体へと体系的に統合することの中にあります。あらゆる手がかりは、その中に自分の位置を持ちます。説明の一部として、あるいは、目に見えるように保存された未解決の項目として。そして、全体は生きています。それは固定されたものでも閉じたものでもなく、新しい経験とより優れた統合を通じて発展します。もし明日新しい手がかりが現れても、像は捨てられるのではなく、拡張されるのです。

こうして真理は、体系的な整合性を通じて生じます。すべての手がかりが全体像に合致しなければなりません。この整合性は恣意的に構築されるのではなく、事物そのものの論理に従います。なぜなら、像は合致しない手がかりをも取り込まなければならないからです。優れた探偵のように考える人は、矛盾を障害ではなく手がかりとして受け取り、混乱した状況の中でも、忍耐強い作業を通じてしばしばつながりを見いだすのです。

第9章：手がかりのさまざまな種類

探偵の原則は私たちにこう示しました。最後にはすべてが噛み合い、どんな観察にも居場所がなければならない、と。ただし、噛み合わなければならないものは、すべてが同じ種類であるわけではありません。

9.1 無意識の能力の知恵

三十年にわたって患者を治療してきた経験豊かな医師を思い浮かべてください。若い患者が入ってきて、特定しにくい不調を訴えます。検査値は目立たず、すべての検査は陰性です。しかし経験豊かな医師は感じ取ります。「何かがおかしい」 (DE: „Da stimmt etwas nicht.“)と。彼はそれを正確に基礎づけることはできません——身体の構えの中の何か、声の響きの中の何か、何年にもわたって読み取ることを学んだ微細なニュアンスの中の何か。

それは非科学的でしょうか。信頼できないものでしょうか。

この感じの由来がどこにあるのかを見れば、そうではありません。それは無意識の能力であり、数十年にわたる経験の結果です。医師は何千人もの患者を見てきて、教科書には見出されない無数の細かいパターンを認識してきました。彼の「腹の感覚」は圧縮された経験です——高度に複雑ですが、意識的に分析することはできません。

無意識の実践は単なる習慣ではありません。能力には段階があります。初心者はあらゆる一歩を意識的に考えます。有能な人は規則を適用します。専門家は経験から行為します。しかし名人は、意識的な規則を超え出る知識の形式を発展させています。

名人のピアニストは、もはやあらゆる運指について考えません。彼の指は、どこへ行くべきかを「知って」います。経験豊かな職人は、

素材が正しく位置しているかどうかを感じ取ります。慣れた母親は、わが子の泣き声から、それが何を必要としているかを認識します。

この直感的な能力は、合理性の反対ではなく、合理性の形式の一つです。つまり、意識的な熟考なしに機能するほど深く練習された知識です。それもまた、練習された状況とは異なる状況では誤りうるのです。

9.2 手がかりのさまざまな質

探偵は複雑な事件に直面し、きわめて多様な種類の手がかりを評価しなければなりません。動かしがたい事実——指紋、DNA痕跡、監視カメラのタイムスタンプ——は偽造しにくいのですが、たいていは何がいつ起こったかしか示しません。それがどのように起こったかは目撃者が伝えますが、それには主観的な色がつき、しばしば矛盾する一方で、関連性には富んでいます。それがなぜ起こったかは、多くの場合、人が普段どのようにふるまうか、そして彼らの周囲、彼らの時代、彼らの共同体では何が当然とみなされているかという知識によってしか伝えられません。研究所の分析や測定は正確ですが、誰かが解釈するまでは黙したままです。経験知は速やかに解釈し、しばしば驚くほど的確に当てますが、個別の事例では自分自身について説明できず、せいぜい多くの事例を通じた実績によってしか示せません。

それぞれの種類は、別の種類が盲目であるところで強みを発揮します。だからこそ、経験を積んだ調査者は、互いに補い合い修正し合うようにそれらを組み合わせるのです。

9.3 日常の探偵たち——あなた自身の経験則

あなたはすでに、日常生活のなかで、その名前で呼ばなくても、手がかりを比較検討しています。技術的な問題が起きたときには、自分の感覚よりも説明書を信頼します。友人同士の喧嘩では、どんな助言書よりも、言葉にされていないものへの感覚を信頼します。祖母のレシピでは、もう何百回もうまくいっていますから、研究を求めたりはしません。あなたを動揺させるニュースでは、他の情報源が同じことを報じているかどうかを確かめます。

そうした経験則は重みづけです。どの領域で、どの種類の手がかりがどれだけ重く数えられるかを示しています。あなたはそれらを、当たりと外れから学びました。それは、長く信頼してきた情報源があなたを失望させたときに変化します。

9.4 統合の技法

働き方がまったく異なる、さまざまな種類の知を、どのように統合したらよいのでしょうか。

> ▯▯9▯▯▯▯▯▯▯
> あなたが中古車を買おうとしているところを想像してみてください。あなたの決断にはさまざまな「手がかり」が流れ込みます——それぞれに、あなたがどれほど重みを与えるかを確かめてみてください。
> 技術の専門家は、エンジン、ブレーキ、トランスミッションを客観的な基準で点検します。その報告は正確で、事実に基づいています。
> 長年自動車を修理してきた経験豊かな友人は、エンジン音を聞いて「いい音だ」と言います。自分が何を聞いているのか正確には説明できませんが、その評価はたいてい正確です。
> 販売員は、その車の来歴を話します——誰が乗っていたのか、どのように扱われたのか、なぜ売られるのか。主観的で利害が絡んでいますが、文脈に富んでいます。
> 試乗でのあなた自身の直観は、この車はしっくりくるか、あなたに合っているか、と問いかけます。客観化しにくいものですが、決断には重要です。
> オンラインのレビューは、他の人々がこのモデルにどれほど満足しているかを示します。統計的には意味がありますが、あなたのケースに必ずしも当てはまるとは限りません。
> 似た条件の中古車と比べた価格は客観的に測れますが、市場の状況や交渉の巧拙に左右されます。
> あなたはこれらすべての異なる種類の情報を、一つの決断へと統合しなければなりません。どれか一つだけでは十分ではありません——しかし、それらが合わさることで、重要な決断に十分耐えうる像が得られます。

ここでの発見は事実問題です。手がかりには、上で示されたのとは異なる重みづけが可能であり、そうする人は、どんな事実問題でもそうであるように、正しいか間違っているかのどちらかです。第2章の実験のようなものでは、形式が決めていました。ここでは事柄そのものが決めます。

9.5 情報源が互いに矛盾するとき

しかし、異なる手がかりが互いに矛盾するときはどうでしょうか。専門家は「技術的には申し分ない」と言い、経験豊かな友人は懐疑的です。販売員は信頼性を褒めちぎりますが、オンラインではこのモデルについての苦情が見つかります。

ここで、第7章が棒の例で示したことが戻ってきます。矛盾は認識を終わらせるのではなく、認識をさらに先へ進めるのです。それは次のような問いへと導きます。

この特定の領域で、どの情報源が最も信頼できるでしょうか。両方とも正しいが、異なる側面を強調している可能性はないでしょうか。矛盾を解消する追加情報はないでしょうか。私が見落としているかもしれないものは何でしょうか。

多くの場合、この深められた分析は、矛盾がなければ決して得られなかった洞察へと導きます。見かけ上の衝突は、よりよい理解への扉になります。

9.6 反省的な探偵の仕事

経験則には落とし穴があります。人は、もはや当てはまらない場面でも、それに気づかずに従ってしまいます。あなたが、自分の仕事についてもっともらしく説明できる職人を三度信じ、三度とも別の人が直さなければならなかったとします。このことに気づく人は、四度目には、ただ提案を点検するだけでなく、自分自身の点検の仕方をも点検します。私は、得られた所見よりも、うまい話に導かれていないでしょうか。私は主に、すでに信じていることを裏づけるものだけを探していないでしょうか。私は普段、どの種類の手がかりを見落としているでしょうか。

自分の思考についてのこの思考は、自発的な判断形成を、自らの誤りから学ぶ真理の探求へと変えます。

9.7 二つの一面性に抗して

手がかりの種類を知る者は、互いに鏡像をなす二つの一面性を見分けることができます。一つは科学主義です。それは、測定できるものだけを認め、経験や直観や文化的知識を雑音とみなします。そうすることで、この章の冒頭の医師が患者の姿勢のなかに見たものを見落とします。もう一つは非合理主義です。それは、あらゆる分析よりも感情

を信頼し、状況が新しいところでは凝縮された経験でさえ誤ることを見落とします。どちらも、ある一つの種類の手がかりを他のすべての上に立つ審判者にすることで、判断を一見容易にします。

これに対して、それぞれの種類がどこまで届くかを知っている者は、不完全な情報のもとでも責任をもって決断できます。

それぞれの種類の手がかりは、それ自身の質を持っており、それ自身の扱い方を要求します。無意識的熟達は無知ではなく、凝縮された経験です。動かしがたい事実、経験知、文化的文脈、直観を、互いに点検し合うように結びつける者は、データにも、自分自身の偏見にも引き渡されません。

第ii部：一致とは何を意味するか

第11章：存在しない比較——整合性と対応はいかにして結びつくか

私たちは9つの章にわたって、輪を広げながら同じことをしてきました。最初の文から確かめ、すべての確かめが立っている前提を発見し、出発点としての前判断を獲得し、視角を象の全体像に統合し、矛盾を扉として用い、探偵のように手がかりを重みづけ、統合してきました。そしてそのすべては私たちの経験のうちで起こったのです。ここから最も古い哲学的問いの一つが生まれます。言明は、現実と一致するときに真なのか、それとも私たちの他の確信と適合するときに真なのか。「対応」と「整合性↑」のあいだの論争は古く、一方の見解は古代にまで遡り、他方は100年ほど前にその明確な対立項として形成されました。おそらく両陣営は、私たちがずっと実践してきた相互作用を見誤っているのです。

11.1 見せかけのジレンマ

一見したところ、整合性と対応は互いに矛盾するように見えます。整合説はこう言います。「言明は、それが私たちの他のすべての根拠ある確信と適合するときに真である。」（DE：「Eine Aussage ist wahr, wenn sie zu all unseren anderen begründeten Überzeugungen passt.」）これはもっともに聞こえます。新しい考えは、私たちの知識全体に適合しなければなりません。

対応説はこう言います。「言明は、それが現実と対応する、つまり一致するときに真である。」（DE：「Eine Aussage ist wahr, wenn sie mit der Wirklichkeit korrespondiert, also übereinstimmt.」）（物理的な対応原理——それによれば、新しい理論は古い理論がすでに実証されたところで古い理論と一致しなければならない——と混同してはなりません。）これも同じようにもっともに聞こえます。どんなに美しい内的な整合性でも、それが現実と何の関係もなければ何の役に立つでしょう。

両方には強力な論拠があります。整合説は、確かめがいずれにせよ文脈のうちでしか行えないところ、つまり論理学と数学に本拠を持っています。言明は、体系の原理から導出できるときに証明されます。誰も三角形を世界にかざして比べたりはしません。そこからこの説は一般化します。真であるとは、取り込んで適合させることができるもののことです。こうしてこの説は、現実と比較することの困難を巧みに避けますが、しかし単にそれを避けているだけです。つまり、この一致がどのようにして成立するのかという問いを未回答のままにしているのです。

対応説は反論します。では、何が真理を美しい空想から区別するのでしょう。妄想体系は完全に整合的でありえます——しかしそれは現実と何の関係もありません。

11.2 学ばれた内と外の分離

どちらの理論も同じ差異を前提しています。こちらには精神、あちらには世界。その差異がどこから来たのかを問うと、それらの理論のうちで真であるものが示されます。それは私たちにとってあまりに自明なので、かつてそれを学んだことを忘れてしまっています。

赤ん坊は、自分と世界との境界をまず築き上げなければなりません。そしてそれをつくり上げるのは、まさに抵抗においてです。ボールは転がり去り、欲しいからといって戻ってはきません。飢えは、それが現れたからといってすぐに満たされるわけではありません。母親は出て行き、望んでも呼び戻せません。願いに従わないものにおいて、差異が生じます。あちら外には、独自の規則に従う何かがある、そしてこちらに私がいる。

この分離は一つの成果であり、現代人はそのうちに完全に生きています。電気をつけたままにしたかどうか確信がもてないとき、長く考え込んだりはせず、見に行きます。誰かが庭にUFOが立っていると主張するなら、まずそれが自分の知っているすべてと適合するかどうかを検証します。そして最初から的外れだと思わなければ、庭へ行きます。その際、明らかなことがあります。ある種のことは精神のうちでは決定できません。見に行き、触れ、測り、問いただされなければなりません。モデルを世界で検証するのです。まさにこれが対応説のうちで真なるものです。ただしそれは理論ではなく、学ばれた生活実践です。その実験を伴う科学全体が、その洗練された形態です。

そこで学ばれるのは分離であり、検証ではありません。何かを期待し、従わないものに突き当たり、別のやり方を試みる。赤ん坊はすで

にそうしています。この検証することにおいて、赤ん坊は分離を初めて学びます。その上に築かれるものは歴史を持ち、どこでも同じではありません。科学の方法、第10章で扱う情報源の重みづけ、さらには他者に根拠を負うという明示された規則もそうです。検証することのうちには、誰かがそれを口にする前からこの規則が潜んでいます（第1章と11a.1）。学ばれたものはより良くなることもあれば、再び失われることもあります。それが学ばれた検証することは、それに先行しています。

11.3 私たちが確かめるためのすべてのもの

> ▯▯1o▯▯▯▯▯▯▯▯▯▯▯▯▯▯▯▯
> 対応説が語り、そして私たちが自分で見て確かめることが実行しているように思われる、思考と現実のあいだの「比較」は、実際に起こるのでしょうか。自分で確かめてみてください。「雨が降っている」と言うとき、あなたは頭の中の思考と頭の外の雨を比較していますか。

通常の場合、私は雨のことをまったく考えていません。私は食卓に座り、窓枠に打ちつける音を聞き、通りが暗く光るのを見て——雨が降っている、と思います。ここでは思考は知覚の結論として後に続きます。何かが問いを立てるときにはじめて、方向が逆転します。誰かが雨が降っていると主張する。私は上着なしで出かけたい。その音は暖房の音かもしれない。これは小さな不思議です。つまり、何かが私たちの想定どおりではないかもしれない、ということ。そして今、私は考え直します。あるいは見ます——たいていは交互に両方を行います。思考が先にあり、主張として、問いとして、予期として、それに属する知覚を求めます。私は窓の外を見、ドアを開けて湿った空気の匂いを嗅ぎ、天気予報を読み、雨雲レーダーを見て、ちょうど入ってきた人に尋ねます。それが自分で見て確かめるということです。

このすべてはそれぞれ異なる仕方で媒介されています。自分自身の見ること、自分自身の聞くこと、計器、テクスト、他者の言葉。そしてこれらの経路は同じ重みを持つわけではありません——誰もそうは扱いません。もし私が雨を自分で見るなら、ガラスにつく水滴、敷居に跳ねるしぶき、あるいは外に出て濡れるなら、問いは答えられており、確かめを必要とする疑いは残りません。誰かが入ってきて雨が降っていると言うなら、その発言は彼が身につけているものと突き合わせて確かめられます。滴る傘、濡れた髪、濡れた服がそれを支えま

す。そのすべてが欠けているなら、私は不審になります——あるいは彼がちょうど車庫から来たばかりなら、そのときは彼がどれほど信頼できるかによります。天気予報と雨雲レーダーは、大きなところでは正しく、細部では間違っています。ある海岸では予報はしばしば当たらず、レーダーが雲の中に示すものは、下に届くものと常に同じではありません。自分の肌に当たる雨ほどには一義的でない源泉に重みを与えるには経験が必要です——そしてその重みは状況と地域に依存します。

しかし一点において、このすべては同じです。あなたが確かめるためのすべてのものは、あなたの認識の働きのうちに入り込みます——そしてこの重みづけもまさにそこで行われます。そこでだけ、あなたは比較し、秩序づけ、理解することができます。このことは感覚をはるかに超えて当てはまります——記憶、報告、書物、測定値、統計、証明、実験について。それらはすべて、あなたに出会い、あなたによって処理されてはじめて根拠になります。最も精巧な計器が測定するものでさえ、その読み取り値が取られ、その作動様式が理解され、その結果が位置づけられてはじめて認識の手段になります。

したがって、そのどれも単に主観的なものや非現実的なものではありません。雨は、あなたがそれを認識するために見なければならないからといって、現実性が減じるわけではありません。測定は、誰かがそれを評価しなければならないからといって、客観性が減じるわけではありません。このことが示すのはただ一つのことです。私たちには、すべての認識の外にあって、そこから自分の認識を世界の横に並べることができるような場所はない、ということです。私たちが真理を確かめるためのすべてのものは、同じ真理の実践のうちで私たちに出会います。

そして、そこで私たちに出会うすべてのもののうちに、二つの契機を区別することができます。いくつかのものは自ら押しつけてきます。雨は私が望もうと望むまいと降り、表示の数字はあるがままに立ち、証言者の報告はあるがままに読まれます。そして同時に、すべては能動的に処理されます。理解され、位置づけられ、重みづけられ、疑われます。認識はいずれか一方だけで成り立つことはありません——思考でさえ、頭から離れない旋律のように自ら押しつけてくることがあり、見ることでさえ、視線、歩み、ガラスによって方向づけられ得ます。しかし、どちらの契機が主導するかという差異に、私たちの確かめの全体がかかっています。雨が降っているかどうか確信がないなら、私は熟考をやめて見に行きます——気圧計の読み取りであれ、外にいた人の言葉であれ、私に自ら押しつけてくるものを求めます。

ここにもまた、古い論争が覆い隠している素朴な洞察があります。対応は内容について問います。私たちに届くものは事物に的中しているか。整合性は形式について問います。認識されたものは、認識されたものの残りと適合するか。しかし内容と形式は、別々の二つの場所で出会うのではありません。形づくることなしに内容を手にすることはできず、内容なしに形式が確かめることはありません——両者は同じ遂行のうちで出会い、そしてすでにここに、二つの理論が互いを必要とするであろうことが予見されます。

11.3a 実際に起こる比較

これは、現実との比較が幻想だという意味でしょうか。それは誤った結論でしょう。想像されているのは、深い裂け目を越えた比較だけです。こちらに完成した思考、あちらに完成した世界、そしてその中間に、両者を並べて保持できるような立場がある——それが、存在しない比較です。実際の比較はもっと日常的であり、絶えず、両方向に走っています。通常は知覚が先に来て、それを把握する思考は後に続くものに対して自らを実証しなければなりません。問いが先にあるところでは、思考はそれに属する知覚を求めます。私は「雨が降っている」と思い、水滴を見ます——思考は、自ら押しつけてくるものに対して自らを実証します。予期は満たされるか、外れます。報告は測定と一致するか、測定と矛盾します。記憶は文書によって確認されるか、訂正されます。

そして確かめの手段は互いを制御します。砂漠では、水平線の上に水がたまっているように見えます。私はそれに向かって歩きますが、それは後退します——見ることは、歩くことが償還しない何かを示しました。私の前に物体があるように見えます。私はそれをつかもうとしますが、手は空気をつかみます。同じことは、もはやいかなる目も届かないところでも当てはまります。誰もウイルスや初期宇宙、ある国の人口を見ることはありません——私たちは顕微鏡、痕跡、一連の測定、統計、報告を用いて作業し、そこでも確かめは、異なる仕方で媒介されたアプローチを互いに関係づけることに存します。一つの測定方法が他を制御し、予測は後の結果と照らし合わせて測定され、独立した複数の手が実験を繰り返します。しかし二つのアプローチの単なる一致は、遠くまで届きません——夢もまた複数の感覚を欺くことができ、妄想は丸く感じられることがあります。確かめは、成長することによって厳格になります。視線の角度を変えながら、行為を繰り

返しながら、独立に見る他者を通して、事物が法則に従って応答する介入によって、です。

このように理解するなら、二つの古い言葉は正確なことを言っています。対応とは、思考が事物の第二の、心的な複製であるという意味ではありません。それは、私たちの異なるアプローチが、事物によって共に支えられ、あるいは共に訂正されることを自ら許すという事実のうちに姿を現します。整合性とは、私たちが思いどおりに思考を矛盾なく並べるという意味ではありません。それは、すべてのアプローチが自分の場所を受け取り、妨げとなる経験が抑圧されない、その秩序のことです。前者がなければ、閉じた妄想が真理として通用しかねません。後者がなければ、印象、測定、報告は意味のない堆積のままでしょう。ここで、二つの理論が切り離してきたものが共に成長し始めます。

それらがどう結びつくかは、整合性をここで行っているように広く取るなら、より正確に言うことができます。つまり、思考同士が適合するだけでなく、私たちに出会うすべてのものと、自ら押しつけてくるものとも適合することとして。この広い意味では、対応しないものは整合的でもありません。経験が衝突するような考えは、誰かが知り、想定していることの残りともはや適合しません——そしてこの断絶は、論理的な断絶が起こるのと同じ文脈のうちで起こります。したがって、対応を確かめることは、整合性を確かめることの傍らにある第二の手続きではなく、その最も要求の多い場合です。つまり、抵抗するものが考え直すことによって取り除けない場合です。狭い意味では、すなわち思考同士の単なる適合として、対応説はその反論を保ちます。妄想はそれ自体として完全に整合的でありえます。妄想を真理から区別するのは、予期しないことが決して起こらないことではありません。予期しないことは、後から妄想のうちに組み込まれます。妄想に欠けているのは、自分自身では与えることができなかった答えを妥当なものとして認める用意です。妄想は、いかなる再解釈によっても取り除けない抵抗すら再解釈してしまいます。

それによって抵抗もまた規定されます。抵抗は、外部の現実が内側の思考に突き当たる衝撃ではなく、ある文脈がもはやまとまりを持たないというしるしです——そして、まだそうでないものを整合的にしなければならないというしるしです。

そしてこの比較のうちでもう一つのことが起こります。私たちはそこから、内と外の区別を前提する代わりに獲得します。いくつかのものは方向づけることができ、他のものは自ら押しつけてくるから、見られたものと触れられたものが食い違うことがあるから、願いが印象に対して敗れるから、子どもはすでに線を引きます。これは私に属

し、あれは自分自身の法則に従う、と——子どもはつかもうとして届かず、ぶつかり、倒れ、再び試み、そして徐々に自分の身体、他者、世界を区別していきます。精神と世界の分離は、認識がまず架橋しなければならない深い裂け目ではありません。それは経験の結果であり、経験のうちで確かめ可能なままです。それによって生み出されるのは世界ではなく、何が私たちに属し、何が自分自身の法則に従うのかについての私たちの知識です。

11.3b 私たちは行為することによって確かめる

この章の例は、第3章があなたの子ども時代の食卓で示したことと共通点を持っています。水平線上の見せかけを暴くために、私はそれに向かって歩きました。見せかけの物体を確かめるために、私はそれをつかもうとしました。自分で見て確かめるために、私はドアを開けました。確かめの手段は、テーブルの上のカードのように静かに並べて置かれていたのではありません——それらは私の行為することによって初めて働き出しました。私は壁が空洞かどうかを知りたい——そしてノックします。科学は体系的に同じことをします。科学は意図的に条件を変え、計器を作り、繰り返し、予測し、介入します。行為のうちで事物は答えます——事物は期待に屈するか、それに抵抗します。私が近づくと水が後退することを私が経験するのは、ただ私が近づくからにほかなりません。

このことから、人はこう結論するかもしれません。真であるのは、実行のうちで自らを実証するもの、機能するものだ、と。これには何か正しいところがあり、付録Bはその程度を示します。しかしそれは、行為することだけを裁判官にするとすぐに迷わせます——というのも、行為は把握されてはじめて何かを開示するからです。水が後退することが私に「あれは欺きだった」と教えるのは、私が見ることと歩くことの矛盾を考えるときだけです。この思考がなければ、後退は多くの出来事の一つにすぎないでしょう。それを把握する思考のない行為は認識ではなく、よろめき歩くことでしょう——酔っぱらいもまた物にぶつかり、物からぶつかられますが、何も認識していません。逆に、行動、経験、可能的な抵抗に決して身をさらさない思考は、空しいままにとどまるでしょう。両方は噛み合っています。私たちは理解から行為し、行為の結果によって理解を変えます。それゆえ「自らを実証する」こともまた、単なる機能すること以上の意味を持ちます。欺きはしばらく機能することができ、誤った理論は偶然に正しく予測することができ、イデオロギーは社会を効果的に秩序づけること

ができます。真であるのは、成長する確かめに耐えるもの、つまり異なるアプローチ、裏を取る確かめ、諸帰結に耐えるものです。

11.3c 事物そのものは私たちの現在の像以上のものである

これまでのことが罠に導くかどうかを決める問いが残っています。私たちが確かめるためのすべてのものが私たちの認識の働きのうちに現れるなら——私たちはそもそも現実世界を持っているのでしょうか、それとも常に私たちのそれについての像だけを持っているのでしょうか。私たちは泡の中に座っており、実際に存在するものは永遠にその後ろに隠れたままなのでしょうか。

この問いは、そのうちに正当な警告を宿しており、私たちはそれを保持したいと思います。私たちの現在の像は、必ずしも事物の全体ではありません。私たちは見落とすことができ、誤って重みづけることができ、不十分な秩序で作業することができます。したがって、その彼方についての思考は、さしあたり秩序のうちの一項目です。それは、私たちが今把握しているよりも多くのものが存在しうることをしっかりと保持します。この留保は、頭の中の概念として立つ必要はありません——もう一度見る子どもは、それを知らずに遂行しています。しかしそれはあらゆる確かめのうちに含まれています。自分の像がすでに事物の全体だと思い込む人は、もはや二度と見る根拠を持たず、あらゆる誤りに途方に暮れるでしょう。その彼方についての思考は、確かめの実践が暗黙のうちに含んでいることを明示するだけです。事物は、私たちのそれについての像以上のものでありうる、ということです。

ただ、この項目が覆うものと覆わないものを見なければなりません。私たちは多くの確定的な限界を知っています。目は、顕微鏡だけが示すものを分解しませんし、あらゆる計器には到達範囲があります。そのような限界は経験のうちで姿を現します——失敗において、矛盾において、より良い手段の成功においてです。そしてその彼方にあるものは開かれた問いのままであり、第二の世界ではありません。それとは異なるのは、認識そのものの限界が主張される場合です。もし誰かが、私たちの認識全体は単に私たちの像にすぎず、原理的に真の事物を取り逃がしていると主張したいなら、そのことを知るためには、その人はすでにこの事物を知り、それを私たちの像と比較しなければならないでしょう——しかしそうなら、それは彼が提示したような到達不可能な彼方ではないでしょう。認識全体の限界がどこにあると主張する者は誰でも、その判断はこの限界が許す以上のことを成し

遂げなければならないでしょう——それは、一方の側には決して到達しないとされる分割の両側について語るのです。原理的な認識の限界として、その彼方はそれ自身を解消します。

ただし、この反論の最も強いバージョンは、限界を比較によって引きません。それは内側から引きます。私たちの認識は、それ自身が持ってくる形式を持っています——すべてが空間と時間のうちに現れること、私たちが原因を問うこと、などです。それゆえ、と反論は続きます、私たちは事物を、それらがこれらの形式のうちに現れるかぎりでのみ認識し、形式そのものは事物がそれ自体においてあるところのものには属しません。物自体については、それ以上何も言うことができません。その彼方は、そのとき第二の対象ではなく、単に限界の印づけです。このように考えられた反論は、上で述べた秩序のうちの一項目に近く、そのかぎりで正当です。ただ、「形式は私たちに由来する」（DE：「die Formen stammen von uns」）から、形式が事物の形式でもないということは帰結しません。そのことは、両者のあいだの裂け目をすでに前提する場合にのみ帰結します。そして、必然的だと見なされていたいくつかの形式が、経験のうちで訂正可能であると証明されました。空間が学校幾何学の法則に従うことは、長いあいだすべての直観の条件と見なされていましたが、物理学は、質量が大きいところでは物体が運動する空間が異なって構成されていることを示しました。それによって私たちの直観の形式もまた訂正されるかどうかは、争うことができます。示されているのは、事物の空間がどのように構成されているかを、人は前もって知らなかったということです。したがって限界は前もって固定されてはいません。それは移動し、その移動こそが、これから語ろうとしている訂正です。

この項目が実際に覆っているものを私たちはよく知っています。訂正の運動です。予期が外れる。観察が適合しない。見落とされていた文書が像を変える。後の世代が、自明であり、それゆえ前の世代には見えなかった前提を発見する。遡って見ることでだけ、それが見えるようになります。ここに誤り、空隙、盲点があったのだ、と。原理的に何の仕方でも——決して、誰にも、何においても——姿を現し得ない誤りは、真理と区別がつかないでしょう。誤りについて語ることは意味を失うでしょう。

しかし、単にまだ姿を現していない誤りは存在します——ただしそれは遡及の洞察であって、今日のための分割ではありません。明日見るであろう誤りを、今日は健全な判断から区別することができません。そうでなければ、私はすでにそれを見ていたでしょう。それゆえ、「私は間違っているかもしれない」（DE：「ich könnte mich irren」）という一般的な留保は、特定の判断に対する反論ではありま

せん。それはすべての判断に等しく当てはまり、したがってどの判断も区別しません。

知られた真理が最後の言葉ではないということは、それ自身に属しています。それは真理プロセスのうちにあり、より良い秩序が来るかもしれません。それだけでは、それに矛盾する根拠にはなりません。可能的な誤りが実践的になるところ、つまり適合しない手がかり、矛盾、開かれた問い、さらなる探求が求められる保持された項目のところで、人は根拠をもってそれに矛盾することができます。そのとき矛盾は正当であり、それを通過した知られた真理は前のものよりも優れています。発見されていない誤りがより小さな誤りなのではありません。それはまだ私たちにとって近づきえないものであり、それまでは私たちは、自分たちが持つ最もよく根拠づけられた像を用いて作業し、その開かれた場所を見えるままに保ちます。

したがって、その彼方は対象の傍らにある隠れた対象ではありません。それは、まだ汲み尽くされていない事物の名前です——その事物においてさらなる経験が支えることができ、以前の秩序が破裂することができ、後の訂正が可能にすることができるものの名前です。事物そのものは私たちの現在の像以上のものですが、壁がそれを像から隔てているのではありません。その剰余は、私たちの像がその上で成長する運動のうちに、すなわち願いが砕ける抵抗のうちに姿を現します。それは、子どもがすでにその上で世界を発見したのと同じ抵抗です。

こうして、私たちが前に立っていた泡は泡ではありません。私たちはここに精神のうちに立ち、あそこに到達不可能な世界が横たわっているのではありません。私たちはつねにすでに世界との認識関係のうちに立っています。そしてまさに世界が私たちの思考どおりに動かないからこそ、世界は私たちの思考を訂正することができます。抵抗は対応と整合性のあいだの橋です。抵抗のうちで、事物は私たちの遂行のうちで自らを知らせます——思考のうちで、その知らせは文脈を受け取ります。

11.4 道しるべとしての抵抗

日常生活では、この抵抗はおよそ次のように自らを知らせます。あなたは鍵を上着のポケットに入れたと確信しています。どんなに強く自分にそう言い聞かせても——ポケットは空のままです。あなたの願望的な思考は限界に突き当たり、この限界はあなたの経験のうちで抵抗として姿を現します。

あるいは、あなたは12掛ける13を計算して150を得ます。しばらくのあいだ、これは正しいと主張できます——しかし、あなたが体系的に確かめるやいなや（異なる計算の仕方を試す、他の人に尋ねる、電卓を使う）、抵抗が姿を現します。数学的現実は、たとえそれがあなたの最初の衝動と矛盾しても、貫かれます。

最後に、あなたは車に十分なガソリンがあると確信しています。この確信は、あなたの記憶（「先週給油した」（DE：「Ich habe letzte Woche getankt」））およびあなたの計画（「空港まで運転したい」（DE：「Ich will zum Flughafen fahren」））と整合的です。しかし途中でエンジンが止まり、燃料計は空を示します。あなたの整合的な確信は、抵抗する現実の限界に突き当たり、あなたは、扱いにくい現象をも説明する新たな整合性を展開しなければなりません（「私は間違っていた」（DE：「Ich habe mich geirrt」）——または「タンクに穴があいている」（DE：「Der Tank hat ein Leck」））。客観性は、前の段階がすでに指し示していたところ、すなわち経験のうちの抵抗において姿を現します。

11.5 整合性と対応はいかにして共に働くか

これによって、整合性と対応がどのように共に働くかを言うことができます。それらは二つの手続きではなく、一つです。整合性は、すべての経験と確信が一つの整合的な全体を形成することを要求します。事件の終わりの探偵の場合と同様に、あらゆる手がかりが自分の場所を持たなければなりません。対応を確かめることは、その最も厳格な場合です。いかなる再解釈によっても取り除けないものもまた、自分の場所を見いださなければならない、という場合です。

アインシュタインの相対性理論を考えてみてください。それは、ニュートンが説明したすべての現象を説明し（以前の知識との整合性）、ニュートンの理論が半世紀にわたって失敗してきた古い扱いにくい観察、すなわち水星の軌道の回転を説明し（対応）、すべてを一つの優雅な理論に収め（体系的な整合性）、そして自らを実証する新たな予測を立てなければなりませんでした（未来の対応）。

それによって理論は完成したわけではありません。理論は新しい観察、新しい実験、新しい応用に対して自らを実証し続けます。それが空間、時間、重力について言うことは、あまりに多くの確かめに耐えてきたので、知られたものと見なしてよいでしょう。より包括的な理論は、相対性理論がニュートン力学を自らのうちに取り込んだように、それを単に拒否するのではなく自らのうちに取り込むでしょう。

11.6 なぜこの洞察は私たちを解放するのか

この認識は、誤って立てられた問題から私たちを解放します。私たちは裂け目を越えて比較を行う必要はありません——ここに精神、あそこに世界、そしてその中間には存在しない立場。私たちはただ、探偵のように、私たちの経験のすべての契機を注意深く統合し、抵抗に目を配るだけでよいのです。

それによって「外界」が失われることはありません。それは抵抗のうちに姿を現します。「内的世界」も閉ざされてはいません。それは抵抗する経験と絶えざる交流のうちにあります。客観性は、経験のすべての契機の統合を通じて可能になり、主観性は、この統合が起こる場です。

探偵の原則と同じです。すべての手がかりは考慮に入れられなければならず、それらは一つの整合的な物語を形成しなければならず、その物語は実際に起こったことを説明しなければなりません。「現実」は、この統合のプロセスにおいて、持続的に抵抗するものとして姿を現します。

これによって、事柄の半分は明らかになりました。確かめることと秩序づけることは同じ運動であり、両者のあいだに橋を架ける必要はない、ということです。もう半分は開かれたままです——すなわち、両方が経験に耐えるとき、一方の秩序を他方の秩序から区別するものは何か、という問題です。それはまさに分節化そのものの問いです。答えの一部は第19章によって与えられます。より良い秩序は、他方の現象を救い、他方が説明しないことを説明します。両方が同じだけのことを成し遂げるところでは、問いはここでは開かれたままです。

11.7 実践的応用

真理の探求にとって、これは次のことを意味します。あなたは整合性と対応のどちらかを選ぶ必要はありません。両方は一つのプロセスにおいて共に働きます。

新しい情報を受け取ったとき、自問してください。それはあなたがすでに知っていることに適合するだろうか。そして、より厳格には、それは、あるいはあなたの像は、いかなる再解釈によっても取り除けないものに突き当たるだろうか。第二の問いは、第一の問いとは別のテストではなく、その深刻な場合です。ある知見が適合しないなら、変更の前にまず、それがそもそも矛盾させられているものの範囲に属するかどうかを確かめなければなりません。これを否定する者は、自分の像をすでに前提することなしに、どうやってそれを認識するのか

を言うことができなければなりません。そうでなければ、その人は自分の像をあらゆる抵抗に対して守ってしまっていることになります。

理論が抵抗する事実の前で失敗するとき、介入の深さによって異なる三つの可能性があります。領域制限の場合、理論は有効なままですが、それは理論が主張した領域の一部においてのみであり、残りについては、理論を極限事例として含むより包括的な理論がそれに取って代わります——ニュートン力学は日常生活の速度と重力場に対して有効なままであり、アインシュタインの理論はそれを超えたところでも有効です。説明上の改訂の場合、観察された現象は有効なままですが、説明は根本的に改訂されなければなりません——燃焼は引き続き観察されますが、フロギストンと呼ばれた物質の放出ではなく、酸素の取り込みとして理解されます。最後に、方法上の転換の場合、問いそのものが誤って導かれており、新たに立てられなければなりません——より正確には、それは正直に答えられる問いへと分解します。占星術的な問い「星は私の運命について何を語っているのか」（DE：「Was sagen die Sterne über mein Schicksal?」）から、天文学的な問い「天体はどのように運動するのか」（DE：「Wie bewegen sich die Himmelskörper?」）が生じます——そしてその傍らで、もはや空に向かわない人間的な問い「私は自分の人生をどう解釈するのか」（DE：「Wie deute ich mein Leben?」）が生じます。新しい問いのどれも、古い問いを全面的に引き継ぐことはありません。古い問いのうちで認識を求めていたものと、意味を求めていたものは、それぞれ固有の場を見いだします。

すべての場合に重要なのは、現象をより良く説明すること、すなわちギリシャの科学がそう呼んだように、現象を「救う」ことです。体系的にいかなる現象も説明しない理論は科学理論ではなく、空語です。しかし歴史的な理論の大半は、少なくともいくつかの現象を説明しました——そしてこの部分的な真理は、より良い理論へと統合され、単に拒否されることはありません。

異なる経験が互いに適合させられないとき、これは、ここでまだ何かが発見されるべきだというしるしです。

こうして、整合説と対応説のあいだの古い論争は解消します。真理は、事実との単なる一致でも、思考の純粋な構成でもなく、両者の統合という生命のプロセスです。そこでは、経験のうちで自分で見て確かめることと、適合させることが噛み合っています。「客観性」と「主観性」のあいだで誰も選ぶ必要はありません。確かめる者は誰でも、すでに両方を結びつけているからです。認識可能な現実は存在しますが、それは真理の探求の遂行においてのみ開かれます。

ただし、この統合はあらゆるところで同じ材料を用いて働くわけではありません。この章の例がすでにそれを示唆しています。自分の肌に当たる雨は、入ってきて雨が降っていると言う人の言葉とは異なる仕方で抵抗します。このことがどこまで届くのか——そして確かめる者にとってそこから何が帰結するのか——は、次の歩みによって示されます。

さらに読む：思考 – 失わずに秩序づける (2025), 章 13

第11a章 押し返すもの——そしてその過程で私たちが変えるもの

11a.1 抵抗はいかに異なって自らを知らせるか

これまでの例は一つの種類のものでした。鍵はポケットの中にあるかないかです。計算は正しいか正しくないかです。タンクは空です。抵抗は、それが理解されるかどうかに関わりなく、素早く、曖昧さなく自らを知らせます。

それはどこでもそうであるわけではありません。そして、その違いは事柄そのものに属しています。

石は手応えのある仕方で抵抗します。石は、誰かが望むからといって持ち上がったりはしません。それでも持ち上げようとする人は、それを腕に感じます。フィードバックは即座に来て、紛れようがなく、誰もそれを言葉で消し去ることはできません。空中浮揚が報告されることはありますが、それは逸話の中だけであり、誰かがそれに頼れるような仕方では決してありません——このことによって、この報告もまた抵抗に照らして検証されるのです。

人は自分自身に対しては別の仕方で抵抗します。言語を学びたいと思う人は、壁ではなく一つの手強さにぶつかります。つまり、物事は考えていたよりもゆっくり進むのです。習慣を断ち切りたいと思う人は、決意だけでは何も成し遂げられないことを学びます。そして、自分は忍耐強いと思っていた人は、三度目の繰り返しのときに、自分について抱いていた像が当たっていなかったことを学びます。この抵抗はより柔らかく、よりゆっくりしており、より見落としやすいものです——しかし、それは同じように現実的であり、いかなる秤も測らないもの、すなわち自分自身についての考えを正すのです。

他の人々は、また別の仕方で抵抗します。誰かが考えた通りに反応するだろうという予期は、たいてい正確には当たりません。子ども

は予見されていたのとは違う振る舞いをし、同僚は発言を意図されていたのとは違う風に解釈し、口論の相手は、こちらが思いもしなかったような根拠を持っています。ここでは、抵抗は手強さとしてではなく、驚きとして自らを知らせます――そして、それは物についての像ではなく、誰かについての像を正すのです。

他の人々は、石には知られていない第二の仕方でも抵抗します。石は予期を反駁しますが、答えを要求しません。人は反論します。つまり、自分の主張を私の主張に対置し、なぜ私がそう考えるのかを尋ねるのです。この抵抗は、私が自分の予期を正すだけでは満足しません。彼が私に根拠を負っているのと同じように、私も彼に根拠を負っています。したがって、人々の間での検証は、決して人々に対する検証であるだけでなく、つねに人々とともにする検証でもあるのです。

持ち上がらない石は、私の予期が正しくなかったことを示します。なぜなのかは、私自身が見つけ出さなければなりません。他者は、自分が何を間違っていると思うか、そしてなぜそう思うかを私に言うことができます。それは、石の抵抗より強い抵抗ではなく、別の種類の抵抗です。つまり、根拠を与え、その根拠を私自身が検証しなければならない抵抗です。したがって、それは必ずしも常により良いものではありません。私が自分の推測を疑うがゆえに仕組む試みは、単に私が間違っていると言うだけの反論よりも多くのことを教えてくれることがあります。反論する人は、自分自身の根拠から、そして別の場所から判断します。彼は、私が自分の場所からは見ないものを見ます。それもまた私について見るのです。私が見落としているものを、私は自分に言うことはできません。そうでなければ、私はそれを見落とさなかったでしょう。どんなに注意深くても、いかなる視線も自分自身の盲点を見ることはありません。だからこそ、認識は他者の反論を必要とするのです。自分では与えることができなかった答え、そして第11.3a章で迷妄が真理から区別された際によりどころとなったその答えは、しばしば彼から来るのです。

これは、私が彼について作る像についても当てはまります。そのような像を、私はつねに作ります。私の向かいに座っている人についてもです。以前の出会いから、彼の役割から、私が一般に人々について知っていることから。彼が考えていることや意図していることを、私は見ません。私はそれを補います。この像は、彼がそこにいることによってではなく、彼が答えることによって正されます。したがって、それは近さに依存するというより、どこまで答えられるかに依存します。本は抵抗します。本は、それが言うことを言い、私が読みたいと思うことではありません。しかし、あらゆる問いに対して、本は同じことを言います。手紙は答えます。ただ遅れて、私が数日前に尋ね

たことに。電話やチャットでは、答えは即座に来ますが、人が示すものの一部についてだけです。声、書かれたもの、画面の中の像。他者は、互いに顔が見える出会いにおいて最も十全に答えます。言葉によって、その前のためらいによって、まなざしによって。

読むことも一つの出会いです。ただし不均等な出会いです。それはこのテキストで検証できます。あなたが異論を持つところで、テキストはそれに応答しません。その箇所をもう一度読んでも、テキストは同じことを言います。それでも、その著者はすべての人に語り、そのことにおいてあなたにも語っています。そしてあなたは、理解し、反論し、おそらく以前とは何かを違った風に見ることによって、彼に答えます。ただ、その答えは彼に届きません。それは聴くこと以上であり、会話未満です。一重半の理解です。読むものにおいては、二つの側面を区別できます。誰かが自分の考えを見出し、言い表した仕方、その関心、その調子、またその人について気になることも、その人のものです。それによって人は彼を認識します。そしてしばしば、それによって人は自分自身を再び認識します。つまり、自分と同じように、自分の時代と環境に立ち、困難を抱え、愛し、真理を求めている者を。これに対して、考えは、それが真である限り、もはや彼だけのものではありません。それを検証した人は、それを使って作業し、それを拡張し、それを伝えることができます。ちょうど、誰がその規則を見つけたかを知らずに計算するように。

最後に、人々の間で通用しているもの——書かれていない規則、予期、自明のこと——は、最も遅く抵抗し、最も把握しにくいものです。別の国に来た人は、自分がどこで誤っていたかに何か月も経って初めて気づくことがよくあります。それは一回の失敗においてではなく、誰も理由を言わないまま、物事が予期したのとは違う風に動き続けるということにおいてです。幼い頃からその規則を身につけた人は、それにまったく気づきません。彼がどうせそれに従っているのですから、それは彼に抵抗しません。

この系列は、真に現実的なものからより現実的でないものへの勾配を示していません。この系列が示すのは、抵抗が異なる速さで来るということ、明晰さにおいて異なるということ、そして見過ごされやすさにおいて異なるということです。石は無視できません。自分自身の焦りは何年も無視できます。異文化は、一度の失敗が事柄を決定的に迫ることが決してないまま、生涯にわたって誤解され得ます。

このことから次のことが帰結します。抵抗が柔らかければ柔らかいほど、それが気づかれ、考えられるかどうかに多くがかかっています。石の場合には、手応えだけで十分です。自分自身の焦りの場合には、それでは十分ではありません。三度目の繰り返しを偶然と受け取

る人は、何も学んでいません。前章で行為のすべてについて当てはまったこと――つまり、行いはそれが理解された限りにおいてのみ何かを開くということ――は、ここで実際的なものになります。誰も引き寄せてまとめない経験は過ぎ去り、抵抗が静かであればあるほど、いっそうたやすく過ぎ去るのです。

したがって、ただ生きられたものの多さは、まだ経験ではありません。同じことを三十年間して一度も検証しない人は、三十年の経験を持っているのではなく、一年の経験を三十回持っているのです。

11a.2 検証する者は変わる

抵抗は、介入する者に対して最も明晰に自らを知らせます。石に触れない者はその重さを学びません。外国語で一言も話さない者はその手強さを学びません。誰とも関わらない者は驚かされません。

このことには、同じ事柄に属する裏面があります。検証するために介入する者は、その過程で変わるのです。これは残念な副作用ではなく、同じ運動を反対側から見たものです。

そして、それは抵抗が多様であるのと同じくらい多様に生じます。

私が持ち上げた石は、その後は別の場所にあります。私が木を取った森は、以前とは違う森です。それが、「変化」という言葉で人がまず思い浮かべる、手に取れる形です。

言語を学ぶ者は自分自身を変えます――自分の知識だけでなく、自分が考え、言えることをも変えます。習慣をやめる者は、その後は別の可能性を持つ者になります。この変化は検証そのものです。人は、自分の手強さを、それに取り組むことによって学ぶのです。

他者と関わる者は、他者をも変えます。あらゆる問いは、問われた者のもとに何かを残し、あらゆる答えは、問う者のもとに何かを残します。誰かがどう考えるかを検証したいと思う者は、その人と話さなければなりません。そして、その人と話す者は、会話がなかったならそうであったであろう彼を、もはや見出してはいません。

そして、共有された諸条件に参加する者は、それらを変えます。自分の行うことによって、また自分の差し控えることによって。ここでも変化は最も遅く、最も目に見えません。ある言葉を違った風に使い、耳を傾ける者を見いだすことは、その言葉によって今後何が言えるかを変えます。

しかし、抵抗は何を教えるのでしょうか。

すべての抵抗が同じだけ多くを教えるわけではありません。拳が机を打つとき、机は持ちこたえますが、それは予期されたことです。

それは、すでに知っていたことを確認します。学ぶべき何かがあるのは、何かが予期されたことや意志されたことに収まらないところです——もし手が突き抜けたなら、もし石が見た目より重いなら、あるいはどれほど望んでも持ち上がらないなら。

このことは思考においても起こり得ます。計算が合いません。概念が、どれほど頻繁に試みても矛盾なしには規定できません。どちらも正しいと思われる二つの言明が互いを排除します。

それは、前章が記述したのと同じ過程です。つまり、ある連関がもはや結びつかなくなるのです。外から来るものと思考そのものに由来するものは、それゆえ二種類の検証ではありません。どちらも、同じ連関における断絶として自らを知らせるのです。

それでも一つの違いは存在します。ただ、それは種類に関わるのではなく、不可避性に関わります。介入する者は素早い答えを得て、それを聞き逃すことがほとんどできません。というのも、物事は、それが気に入ろうと気に入らなかろうと答えるからです。単なる思考の徹底においては、妨げになるものはより容易に取り込まれ得ます。人は補助仮定を見つけ、限界をずらし、その事例を例外だと宣言します。それゆえ、何かが押し返してくる場所へ行けという助言があります。抵抗は他の場所にも見出されますが、そこではそれを回避するのが最も難しいのです。

11a.3 フィードバック

抵抗において学ばれることは、認識する者を変えます。変えられた者は違った風に見て、違った風に介入します。違った介入は違った抵抗を生み出します——そしてそれが次の検証の対象です。認識は、それが認識するものの外に立ってはいません。

このテキストも、このことの例外ではありません。このテキストは、人がどのように検証するかを記述するだけではありません。実験を実行する者は、その後で違った仕方で検証できるのです。そして、このテキストが記述することは、その過程で起こり得ます。つまり、テキストからは、その中に入っていったのとは違う読者がそのとき現れるのです。

11a.4 抵抗が取り除かれるとき

抵抗は、物事が自らを知らせる当のものです。抵抗を何も経験しない者は、何も経験しません――経験すべき何ものもないからではなく、押し返し得るものを何も差し出さなかったからです。

このことは、誰も意図することなく起こり得ます。

最も単純な形は、自分自身による選択です。自分の予期を確認するものを読み、それに反するものを脇に置く者は、もはや何も押し返してこない空間を設えたのです。彼はその中に何年も正しいままでいることができます。それには何の費用もかからず、気分がよく、徹底的な検証と外見上は区別できません。彼は実際に証拠を持っています。しばしば大量に持っています。

第二の形は、反駁ではなく位置づけることです。反論を検証せず、それを位置づける者――「それはあちらの側の人間が言うことだ」(DE: „das sagen die von der anderen Seite“)――は、反論を打ち負かしたのではなく、反論から自分を解放したのです。違いは、その後で可能であることにあります。反駁は誤りであると判明し得ますが、位置づけはそうではありません。

第三の形は、仕組まれたものです。空間が外部から管理されているところでは、同じことが起こります。ただ、個人を通じてではありません。その中で読む者にとって、その違いは気づかれません。物事そのものにとっても同様です。このようなことが決定なしにどのように生じるのか、そしてそれがどのように検証され得るのかは、後に、正常なものの尺度が問題になるときに扱われます。

三つの場合すべてにおいて、結果は同じです。誤った意見が存続することは、より小さな害です。なぜなら、誤った意見は他の場所で崩れるからです。より深刻なのは、それに気づく可能性が失われることです。反論を自分の首から追い払う者は、自分の信念を守ったのではなく、自分の学ぶ能力を廃止したのです。彼は依然として信念を持っていますが、もはや検証を持っていません。そして、その違いを内部から見ることはできません。

このことはあらゆる方向に当てはまり、そこに試金石があります。自分が拒否する立場の人々において、そのメカニズムを認識するのは容易です。彼らは自分に都合のよいものだけを見て、自分たちを閉ざし、互いとだけ話します。それを自分自身において気づくのは、かなり困難です。その理由は事柄そのものにあります。切り離された空間は、内部からは開かれた空間とまったく同じに見えるのです。人は根拠を持ち、証拠を持ち、同意を持っています。欠けているのは、人が見ることのできるようなものではありません。

それにもかかわらず、それがどのように気づかれ得るかは、自分自身の信念の内容ではなく、自分自身の歴史への問いです。私にとって重要だった事柄において、私は最後にいつ方向転換させられたか。日付を挙げられる者は、何かが押し返してくる空間を持っています。何も挙げられない者は、ずっと正しかったか、あるいはしばらくの間何も差し出してこなかったかのどちらかです。

そしてこのことから、反論が何に値するかが帰結します。反論は、それが礼儀だから耐えなければならないものではありません。反論は、何かがそもそも検証され得る当のものです。そしてそれを取り除く者は、自分に平穏を調達したのではなく、フィードバックを切ってしまったのです。

しかし、石が動機とは違った仕方で抵抗し、違った仕方で変えられるとしたら——そのとき、星と物語、自然と文化には、同じ真理の諸形態が当てはまるのでしょうか。

さらに読む: 倫理学 – 私たちがすでに行っている善 (2026), 章 2 and 3

第iii部：さまざまに吟味する

第13章 現実の異なる諸領域

13.1 存在するものと、私たちが誰であるか

> **□□ 11: □□□□□□□□□□□□**
>
> 二つの文が真かどうかを調べてください。第一の文は「その机は茶色い。」□DE: „Der Tisch ist braun.“）であり、第二の文は「ハムレットは偉大な戯曲である。」□DE: „Hamlet ist ein großes Drama.“）です。それぞれの場合、あなたは何をしますか——何を使って調べますか。
> 机の場合は、一目で十分です。必要なら、より明るい光の下でもう一度見ればよいでしょう。ではハムレットの場合はどうでしょうか。見ることはそこで助けになりません。読むこと、比較すること、経験すること——おそらく生涯をかけて——が必要になるでしょう。

両方の文は何かを主張しており、どちらも調べることができます——しかし同じやり方ではありません。「真」という言葉は両方で同じことを意味します。異なるのは、何を使って調べるのか、そしてどのようなうちにその判断が成り立つのかが示されるのか、ということです。

自然科学は、存在するものを報告します。人文学は、私たちが誰であるか、そして私たちが何を生み出すかについて語ります。

13.2 作られたものと、作られていないもの

この区別は、第11章の内側と外側の区別と同様に、知覚できる差異に基づいています。

自然とは、考える存在によって生み出されたのではないもののことです。物理学の本は、原子がどのように振る舞うかを教えてくれます。そして実験は、東京でもベルリンでも同じ結果になります。自然

法則は、私たちが調べうる限り、文化や個人的な信念から独立して、どこでも等しく成り立ちます。

私たち自身が生み出すもの――技術、社会、文化――は、異なる仕方で振る舞います。おとぎ話は、勇気や臆病、試練を通じた人間の変化について何かを教えてくれます。それは実験によってではなく、人々が自分自身の内に知っている何かに触れることによって、そうするのです。

そして、その両者を区別する思考があります。異なる領域がなぜ異なるアプローチを必要とするのかを問うところで、それは哲学と呼ばれます。この章が行っているのも、同じことです。

13.3 真理が異なる仕方で自らを証明すること

第11a章が抵抗という形で示したように、現実はどこでも同じ仕方で自らを知らせるわけではありません。それに応じて、言明も異なる仕方で自らを証明します。そして、この意味においてのみ、真理の異なる諸形態について語ることができます。それらはおよそ第11a.1章の抵抗の諸種に対応しています。すなわち、石の触知できる抵抗から、人が自分自身の内で出会う強靭さ、人々の間で成り立つものに至るまでです。そして、根拠を求める他者の矛盾が、これらの確認のそれぞれに伴います。

経験的言明は、反復可能な試行と、的中する予測とにおいて自らを証明します。「水は0℃で凍る」（DE: „Wasser gefriert bei 0 °C“）は、通常の条件下で水が実際にこの温度で凍るならば真です。

実存的言明は、生きられた生において自らを証明します。「愛は憎しみよりも強い」（DE: „Liebe ist stärker als Hass“）は、この洞察に従って生きる人が、それがもたらす結果から――たとえ困難な場面でも――学ぶならば、自らを証明します。それが慰めになるというだけでは十分ではありません。慰めは、しばらくは助けになっても、それでも欺くことがあります。洞察は、それに反するかもしれない経験に耐えるときにはじめて証明されます。

文化的伝統は、それが世代を超えて人々が共に生き、その経験に対処するのを助けるという点で自らを証明します。それは手がかりであって、まだ証明ではありません。敵を作り出す伝統でさえ、共同体をまとめます。それが真と呼ばれるのは、それに当てはまらない経験や、それがもたらす結果にも耐えるときだけです。

芸術には独自の形式があります。小説、映画、ゲームのいずれであれ、描かれた世界は、それ自体で首尾一貫していなければなりませ

ん。そこに魔法があれば、それは認識可能な規則に従います。そうでなければ、読者は嘲笑で反応します。断絶は、期待を打ち破るために意図されることもありますが、その場合、それは何かを担っています。そして形式と内容は合致していなければなりません。混乱についての映画は混乱していてもよいが、恣意的に理解不能であってはなりません。芸術作品はさらに、もう一つの別の意味で真と呼ばれます。それは、真の友について語るときの意味です。すなわち、それが芸術作品があるべきものになっているとき、それがなければ隠されたままの何かを可視的にするとき、あるいは、なければ無言のままだった感情に形を与えるとき、芸術作品は真と呼ばれます。「ハムレットは偉大な戯曲である」（DE: „Hamlet ist ein großes Drama“）という判断は、この戯曲がそれを達成するならば、そのとき真です。それは、読むこと、比較すること、そして何世紀にもわたる多くの読者の経験のうちで確認されます。偉大な作品は、一つの解釈に尽きることなく、複数の解釈を支えます。ハムレットは復讐についての戯曲か、ためらいについてか、正しい行為の不可能性についてか。ハムレットは恣意的に解釈できるのではなく、汲み尽くすことができないのです。プロパガンダは、規定された一つの読み方しか許さず、キッチュも、感傷的な一つの読み方しか許しません。

13.5 カテゴリー錯誤

一つの領域の基準を別の領域に適用するとき、事態は難しくなります。

第9.7章の科学主義――測定できるものだけを認める立場――は、その結果によって見分けられます。それは愛をホルモン放出に、芸術を神経学的反応に、宗教を進化の副産物にしてしまいます。それはおそらく身体の中で起こることを説明しますが、恋人、読者、信者が意味していることを説明しません。

反対の誤りは、実存的真理や形象的真理を自然科学的な主張とみなす人によって犯されます。「地球は私たちの母である」（DE: „Die Erde ist unsere Mutter“）は、私たちが自然から生きており、それに依存しているという事実を支えるイメージです。地球が意識を持つ存在であるという主張としては、その文は偽です。

そして、あらゆる確信がそれぞれのやり方で真であると宣言する人は、これらの形式のそれぞれが、それに照らして失敗しうる基準を持っていることを見落としています。そうなると、誰もが自分の意見を「自分の真理」と呼ぶことができ、もはや対話は始まりません。

13.6 分離せずに区別する

異なる諸形式は、それらの間の論争が示唆するよりもまれにしか互いに矛盾しません。現代医学は、それらがどのように協働するかを示しています。研究は、どの治療法が測定可能に効くかを示します。医師と患者の経験知はデータを補完します。意味、希望、尊厳についての問いは、いかなる測定器もそれらを記録しなくても、癒しに属します。これらの形式のいずれも他に従属しておらず、それでもなお、それらは一つの健康理解のうちでつながり合っています。それでもなお互いに矛盾する場合、その矛盾は他のどんな矛盾とも同じであり、徹底的に取り組まれることを求めています。

しかし、人々が何かを生み出す諸領域に共通することが一つあります。テクスト、法、絵画、行為は、温度のように読み取られるものではありません。それを調べるためには、それを理解しなければなりません。

第15章 作られたものを理解する

15.1 あなたは絶えず解釈しています

> **▯▯12: ▯▯▯▯▯▯▯▯**
>
> あなたはいまこの瞬間、このページの記号に対して何をしていますか。文字だけを読んでいますか、それとも記号を解釈していますか。言葉だけを理解していますか、それとも意味を把握していますか。論理だけを吟味していますか、それとも調子、意図、語られていないものも感じ取っていますか。
> おそらくどれも後者であり、しかも努力なしにそうしています。

あなたがそこで行っていること、つまり解釈することには、第4章で読むことを学ぶ際にすでに登場した名前があります。解釈学（Hermeneutik）です。ギリシア語のヘルメーネウエイン（hermeneuein）、つまり詳しく述べる、解釈する、翻訳する、に由来します。ギリシア人はすでにそこに、神々と人間のあいだを翻訳する伝令神ヘルメスを聞き取っていました。解釈学が一つの学問になる前、それは、微笑みを解釈し、伝言を理解し、政治的演説を位置づけるときにあなたが行っていることでした。

15.2 目的

作り出されたものと自然物を区別するのは、意識的な目的です。石は重力の法則に従って落下します。意図なしにです。テクスト、絵画、法律、発明は、何かを成し遂げるために作られています。しかも、たいていはただ一人によってではなく、ただ一つの目的のためでもありません。あらゆる道具、あらゆるテクスト、あらゆる制度のうちには、目的の歴史があります。ある者が考案し、他の者たちが改良し、世代を超えて手渡してきた目的の歴史です。それゆえ、作り出されたものは解釈されうるのです。それを理解する者は、そのうちに保存された目的を読み取ります。

> **□□13: □□□□□□□□□□□□**
>
> テクストに対して、あなたにはどんな問いが浮かびますか。臓器に対しては？ 石に対しては？
> テクストに対しては「著者は何を望んでいるのか」□DE: „Was will der Autor?“）、臓器に対しては「それはどのような機能を果たしているのか」□DE: „Welche Funktion erfüllt es?“）――そして石に対してはそのどちらでもなく、せいぜい、それはどこから来たのか、何がそれをそのように形作ったのか、という問いでしょう。おそらくあなたは、目的についての問いを、考えずに、別様に、あるいは全く立てなかったでしょう。

石については、人は目的ではなく原因を問います。目的の問いが適切かどうかは、簡単な試金石によって示されます。すなわち、そのものが失敗しうるかどうかです。心臓は機能を失うことがあり、道具は壊れることがあります。落ちる石は何も取り逃がしません。それが誰の目的であるかは、その失敗が誰を害するかに現れます。石より上の段階では、合目的性は段階をなして高まります。生き物においては、合目的性は意識的な目的なしに現れます。心臓は血液循環に仕えますが、それは誰かがそう定めたからではなく、有機体がみずからを維持するからです。動物においては、これは目的を持った活動へと高まります。幹から幼虫を棒で取り出すニューカレドニアガラスは、目的を追求しており、棒が届かなければ、その棒でより長い棒を取ってきます。しかしそれは、自分の目的が正しいものであるかどうかを問わず、それを誰かに正当化することもできません。人間において付け加わるのはこのことです。人間は自分の目的そのものを対象にし、それを吟味し、秩序づけ、伝えることができます。テクスト、法律、芸術作品はこの能力から生まれます。段階を混同する者は対象を見誤りま

す——たとえば、生き物の合目的性が意識的な設計と解釈されたり、人間の意図が単なる自然過程と解釈されたりする場合です。

15.13 異なるテクストに関して人は真理をどのように語るのか

テクストが異なれば作られた目的も異なるので、人は異なる点を吟味し、真理についても異なる仕方で語ります。

報告については、それが語るとおりだったかどうかを問い、他の証言、痕跡、文書と突き合わせて吟味します。これに対して法律は、何かを語りもせず、何かを主張もしません。人は、その法律が目的を果たしているか、他の法律と整合しているか、そしてそれが正義にかなっているかを吟味します。法律についてのこうした判断は、他の判断と同様に真か偽かです。正義についての判断は、もちろん測定によって証明されるものではありません。それは、その根拠が、法律が影響を及ぼすすべての人の前で成り立つかどうか、そしてその法律が彼らの生活にもたらす結果に耐えられるかどうかによって証明されます。この基準が、かつて長らく有効だった法律にも及ぶことは、長く有効な法律でありながら、その対象となった人々の前で決して正当化できなかったあらゆる不正によって示されています。手紙については、書き手が書いていることを本気で言っているかどうか、つまりその誠実さが問われます。詩については、別の意味での真理が語られます。友人が真の友人であるというときの意味で。つまり、それがそうあるべきものであるかどうか、それまで見えなかったものを開いてくれるかどうか、です。広告については、まずそれが誰の利益になるのかが問われ、そのあとで初めて、その主張が正しいかどうかが問われます。小説に対して報告の問いを向ける人は、貸借対照表に小説の自由を認める人と同じくらい、小説を理解していません。

一つの種類のテクストしか知らない人は、その問いを唯一の問いと見なします。あたかも象の鼻を象全体と取り違える盲人のように。

15.3 それなしでは盲目になる問い

意図をもって何かを作り出す人は、素材を用い、ある者として、一定の仕方で、ある目的のためにそれを行います。そして、作り出されたものは、望むと望まざるとにかかわらず、効果を及ぼし続けます。これらの観点のそれぞれが、理解が立てる問いです。それが何の役に立つかは、それが欠けているときに分かります。

言葉遣い、つまりテクストの素材、その概念、その構造がなければ、あらゆる解釈は恣意的になります。何ものもそれを固定しないからです。作者と機会がなければ、死にゆく人の手紙を説明書のように読んでしまいます。作られ方、作品が置かれている伝統と手段を素通りする人は、ジャンルの規則であるものを個人的な霊感と取り違え、あるいはその逆をします。目的がなければ、詩は自然物になり、法律は文字の罠になります。そして、効果がなければ、あるテクストが当時と今日とで異なって読まれる理由は理解できないままです。

法学はこれらの問いをとりわけ明確に発展させてきました。というのも、法律はそれらなしには適用できないからです。法律は、その言葉遣い、その由来と規制意図、他の法律との関連、そしてその目的に基づいて解釈されます。考古学は、同じことを反対の側から示しています。石器はしばしば良好に保存されていますが、それが何のために作られたのかは謎のままであり、目的がもはや見分けられないところでは解釈は不確かになります。

文学研究のいくつかの潮流は、作者の意図を意図的に括弧に入れます。その根拠は、意図は近づきがたいものであり、作品は作者が意図した以上を語るというものです。それには一理あります。しかし、その括弧入れが方法になると、作り出されたものを自然物から区別しているまさにその点を素通りしてしまいます。詩を、それが何を望んでいるかを問わずに形式だけから調べるのは、ハンマーを、道具としての機能を把握せずに重さだけから調べるのに似ています。

15.8 再構成だけでは十分でないところ

理解において、これらの問いでは捉えられないことが起こることがあります。シェイクスピアを読み、バッハを聴き、フェルメールの絵を見る人は、ときに、人生について、それまで言葉にできなかった何かを突然理解します。しかもシェイクスピアについてではなく、自分自身についてです。

シェイクスピアの内面生活については、私たちはほとんど知りません。しかし、彼の戯曲は、彼の時代の動乱、古い確信の崩壊、新しい可能性と恐れに、私たちすべてに関わる形を与えています。そうした作品は世界開示的と呼ぶことができます。それらは作者が知っていた以上を語り、以前には存在しなかった理解の可能性を開きます。ここに、作者の意図に対する異論の正当性があります。

あらゆる作品がこうであるわけではありません。広告のスローガンは巧みに作られているかもしれませんが、何も開示しません。試金石

は、作品が人々の世界の見方を変えるか、それとも見慣れたものを新しい包装で確認するだけかです。いたるところに世界開示を見出す人は解釈しすぎており、どこにもそれを見出さない人は解釈が足りません。

15.10 作品の全体

これらの問いのどれ一つだけでも作品を捉えることはできません。しかし、それらはリストの項目のように並べられるのでもありません。作品の目的が、どの問いが最も重みを持つかを決めます。個人的な手紙では、何よりも、誰が、どのような機会にそれを書いたかが重要です。法律や偉大な作品では、重みは別のところにあります。そのように理解するなら、「真理は全体である」は、ここでも、作品について言えることをすべて集めることを意味するのではなく、作品にふさわしい仕方で問いを重みづけることを意味します。

したがって、良い解釈と悪い解釈を区別できます。良い解釈は、言葉遣いによって裏づけられており、一つの問いを絶対化するのではなく問いを互いに適合させ、作品を、見出したときよりも豊かに残します。そして、それは異質なものをその最も強い姿で読みます。反対者にできるだけ愚かな意図を帰属させることで反対者を理解する人は、反対者を論駁したのではなく、自分自身の戯画を論駁しています。

しかし、芸術作品の前では、あなたは素材、由来、目的について問うだけではありません——それがあなたに触れるかどうかを感じ取ります。一つの行為を、あなたは単に再構成するだけでなく、それが正義にかなうか不正であるかを感じます。ここでは、これらの問いのどれも捉えない接近が、みずからを知らせます。感情です。感情は、ときには、まだ言葉にされていない思考を運びます。ときには、どの個別の判断も捉えないもの、つまり全体が正しいかどうかを通報します。この感情とは何でしょうか。そして、それは理解とどのような関係にあるのでしょうか。

さらに読む: 倫理学 – 私たちがすでに行っている善 (2026), 章 6

第14章 心が考え、頭が感じるとき

14.1 統一を指し示す矛盾

あなたの同僚が現在の状況について自分の立場を説明します。事実は正しく、論証は決定的です。あなたの悟性はうなずきます。しかし同時に、あなたの感情は別の何かを感知します。特定の言葉への強調、一瞬のためらい、あまりにも滑らかすぎる話しぶり。「彼は何かを隠している」と。

悟性と感情は同じ状況を異なって評価します。そして、よくある問いはこうです。「頭に従うべきですか、それとも心に従うべきですか」 (DE: „Soll ich auf den Kopf hören oder auf das Herz?“)——あたかもその二つが互いに争う二つの世界であるかのように。

しかし、感情と悟性がそもそも互いに矛盾しうるということは、それらが同じ事柄について判断していることを示しています。互いに関わりのないものは争うことができません。目の見えない人々が互いに矛盾するのは、同じ象に触れているからです。もし一方が歯磨き粉のチューブを持ち、他方がコップ一杯の水を持っているなら、統合すべきものは何もないでしょう。

もちろん、違いはあります。悟性は自分の主張を正当化できます。悟性は手順を開示し、他の人々がそれを検証できます。感情は判断を言明することしかできません。「それは私には奇妙に思える」 (DE: „das kommt mir seltsam vor“)、「そこには不信感を抱く」 (DE: „da bin ich misstrauisch“)。そして、その判断がどこから来るのかは、さしあたり接近できないままです。感情は悟性と同じく真理要求を持っていますが、それを果たすことはできません、少なくともまだできません。このことは、すでに本書の冒頭で論じられました。そこから、両者のどちらかが優先するということにはなりません。そこから帰結するのは、両者の間の矛盾は決断ではなく課題であるということです。

> **▯▯14: ▯▯▯▯▯▯▯▯▯▯**
>
> 読み進めながら、二つの声に注意を向けてみてください。これらの行を追いながら、あなたの悟性は論証の論理を検証しています。そして同時に、あなたの感情は何を報告していますか。これは誠実に思えますか。語調は語られている内容と合っていますか。それはあなたの経験と一致していますか。

おそらく、両方が同時に動いています。論理的に正しいが感情的に間違っていると感じられる議論は、そのとき完全には納得させず、人

はもう一度それを検証します。感情に訴えかけるが正しくない呼びかけも、同様に納得させません。

14.3 感情が達成することと、感情が欺くところ

あなたの悟性は議論の手順を検証します。あなたの感情は、気づかれないうちに何千もの信号を集めています——姿勢、声、表情、語られていることと示されていることが合っているかどうか。それは第9章の経験豊かな医師のようです。ただしここでは、あなたはそれを自分自身のうちに気づきます。感情は、悟性が隠れた矛盾を発見する前に「それはあまりにも良すぎて真実とは思えない」(DE: „das klingt zu schön, um wahr zu sein“)と報告し、何がと言える前に「ここには何かしっくりこないものがある」(DE: „irgendetwas stimmt hier nicht“)と報告します。理論の場合、感情は、整合性や射程や未解決の点を一つひとつ検証する前に、その理論が首尾一貫しているかどうかを感じ取ります。

ただし、警告する感情が有効なのは、欺きが悟性を狙っている場合だけです。約百年にわたり、影響力は組織的に感情を経由する道を取ってきました。その方法は明示的に心理学に訴えかけます。遅くとも1950年代以来、このことは公に記述され批判されてきました。広告とプロパガンダは、悟性が問われる前に感情に届くイメージ、物語、刺激を用いて働きます。最も無防備なのは、『Zar und Zimmermann』の市長のように「ああ、私は賢くて利口だ、誰も私を欺けない！」と歌う人々です。個人的な交わりにおいては、感情は誠実さの良い検証者であり続けます。感情が組織的に狙われる場合には、感情は傍らに悟性を必要とします。

したがって感情は、解明を要求する発見であって、解明に取って代わる判断ではありません。

14.4 矛盾はどのように解消するのか

悟性が自分たちの経験のうちの生きたものを殺してしまうのではないか、言葉や概念が本質的なものを歪めてしまうのではないかと恐れる人々がいます。その心配は、思考がすべてを二者択一に分類する図式へ押し込むことになる場合には、正当です。検証するために分け、再び結び合わせる思考、分析し感じ取る思考は、両者以上のものであり、両者の対立を止揚します。それが理性と呼ばれます。

解消の仕方には二通りあります。あるときには、感情が悟性の見落とした何かに気づいています。その場合、その何かが見つかるとすぐに矛盾は解消し、振り返って見ると、感情が言い表せないまま報告していたものが何であったかが分かります。あるときにはその逆です。洞察は新しく正しいのですが、古い習慣がまだ報告を続けます。その場合、感情はすぐには消えず、新しい認識が確かなものであることが示されるにつれて徐々に消えていきます。

伝えられるところでは、古代ペルシア人は最も重要な事柄を二度審議しました。一度は酔った状態で、一度はしらふの状態で。両方の状態で持ちこたえたものだけが実行されました。これが、成功した判断における感情と悟性の関係です。両者が独立に同じ結果に到達するなら、それは強いしるしです。両者が、それぞれ相手に依存しているというだけの理由で互いを確認するなら、それはしるしではありません――錯覚もまた首尾一貫していると感じられるのです。そして、一致が目標であるからこそ、逸脱はまず言葉にできるものでなければなりません。決して互いに矛盾してはならない二人の検証者は、実のところ一人にすぎません。

したがって、矛盾がある場合の第一歩は、それを解消することではなく、それに気づき、それに耐えることです。統一をあまりにも早く作り出す人は、一方が他方を黙らせることによってのみ統一に到達します。そしてそのとき、統合ではなく、良心にやましさを感じない抑圧を持つことになります。何かが論理的に正しいように思われるのに感情的に間違っていると感じられるなら、分析が何を見落としているかもしれないかを問う価値があります。ある感情が強いが正当化できないなら、その感情がどのような経験に基づいているのか、そしてその経験が今でも有効かどうかを問う価値があります。

理性は、秩序に抵抗するものに対して開かれたままです。正当化できない感情は、理性にとって追跡すべき手がかりです。すべてが反発する正当化は、理性が再び検証する正当化です。

第iv部：吟味することを育み、守る

第19章 科学とパラダイム転換

18.1 自らを検証する検証

個々人が検証において行っていることは、共有され、教えられ、方法へと作り上げることができます。あなたは日々真理を探しています。車が妙な音を立てるとき、子どもが熱を出したとき、植物がしおれたとき、あなたは問います。何が起きているのか。なぜか。私に何ができるのか、と。科学は、根本のところでは同じことをしています。ただし、明示的に、方法的に、そして共同で行うだけです。科学はまた、そもそもどのようにすれば問題をよりよく解決できるのかをも問います。どの方法がより信頼できる結果をもたらすのか。誤りは、害をなす前にどうすれば発見できるのか。科学は検証をそれ自身に適用します。ちょうど、計算し、その計算について反省するのと同じです。

ある農夫は何世代にもわたって観察してきました。この風の後にはたいてい雨が来る、と。気象学者はなぜかを問います。彼は気圧、温度、湿度を測定し、モデルを作り、農夫が経験的に予感していることを予測できます。気象学者はそれによって農夫の見方を反駁しているのではありません。農夫が知っている兆候は有効であり続けます。科学はそれらが何を示しているかを説明します。現れるものは現れとして真のままであり、その中で現れているものが新たに把握されるだけです。科学がこうして見いだすもの——原子、遺伝子、場——は、現象の背後にあるのではありません。それは現象の中で自らを示しているものであり、それが現象の秩序以上のものかどうかは、前もっての布告によってではなく、研究によって決定されます。原子については、研究はそのことを決定してきました。1900年頃には誰も原子を見たことがなく、尊敬されていた研究者たちは、それに対応する実在的なものがあるかどうかを疑っていました。その後、まったく異なる現象から——水の中の微粒子の震え、液体に浮遊する粒子の分布、空の青

さ、それぞれが単独で測定されました――、同じ量の物質の中にほぼ同じ数の粒子が結果として得られました。それらの粒子がなければ、これほど異なる道筋が同じ値へ至る理由は理解できないでしょう。

18.3 方法を成り立たせているもの

科学を特徴づけるのは、前の諸章の運動を明示化し、規則にしたものです。

科学は自らの方法を公開します。それによって、誰でも結果がどのように生じたかを追跡でき、また他の人々がその根拠を検証できることを要求します。これは秘密の教説や単なる確信に対抗するものです。科学は異なる学問分野とアプローチを結びつけ、合わない知見を隠すのではなく刺激として受け取り、すべての観察が理論のうちに自らの場所を見いだすことを要求し、あらゆる理論を訂正可能とみなします。

科学は疑う人に確固たる場所を与えてきました。日常生活では、その人は厄介者とみなされがちです。科学では、その人は手続きの一部です。何かが公表される前には、同僚たちがその弱点を探します。一度だけ成功したことは、他の人々がそれを再現するまでは認められません。二重盲検試験では、研究者でさえ誰が実際の治療を受けるのかを知りません。それによって、自己欺瞞の最大の温床の一つが取り除かれます。自分が見たいものを見てしまう期待という温床です。これは第11a章の抵抗を明示的に組み立てたものです――自らを訂正することを自らに強いる手続きです。

現実の科学が常にこれを満たすわけではありません。不正、虚栄、集団の圧力、資金提供者への依存、流行が存在します。そのことが規則を反駁する度合いは、嘘つきが誠実さを反駁する度合いと変わりません。明確な理想があって初めて、現実への批判が可能になります。そして規則が長期的に支配的になるのは、科学者がより優れた人間だからではなく、規則の方がより成功するからです。開かれた仕方で研究する人は誰でも、より多くの誤りを発見します。批判を受け入れる人は、より速く学びます。

19.2 建物全体が揺らぐとき

時には、理論を改善するだけでは十分でないことがあります。時には基本的前提そのものが崩れ去らなければなりません。そのとき、突然すべてが違って見えます。それは詳細が見落とされていたからではな

く、見方の全体が移り変わったからです。パラダイムとは、ある分野についての私たちの思考の基本的枠組みです。それは、何が問題とみなされるか、どのような解決策が思い浮かぶか、何が説明とみなされるかを決定します。

> **□□15: □□□**
>
> あなたが古い車を持っていると想像してみてください。最初はここがきしみ、次にあそこがガタガタ鳴ります。あなたはこまめに修理します——新しいブレーキ、新しい排気系。もはや修理しないほうがよい時点はいつ来るのでしょうか。それをどう見分けますか。
> 一つの欠陥によってではなく、蓄積によってです。修理はもたらすものより多くの費用がかかり、ある時点で判断が傾きます——新車に替えどきです。

科学でも同様です。地球を中心とする世界像は、何世紀にもわたって惑星の位置をかなりうまく予測しました。しかし、幾つかの事柄は、その目的のために特別に作られた仮定によってしか説明されませんでした。すなわち、惑星がときどき後方へ走っているように見えること、水星と金星が太陽から決して遠く離れないこと、という仮定です。コペルニクスは問いました。太陽が中心にあるとしたらどうなるのか、と。そうすれば、追加の仮定は帰結になります。逆行のループは、内側の軌道での追い越しです。水星と金星が太陽の近くにとどまるのは、それらの軌道が地球の軌道の内側にあるからです。新しい見方は当初、より正確に計算できたわけではありません。それが可能になったのは、二世代後の楕円軌道によってです。それが最初に獲得したのは整合性でした。

このような転換では、どの不整合も単独では決定的な一押しにはなりません。それぞれはそれ自体、追加の仮定によってなお吸収されえます。決め手になるのはその数です。ある時点で、つぎはぎの費用は布地がまだ支えられる限界を超え、徐々の増加が突然の別の状態へ変わります。一度ごとに温かくなり、ある時点で沸騰し始める水のようにです。反転そのものは、最初は花瓶が、次に二つの顔が見える反転図形に似ています。ただし、この比喩はそこまでです。反転図形では、二つの見え方は同等に正しく、人は随意に行ったり来たりできます。パラダイム転換では、新しい枠組みは古い枠組みをも説明しますが、その逆は成り立ちません。

多くの人がこのことを自分の人生から知っています。何年にもわたって充実感を与えてくれていた仕事が、ついには個々の側面が気にな

り始めるだけでなく、方向全体が合わなくなる、ということを。そのような変化はしばしば苦痛を伴います。なぜなら、人は事物についての自分の見方に自分のアイデンティティを注ぎ込んでいるからです。科学ではさらに、養成制度、教授職、学術誌が古い枠組みに合わせて作られているという要因が加わります。自ら物理学の大変動を引き起こしたマックス・プランクは、回顧して次のように書いています。「新しい科学的真理は、その反対者たちが説得されて、教えを受けたと自ら表明することによって普及するのではなく、むしろ反対者たちが次第に死に絶え、成長してくる世代が最初からその真理に親しんでいることによって普及するのが常である」。これは鋭い指摘です。研究者たちが説得されてきたことも、実際には十分しばしばあります。しかしこの言葉は、大変動に属するものを名指ししています。古い枠組みに生涯の仕事を注ぎ込んできた人々、というものを。大陸が移動するという考えは1912年に提唱され、ほぼ五十年のあいだ馬鹿げたものとみなされました。それにももっともな理由がありました。どのような力が大陸を動かすのか、誰も言えなかったのです。それにもかかわらず、それを支持する観察は残り続け、力が発見されると、それらは新しい見方に収まりました。

> DE: „Eine neue wissenschaftliche Wahrheit pflegt sich nicht in der Weise durchzusetzen, daß ihre Gegner überzeugt werden und sich als belehrt erklären, sondern vielmehr dadurch, daß die Gegner allmählich aussterben und daß die heranwachsende Generation von vornherein mit der Wahrheit vertraut gemacht ist.“

19.4 大変動の中でも理性的

改訂がどこまで深くなりうるかは、第11.7章で区別されました。理論を一つの領域へ制限すること——ニュートン力学が、相対性理論のなかで極限の場合として非常に良い近似で引き続き成り立つように——から、問いそのものが新たに立て直されなければならないことまでです。パラダイム転換と言われるのは、理論の適用範囲だけでなく、その基本的概念が影響を受ける場合です。相対性理論への移行もそうでした。空間と時間が別様に考えられましたが、ニュートンの方程式は極限の場合として引き続き成り立ちます。さらに深く進むのが量子力学です。量子力学は、粒子の一義的な経路といった基本的概念を原子領域向けの新しい概念に置き換えますが、大きな物体に対しては従来の概念が有効であり続けます。

このことから強力な結論が引き出されてきました。異なるパラダイムは根本的に異なるため、合理的に比較できない、なぜなら各パラダイムが、何が観察・問題・解決とみなされるかを決定するからだ、という結論です。そうだとすると、科学は結局のところ力の問題か偶然の問題になってしまいます。この異論の最も強い版は、基準が存在することを否定しません。それは言います。正確さ、無矛盾性、適用範囲、単純さ、生産性は、二つの理論の間の選択を強制しない、と。なぜなら、それぞれの理論がこれらの基準に異なる重みを与えるからです。選択の瞬間については、それは真実です。しかし長期的には、事柄そのものが、重みづけの仕方をともに決定します。二つのパラダイムは概念の面では比較しにくいかもしれませんが、現象の面では比較できます。そして決定が下されるのはそこです。（パラダイム転換という語とこの異論を広く知らしめたのはトマス・クーンであり、彼自身は自らのテーゼから相対主義的な結論を引き出すことを退けました。）

このため、最も急進的な転換についても、探偵の原則の箇所で出会ったあの規則が当てはまります。現象は救われなければならない、という規則です。新しいものは、古いものが説明できたことを説明でき、さらに古いものが説明できなかったことをも説明できなければなりません。これは最初の日から成功する必要はありません——太陽中心モデルは当初、古いモデルより正確に計算できたわけではありません——。しかし、この試金石によって、新しいものは長期的に自らを測られなければなりません。したがって、より広い意味では、あらゆるパラダイム転換は——急進的な転換でさえ——止揚です。それは現象を保存し、古いものの限界を克服し、理解を新たな水準へ高めます。科学革命は科学の規則の例外ではなく、その本格的な事例です。

したがって、自らの思考における大きな大変動も、この試金石によって測られている限り、理性との決別ではありません。

さらに読む: 思考 – 失わずに秩序づける (2025), 章 13

第20章 なぜ吟味は自由にするのか

> **□□16□□□□□□□□□□□□□□**
>
> 地図も持たずに、知らない町を夜、車で走っているところを想像してみてください。曲がるたびに謎が現れ、どの通りも行き止まりに終わるかもしれません。やがて川だと気づき、あちらにテレビ塔が見え、頭のなかで町が整ってきます。自分がどこにいて、

> 目的地へどうやって行けばよいのかがわかります。何が変わったのでしょうか。町については何も変わっていません。

理解は人を自由にします。しかも、それは夜の街路だけのことではありません。科学が方法へと発展させてきたものは、それを実践する人を自由にします。まさにそれゆえに、それは模倣され、倒錯され、妨害されるのです。

20.3 理解が可能にするもの

ある言語の文法を理解している人は、暗記した文を繰り返すだけの人よりも、ずっと自由に話すことができます。流れの法則を知っている人は飛行機を作ることができます。鳥は重力に逆らうのではなく、空気を使うのです。自分自身のパターンを見抜いている人は、それらを変え始めることができます。一方、それらを知らない人は、気づかないままそれらを繰り返します。理解は、それまでなかった可能性を開くのです。

自由は、したがって、恣意ではありません。恣意は自らの帰結を予見することができず、それによって、自分が理解していないものの支配に陥ります。あらゆる医学上の助言に逆らって生きる人は、自分は自由だと考えますが、自分では理解も制御もできない病気に見舞われます。自由は必然性の洞察であるという古い定式は、その半分しか言っていません。法則を知る者は、それを自分の目的のために使うことができます。しかし、その目的が本当に自分自身のものであるか、またそれが理性的であるかどうかは、洞察が教えてくれるわけではありません。被害者の弱点を正確に知っている詐欺師は、必然性について多くの洞察を持っていますが、それゆえにまだ自由ではありません。

正しい情報を持っていること自体も、それだけでは人を自由にしません。知識は蓄えられ、配給され、支配の手段として使われることがあります。あなたより多くのことを知っている人は、その知識であなたを操ることができます。人を自由にするのは、ある人が何を知っているかではなく、その人が何を吟味できるかです。

20.5 共に検証する

だからこそ、真理探究は決して個人だけの事柄ではありません。人々が共に検証するところでは、最も声の大きな話し手ではなく、最善の

根拠がものを言います。そして優れた科学的議論では、論証がより優れていれば学生は教授と同等です。それによって一つの重荷も取り除かれます。共同の過程で検証する者は、すべてを独りで知る必要はありません。教育、科学、自由なメディア、独立した裁判所、公開の討論は、この過程の諸形態であり、それ自体が検証可能であり続ける限り、自由の条件です。しかし、多くの人が参加しているというだけで、共に検証されたことにはなりません。分散した知識は一つに収束しなければならず、そのためには反対意見が濾過されて排除されず、不確実性が明示されたままであり、誤りが事後的に訂正されうるような手続きが必要です。それが欠けているところでは、共同の結果は個々人が知っていることに遅れをとります。

20.4 欺く者は吟味を妨害しなければならない

逆に、欺瞞の上に権力を築く者は、吟味を妨害しなければなりません。開かれた議論はドグマを疑問に付し、異なる視点は公式見解の一面性をあらわにし、矛盾を追う者は体制の矛盾に突き当たります。これは道徳的な非難ではありません。それは事柄そのものから帰結します。欺瞞の上に成り立つ権力は、長期的には、自由な吟味が自分の傍らに存在することを容認できないのです。

吟味の公然たる反対者たちは、吟味を禁止します。そのことによって彼らだとわかります。見分けにくいのは、吟味に訴える者たちです。真理の名において現れる者は、吟味を禁止することなく、吟味を妨害することができます。しかも多くの場合、自分では気づかないまま、自らが訴える原則を倒錯することによってです。さらに、吟味が寄せられている信頼を利用しようとする者は、その基礎を偽造することができます。つまり「あなたはすでにそれを行っています」という文です（DE: „Sie tun das bereits“）。どちらも吟味の手段を用いて働きます。それを見抜くには、これらの手段で何が行われているのかを注意深く見るしかありません。

第21章 真理の名において吟味が妨げられるとき

あなたは、しかるべき言葉をすべて使う人と話しています。異なる視点、証拠、科学、啓蒙。それなのに何かがおかしい。言葉はそこにありますが、吟味がありません。本書の原則は、吟味に敵対して用いることができます。まさにその原則が成り立つからです。その原則に訴

える者は誰でも耳を傾けられます。この濫用は、真理を守っていると信じている人々から出てくるときに、最も見抜きにくくなります。

21.1 陣営思考

> ■■ 17: ■■■■■■■■■
>
> 読みながら、自分が自動的に振り分けていないかに注意してみましょう。これはどの「陣営」に向けられたものか。私のことか、それとも他の人々のことか。
> 振り分けそのものはまだ陣営思考ではありません。テクストの方向性を問うことは吟味に属します。それが陣営思考になるのは、「誰が言われているのか」への答えが吟味に取って代わるときです。振り分けに気づかない場合は、自分の意見と矛盾するテクストで試してみてください。そこでは気づきやすくなります。

異端審問は真の信仰を守ろうとし、異なる信仰を持つ者を迫害しました。革命運動は正義を打ち立てようとし、批判者を進歩の敵と呼びました。自由を擁護する者は、反対者の中に自由への脅威を容易に見て取ります。これらのどの場合でも、主張はその根拠によってではなく、それが由来する側によって振り分けられます。自分の陣営に役立つものはより容易く信じられ、害をなすものはより厳しく吟味され、反論する者は相手側に割り当てられます。このように考える者にとって、これには代償があります。すなわち、離反者に対する絶えざる警戒を要求し、本当の対話を妨げ、反対側に立つすべての人から彼を引き離します。パターンはどこでも同じです。手段は同じではありません。異端審問は人を火刑にしました。学問の共同体は地位と研究費を拒みます。この両者を同一視する者は要点を見誤ります。火刑台のところでしかこのパターンに気づかない者も、やはり見誤っています。

吟味を職業とする科学でさえ、陣営思考を知っています。アメリカ大陸に最初に定住したのは約1万3000年前のクローヴィス文化の担い手たちである、ということは、何十年にもわたり確実と見なされていました。より古い遺跡を提示した者は、自分の発見を吟味してもらう代わりに、ずさんな研究だと非難されることを覚悟しなければなりませんでした。1997年にチリの遺跡が、双方の専門家による共同調査ののち、一般に受け入れられるまで続いたのです。恐竜の絶滅をめぐっては、1980年以降、事柄そのものをはるかに超える激しさで何十年も続く論争が行われました。宇宙からの衝突が決定的な引き金を引いたのか、それとも巨大な火山噴火だったのかは、ときに帰属の問題のよ

うに扱われました。一方の側の代表者たちは公に、反対側を悪しき科学者だと言い立て、逸脱した者は昇進を恐れなければなりませんでした。若手研究者はこのテーマを避けました。今日ではほとんどの専門家が、衝突を主因と見なしています。精密な年代測定によれば、衝突と絶滅はほぼ同時期です。火山噴火がそれ以前に生物をどの程度弱らせていたかは今も研究されており、長期にわたり認められていた以上に火山活動に原因を認めるモデル計算によっても調べられています。その研究が続いているのは、自分たちの考えを捨てるよう説得されなかった人々のおかげでもあります。確定しているのは、吟味のやり方としてこれは正しくないということだけです。こうした発見は、第19章で扱われた不正や流行と同様、科学への反論ではありません。それらは現実の科学を科学自身の理念に照らして測っており、何が間違っていたかを可視化するのはこの理念だけです。

21.2 善の名において

人々が自らを善の擁護者と理解するとき、それは危険になります。これは信仰者と非信仰者、革命家と既存の秩序を守る者、専門家とその批判者のあいだで起こります。経過は毎回似ています。「私たちは善い者たちだ」 (DE: „Wir sind die Guten“) は、「私たちの事柄はとても重要だ」 (DE: „Unsere Sache ist so wichtig“) につながり、次に「私たちには通常の規則は当てはまらない」 (DE: „Für uns gelten die normalen Regeln nicht“)、最後に「私たちを批判する者は悪人か、目が曇っている」 (DE: „Wer uns kritisiert, ist böse oder verblendet“) となります。自らを善のための闘士と理解する者は、そのことによって自分自身の批判から身を守ります。善意は悪しき方法の免罪符となり、守られるべき真理は、もはや真理を問わないための根拠となります。

この一形態が選択的共感です。それは自分の立場を支える苦しみにだけ憤慨します。ある戦争の犠牲者を嘆き、別の戦争の犠牲者を見過ごす者もいます。敵対者による検閲には憤慨し、同盟国のあいだでの検閲を見過ごす者もいます。この共感は人間的に感じられますが、それでも苦しみを目的のために利用しています。

あなた自身で吟味してみてください。誰かが証拠を求めたとき、あなたが応じたくなくなる確信はどれですか。どの苦しみには自然に同情し、どの苦しみには同情しないのか、それはあなたの政治的立場と結びついていますか。あなたの周囲では、どの意見が口にされると人が遠ざけられてしまいますか。根拠を知らないまま、誰を目が曇っているとか危険だとか見なしていますか。悪意を帰属させることはそれ

自体の害をもたらします。魔女狩りが最も明らかな例であり、イデオロギーへの十把一絡げの疑いは日常的な例です。破壊的な目的を本当に追求する人々もいます。それはその行動から見て取ることができ、事前に意見から見て取れるものではありません。

21.5 反転した原則

本書の原則もまた、その反対物へと反転させることができます。しかも単一のパターンによって。すなわち、強みが絶対化されるのです。象の原則は「誰もが自分の真理を持っている」 (DE: „Jeder hat seine Wahrheit“) となります。これは寛容に聞こえますが、本来の趣旨を放棄しています。なぜなら、盲目の学者たちは同じ象を触っており、彼らの報告が互いに補い合うのは、それらが同じ現実に言及しているからにすぎないからです。弁証法は、両方を説明する原則を求める代わりに、それぞれの側から半分ずつ取る怠惰な妥協になります。自己言及は自己確信になります。すなわち、私たちは考え抜いたが、他の者たちは考え抜いていない、と。視点をまとめ上げることは、確認になるものだけを取り込み、探偵が求める結びつきは、生じるものすべてが当てはまらねばならない図式になります。懐疑主義は、自分自身の疑い以外のすべてを疑うシニシズムになり、多くの道への開かれは恣意性になります。共感が吟味に取って代わる場合にも同じことが起こります。苦しむ者は正しい、苦しむ者の代わりに語る者も正しい、となるのです。

危険は外から来るのではありません。それは、その強みを強みにしているまさにそのことの裏面です。したがって、強みを廃止しても助けにはなりません。危険とともに力も失われるでしょう。助けになるのは、それをそれ自身に適用することです。懐疑主義は自分自身の疑いを疑うことを許されなければならず、弁証法は自分自身の解決策をも吟味しなければならず、共感は反対側にも同様に及ばなければなりません。自らを自らに適用することを拒む強みは、すでにその限界を越えています。

21.6 反転した吟味の見分け方

反転した吟味は、抵抗するものを除外することによって整合性を生み出します。あらゆる批判は、自分自身の見方を裏づけるように解釈されます。「それは陰謀がどれほど完璧かを証明しているだけだ」 (DE: „Das beweist nur, wie perfekt die Verschwörung ist“) とか、「それは批判者た

ちがどれほど操られているかを示しているだけだ」 (DE: „Das zeigt nur, wie manipuliert die Kritiker sind“) といった具合です。単に考えうるにすぎないことが、現実のものとして偽って提示されます。公的な吟味可能性は、入信者だけの知識に取って代わられます。そして批判は、事柄そのものに照らして吟味されるのではなく、人物を貶めることによって退けられます。

レッテルもまた武器になります。2020年秋、三人の疫学者が公開の宣言の中で、パンデミックのあいだ弱者を的を絞って保護し、それ以外の人々への制限を緩めるよう提案しました。アメリカの保健研究機関の長は、内部メッセージで彼らを「周縁の疫学者」と呼び、「その前提を迅速かつ壊滅的に公表された形で論駁する」必要があると書きました。その提案が良かったかどうかは別の問題です。多くの専門家はそれが誤りだと考え、その理由も持っていました。しかし、何かが吟味される前に論駁を命じる者は、結果を命じているのです。反対側では、措置に不利な発見はすべてすぐに抑圧された真理とみなされ、措置に賛成する者はすべて買収された者とみなされました。「陰謀論」「偽情報」「プロパガンダ」は、不快な問いに答えずに退けるためにしばしば役立てられます。「体制メディア」「買収された科学」は、反対側で同じ目的に役立てられます。どちらも相手の目にあるおが屑を見て、自分の目にある梁を見ていません。

あつらえられた疑いがあります。タバコ産業は何十年にもわたりそれを組織的に生み出しました（第22.4章）。気候については、研究の現状が正当化しない疑いに対して企業が金を払ってきました。そのことが知られているところでは、あらゆる疑いが容易に嫌疑の対象になります。正当な疑いも含めてです。気候については、正当に開かれた問いがあります。たとえば、さらなる温室効果ガスに気候がどれほど強く反応するか、それぞれの措置がどれほどの費用を要し何をもたらすか、といった問いです。正当な疑いが買収された疑いと一緒に退けられると、議論は事柄が必要とするよりも小さくなります。これはたいていの場合、悪意からではなく、ひとり歩きするようになった善意の根拠から起こります。どちらの側が正しいかは、レッテルが決めることではありません。両方とも何かを見ていたかもしれませんし、両方とも吟味をやめてしまうかもしれません。決定的なのは、どのように吟味するかです。

21.8a 内に真、外に偽

ひとつの反論が自然に浮かびます。内側では模範的に吟味し、外側では組織的に欺く組織があります。情報機関の分析部門は、厳格で精巧な手続きによって情報源を吟味しますが、同じ機関は偽装工作を流します。タバコ企業は、自社の研究から製品の有害性を知っていながら、何十年にもわたり公には否定しました。それでは真理は結局のところ、受け手に応じて使ったり置いたりする道具ではないのでしょうか。

この分離は水密ではありません。外への欺きには内への根拠づけが必要です。長期的に成り立つ唯一の根拠づけは、「私たちは善い者たちだから欺いてよい」というものです。それによって、家の内側で陣営による振り分けが行われ、それは自らの分析の前で止まりません。欺かなければならない者は、さらにその欺きを管理しなければならず、時間がたつにつれて昇進するのは、これを円滑に行う者、つまり組織自身の説明に最も矛盾しない者たちです。そして、受け手に応じて真理を配給することを日々実践する者は、最終的には自分自身の前提さえもその有用性によって吟味するようになります。イラクが2002/03年時点でまだ大量破壊兵器を保有していたことは、情報機関内ではあまりに確実とみなされたため、その前提はもはや問われませんでした。少なくとも2016年のイギリスの調査報告書はそう判断しました。そこでの盲目が、外への配給の習慣から来たのかどうかは、報告書は確定していません。報告書が示すのは、前提がひとたび必要とされると、いかにして吟味不可能になるかです。こうしたシステムは一挙に盲目になるのではなく、確実にいっそう盲目になっていきます。このことは、何十年にもわたり外を欺き、その状況認識が開かれた同種の組織のものより悪化しない組織が見つかれば、反証されるでしょう。

あらゆる陣営の国家と同盟は、外への欺きのそれぞれの版を実践しています。それを敵対者の中にしか見て取らない者は、まさにここで問題になっていることを示しているのです。

21.8 国家が検証を操縦するとき

組織において可視的になることは、国家全体についても当てはまります。何が真と見なされるべきかを定める機関を設置する国家は、それによって市民を欺瞞から守るのではありません。国家は市民から、そして自分自身からも、欺瞞に気づく手段を奪います。その機関が公示することを、もはや誰も検証しません。それを公示する当人でさえも

です。そのような国家は、自らの公式の説明を信じ始め、反論が許される国家よりも劣った学習しかできなくなります。そのために悪意は必要ありません。情報機関と同じ正当化で十分です。東ドイツでは、国家党の中央委員会のある部署が新聞に、何をどのように報じるかを毎日指示し、あらゆる本には印刷許可が必要でした。

検証を制限するための言葉は、あらゆる体制で似ています。「危険な意見」、「偽情報」、「外国の影響力行使」。独裁的な国家も自由主義的な国家も、それを非常に異なる手段で用います。そして、それらの国家が依拠する危険は、でっち上げではありません。中国軍は2003年以来、世論の操縦を心理戦、法律戦と並ぶ「三つの戦争」の一つに数えています。ロシアの教義は、平時にも休むことのない情報戦について語ります。独裁国家がそのように振る舞うことは、ほとんど驚くにはあたりません。

しかし、自由主義的な同盟もまた、住民の知覚を、戦われ防衛される領域として記述するようになっています。NATO変革コマンドのための2020年の研究は、自らの表明によれば同盟の立場を反映していないものですが、それを「認知的戦争」と呼び、人間の精神を、陸、海、空、宇宙、サイバー空間に並ぶ固有の領域として扱うことを提案しています。この周辺のテクストによれば、それには自らの頭脳の防護と敵の頭脳への侵入が属し、その領域は友と敵を含みます。2022年の寄稿は、認知的戦争を明確にパンデミックと結びつけています。これらのテクストを収集したある批判者は、そこから、自国の住民にも向けられるプログラムを読み取ります。テクスト自体はそこまで踏み込んでいません。しかしそれらは、そこで世論がどのような観点から見られているかを示しています。同盟諸国が2021年に負った強靭性への義務は、「偽情報を含む敵対的情報活動」(DE: „feindliche Informationsaktivitäten einschließlich Desinformation“)を脅威に数え、パンデミックを試金石として挙げています。強靭性そのものはそこで「国家的な責任」であり続けます。防衛と考えられているものが、その名の下に行われる自由を危険にさらしうるのです。ここで防衛されているのは領土ではなく、人々が真と見なすものです。

その背後に悪意がある必要はありません。軍隊は物事を安全保障の観点から見ます。それがその職業です。平穏な時代には、それは多くの観点の一つであり、すべてを相互に衡量する政治がその上に立ちます。しかし脅威が実存的と見なされるなら、安全保障の論理は、普段は持たない重みを得ることがあり、そうなると自国の市民の意見さえ、観察され操縦されるべきものとして現れてきます。オランダでは、陸軍の実験部隊が2020年に、市民がソーシャルメディアを含む公開情報源にコロナ危機について書いたことを分析しましたが、ある新

聞がそれを報じ、大臣がその活動を暫定的に停止させ、その法的根拠を検証させました。ドイツでは、連邦政府が2021年12月にパンデミックのために設置した危機管理班を、とりわけ軍事的な能力を必要とする物流を伴うワクチン接種キャンペーンのために、ある少将が率いました。このような出来事を過小評価しても、一つの計画に組み上げてもなりません。諸機関を、それが普段働く仕方で読むだけで十分です。状況を脅威に従って秩序づけることを学んだ者は、この状況もそのように秩序づけます。

さらに読む：倫理学 – 私たちがすでに行っている善 (2026), 章 15.9（正当な批判を聞き、検証し、実行に移す秩序がなぜ抵抗を必要としないのか）

21.8b パンデミックにおける舵取り

舵取りに役所は必要ありません。パンデミック中に外国からの意図的な虚偽報告もあったことは、ヨーロッパの諸機関が文書化しており、防衛には実際の対象がありました。同時に、複数の国の当局は、偽情報と見なした投稿を継続的にプラットフォームに指摘し、プラットフォームはしばしばそれに従いました。ある大規模プラットフォームは、ウイルスが人工的に作られたとする2021年2月の投稿を削除し、同年5月にその規則を解除しました。そのとき起源の問題が公式に再調査されるようになったのです。この問いは今日に至るまで答えられていません。舵取りは、裁判記録を通じて、そしてとりわけ所有権の変更後にネットワークの内部文書が公表されたときに、詳細に可視化されました。別の大企業のトップは後に議会委員会に宛てて、自社が何か月も圧力を受けていたと書き、もっと公然と異議を唱えなかったことを悔やみました。その示唆がどこまで圧力だったかは争われていますが、それが存在したことは争われていません。そして欧州連合では、違法と推定されるコンテンツについて誰の報告をプラットフォームが優先的に処理しなければならないかを、法律が規定しています。敵対的と見なす政府については、こうした舵取りを人はためらわずに想定します。試されるのは、それを自分の側にも同様に見て取るかどうかです。逆の方向にも同じことが当てはまります。投稿が削除されたからといってそれが真になるわけではなく、削除されたものの多くは虚偽でした。削除が破壊するのは、それを吟味する可能性です。

舵取りは感情を通じても行われました。第14.3章が述べた経路に沿ってです。イギリスでは、政府の諮問機関が2020年3月に文書で、のんきな人々のあいだで個人的脅威の感覚を、感情に強く訴えるメッ

セージによって高めるよう勧告しました。ドイツでは、同じ月に、内務省の提案を受けて科学者たちが内部文書を作成し、その中で、抑えられない感染拡大の結果を劇的に描くよう助言しました。「望ましい衝撃効果を達成するために」 (DE: „um die gewünschte Schockwirkung zu erzielen“) です。病院で重症者を追い返し、「自宅で苦しみながら空気を求めて喘ぐ」 (DE: „qualvoll um Luft ringend zu Hause“) 死にゆく人々、自分が両親に感染させたと罪悪感を抱く子どもたち。この会合は、同省の次官が「政治的秩序とハイブリッド脅威」 (DE: „Politische Ordnungen und hybride Bedrohungen“)を担当する部局の長とともに設置したものです。

関与者の一人は2年後、社会学の専門誌で、この文書がどのように成立したかを述べました。10日間で、暗号化された電話会議——議事録はないが、後にロベルト・コッホ研究所が公開を義務づけられた文書とメールのやりとりはある——と、ベルガモの映像の印象の下で。人々は「感染のメカニズムについてほとんど」知らず、「公共生活の広範な停止の結果についてはまったく何も」 (DE: „überhaupt nichts über die Folgen einer weitgehenden Stillstellung des öffentlichen Lebens“)知りませんでした。 指数関数的な増加を意思決定者に理解させるために、彼らは何も対策を取らない場合について、2020年にドイツだけで100万人の死者と計算しました。明示的に予測としてではなくシナリオとしてです。彼の言葉によれば、その任務には「下された決定の根拠づけのための修辞的定式の鋳造」 (DE: „Prägung rhetorischer Formeln für die Begründung der getroffenen Entscheidungen“)も含まれていました。 そして彼は次のように要約しています。「グラムシの言葉で言えば、強制を命じ、同意を獲得し、その際に解釈の主権を手に保持することが課題だった」 (DE: „Mit Gramsci gesprochen: Es ging darum, Zwänge zu verordnen und Zustimmung zu gewinnen und dabei die Deutungshoheit in der Hand zu behalten.“)。 4年後、彼はパネルディスカッションで、報道によれば、「従う意思」を生み出さなければならなかったと語りました。これは外部からの告発ではありません。大きな不確実性と大きな時間的圧力の下で助言し、個人の行動へのそのような介入が「強い根拠づけを必要とする」ことを自ら見て取った参加者の記述です。まさにそれゆえに、このことは、実存的とみなされる状況において、何が真かという問いの傍らに、いかに同意を獲得し解釈を手に保持するかという問いが歩み出るかを示しています。

21.8c 倒れずに自らを守ることができるもの

国家が欺きに対して自らを守るとき、あらゆる立場がどこでも同じように扱われなければならないという意味でしょうか。いいえ。世界についてのすべての主張は、最も馬鹿げたものでさえ、吟味可能かつ反駁可能であり続けなければなりません。とりわけそれらには、タブーではなく反駁への請求権があります。なぜなら、タブーはその虚偽が可視化されるのを妨げ、その支持者を殉教者にするからです。吟味そのものは、あらゆる反駁をそもそも可能にするものですが、そのような主張ではありません。それがなぜ反駁されえず、しかも何も隠さないのかは、第22.3章が示します。他方、ある立場がどれだけの場を与えられるかは、場所に依存してよいでしょう。ゼミナールでは、すべての立場と取り組むことが理解に属します。公の議論では、誰にどの舞台を与えるかという問いが生じ、民主主義は、外国の干渉も含め、自由な吟味の条件を破壊しようとする力に対して自らを守ることができます。この最後の段階は最も危険です。なぜなら、それは「私たちは善い者たちだ」 (DE: „Wir sind die Guten“) という形をとるからです。つまり、私たちの事柄がより厳しい規則を根拠づける、と。これを濫用から区別するのは、それが特定の内容や陣営ではなく、真理の探求の条件を守り、それ自体が公に批判可能であり続けるということだけです。もはや批判されえない防衛姿勢は、すでに倒れています。あらゆる独裁は、神聖な財の保護に訴えてきました。

同じことが嘘にも当てはまります。嘘をつくべきではありません。嘘をつく者は、相手の信頼を要求し、同じ一撃でそれを壊します。しかし自由な法秩序は、原則として、嘘が名誉毀損、詐欺、偽証のような特定の害をもたらす場合にのみそれを罰します。この区別は嘘を守るのではなく、何が嘘であるかがそもそも現れうる空間を守るのです。証明、論証、開かれた議論なしにある立場を虚偽だと宣言する者は、たとえ事柄において正しくても、この空間を去ります。

21.9 真理省ではなく成熟した市民

ここでは誰も権力から自由な空間で動いてはいません。しかし権力濫用への答えは、真理省という形でのより多くの権力ではなく、成熟した市民という形でのより多くの真理の探求です。恐怖は、人々をある立場へと導くのに非常に効果的でありえますが、良い助言者ではありません。それは視線を脅威へと向けさせ、他のすべてを後退させます。恐怖によって市民を舵取りし、検閲し、あるいはその情報を制限する者は、民主主義が依拠する関係を反転させます。民主主義におい

ては、住民が政府を委託し統制するのであって、その逆ではありません。そしてそのためには、意見・科学・報道の自由が必要です。本章の分析は、どちらの側が正しいかを示しません。それは、どのように吟味するかを示し、吟味をやめるあらゆる側、自分自身の側にも打撃を与えます。保守派にも進歩派にも、信仰者にも無神論者にも、既存の秩序の批判者にも擁護者にも。これに対して道徳的優越は何の助けにもなりません。方法における警戒だけが助けになります。

真理の名において吟味を妨げる者は、しばしば知らずに原則を反転させています。しかし、それはもっと意識的に、もっと深く行うこともできます。吟味が立つ基礎そのものを偽造することができるのです。

さらに読む: 思考 – 失わずに秩序づける (2025), 章 15

第22章：方法そのものが偽造されるとき

22.1 基礎の偽造

> **□□18□□□□□□□□□**
>
> あなたはまさに今、このテクストがあなたを操作していないかどうかを確かめていますか。
> もしそうなら、この警戒心は、これから問題になることに対する最初の防御の一つです。

第1章の遂行的自己基礎づけは、何も前提できないときに残る唯一の出発点です。思考はそれ自身を確かめ、この遂行の真理は、誰もがそれを自ら遂行し確かめることができるという点にあります。まさにそのために、それは攻撃に開かれています。「あなたはすでにそうしています」（DE: „Sie tun das bereits“）と言う者は、他者からの主張に対して準備されている防御を迂回します。遂行は、それが確かめに仕えるのではなく、前もって固定された目的——販売、追随、自己確認——に仕えるとき、偽造されています。この出発点が偽造されると、その先のすべては毒された一点に懸かっています。そのため、ここではこの本全体の最も厳格な尺度が必要となります。

語る者の意図は外からは見えません。しかし、文が確かめのために何をするかは、テクストから読み取ることができます。確かめをさらに前へ進める文は痕跡を残します。以前には見えなかったものが見えるようになる、つながっていなかったものがかみ合う、反論が無視

される代わりに組み入れられている、そしてときには、確証される代わりに、自分の向きを変えられる、といったことです。結果を狙う文は、行きたかった場所に到着します。次の一歩は用意されておらず、抱いていた反論はその中に現れません。誠実な語りでは、その過程は確かめる者と語る者とに同時に仕えます。この両者が分離するところでは、確かめがまさに居心地の悪くなるところで停止させられる、という事実にそれが現れます。同じことがこのテクストにも当てはまります。このテクストには、追随されることへの関心があります。

22.2 偽造の進行のしかた

偽造は、実際に存在するもの――あなたの確かめへの衝動、あなたの不安、あなたの意味への渇望――から始まります。「あなたもまた、何かが変わらなければならないと感じているでしょう」（DE: „Sie spüren doch auch, dass sich etwas ändern muss.“）それは実際に真実です。そして、まさに最初の文が真実であるからこそ、それに続くすべてが自明に感じられます。偽造は出発点にはありません。それは真実を扉を開くものとして必要とします。この点で、真実の言明だけを用いて働く欺き――第10章が追跡する欺き――と類縁関係にあります。すなわち、真実が欺きの担い手になるのです。

次に、それは誘いと主張とを入れ替えます。本物の方法は誘います。「あなた自身で、それがそうであるかどうかを確かめてください」と。偽造は結果を主張します。「あなたは感じているでしょう、そうではないですか」と。その違いは定式化のうえでは小さく、実質においては根本的です。第一の場合、あなたは結果が開かれた確かめを行います。第二の場合、あなたは自分のものと思い込む知覚を吹き込まれます。その提示は、あなたがどう見るかを固定し、あなたが自分で見たと信じさせます。それが別の結果になりうることは、偽造の中には現れません。否定されるのではなく、単に存在しないのです。そして不在は、それを探す者だけが気づきます。

次に、冒頭が触れた「あなた自身のもの」が、出来合いの目標へと誘導されます。「あなたはすでに確かめています」は「だからあなたはこの製品を必要とします」（DE: „also brauchen Sie dieses Produkt“）へと変わり、「あなたはすでに批判的に考えています」（DE: „Sie denken bereits kritisch“）は「だからこの解決策を選びなさい」（DE: „also wählen Sie diese Lösung“）へと変わり、「あなたはすでに意味を探しています」（DE: „Sie suchen bereits nach Sinn“）は「だからこの教えに従いなさい」（DE: „also folgen Sie dieser Lehre“）へと変わります。あなたの遂

行として始まったものは、他者からのプログラムとして終わります。最後には、呼び起こされた経験が証拠と宣言されます。「あなたはそれを自分で経験したではありませんか」（DE: „Sie haben es doch selbst erlebt.“）ここで疑う者は、自分の経験を裏切るように見えます。そして偽造は、批判が自己否定のように見える場所に居座っています。

22.3 偽造をどう見分けるか

この手順から、あらゆる遂行的提供に対して――この本に対しても――実行できるテストが導かれます。

否定可能性のテストは、あなたの確かめが別の結果になりうるかどうかを問います。経験についての言明は、不成立になりえます。いま落ち着いていると感じるかどうかも、別の結果になりえます。それゆえ、いかなる可能的な経験によっても反駁されえないように作られた提供は、警告信号です――ただし一つの例外、確かめそのものを除いて。

方向性のテストは、その過程があなたをより自立させるのか、それともより依存させるのかを問います。その後、あなたは独力でよりよく確かめられるようになったか、それとも導きを以前にもまして必要としているか。本物の遂行的方法は、それ自身が不要になることに向けて働きます。

これらに加えて、同じ手順から生じる小さなテストがあります。別の見方もありうると述べられているか、それとも反対の確かめを自分で考案しなければならないか。確かめる時間があるか、それとも今すぐ結論を出し、署名し、告白するよう迫られるか。あなたの経験が全体像の中に属する手がかりのままでとどまるのか、それとも証拠と宣言されるのか。そして、それを解釈するのが誰か――あなた自身か、それとも提供者、教師、集団だけか。

否定可能性のテストは、この本自身にもっとも厳しく当てはまります。「あなたはまさに今確かめています」も、ある点ではいかなる経験によっても反駁できません。あなたがそれに気づいたかどうかという発見は、観察であり、別の結果になりえたはずです。確かめそのものは反駁されえません。というのも、あなたが確かめているかどうかの確かめは、それ自体が一つの確かめだからです。では、その基礎は免疫化されているのでしょうか。いいえ。そしてその違いがテスト全体を支えています。免疫化は、自らの反駁不可能性を隠し、反対の確かめを禁じます。遂行的自己関係は、その構造を開示し、反対の確かめへと誘います。議論に反論してください――あなたはすでに議論し

ています。思考を否定してください――そうするためには、その思考を考えなければなりませんでした。あなたがそれを行うこと、それが議論なのです。この反駁不可能性は何も隠しません。それは遂行の開かれた性質であり、その遂行を行うすべての人に見えます。偽造は、それとは対照的に、隠し場所を必要とします。

しかし、扉を開くものは、この本が必然的に偽造と共有しています。「あなたはすでに知っています」「あなたはすでに確かめています」「あなたはすでにすべてを持ってきています」（DE: „Sie bringen bereits alles mit“）――最初の諸章はそのように始まりました。偽造も同じ言葉で始まります。なぜなら、偽造は本物の出発点を模倣するからです。第一歩では両者を区別できません。区別できるのは、その後の歩みにおいてだけです。だからこそ、テストはまずこれらのページに適用されるのです。

22.4 外部での偽造

外部では、手順はどこでも同じように見え、ただ扉を開くものと目標とが変わるだけです。広告では、「あなたは自分にとって何が良いかを自分で知っています」（DE: „Sie wissen selbst, was gut für Sie ist“）と言われ、そして偶然にもそれがまさにその製品なのです。政治では、正当な不安が取り上げられ、「あなたもまた、何かが変わらなければならないと感じているでしょう」（DE: „Sie spüren doch auch, dass sich etwas ändern muss“）と言われ、出来合いの解決策へと誘導されます。危険は、正当な懸念と疑わしい答えとの混合にあります。信頼と依存が支配するセラピーと教育学においては、「あなたは心の奥底で何が正しいかを知っています」（DE: „Sie wissen tief im Inneren, was richtig ist“）と言われます――しかし、あなたの内面が何を語るのかを決めるのは誰でしょうか。良いセラピーは人をセラピストからより自立させ、良い教育は人をより思考できるようにします。スピリチュアリティにおいては、意味の探求が承認され、それから唯一の教えへと誘導されます。あたかもこの方向しかないかのように。そして学問的生においては、偽造は自己像に媚びます。「あなたはすでに批判的に考えています」（DE: „Sie denken bereits kritisch“）と言い、それから批判的思考を特定の学派と同一視します。

> **19**
>
> あなたに「実はあなたはすでにそれを知っていた」と告げた最後の提供――広告、講座、説教、自助本――を取り上げ、それに否

> 定可能性のテストと方向性のテストを当てはめてください。何が見つかりますか。
> 多くの場合、二番目のものだけで十分です。後で再び必要とする提供は、あなたをより自立させてはいないのです。

偽造の傍らには、同意をまったく必要としないため、はるかに安上がりに働く親戚がいます。すなわち、確かめに値するという、不当に得られた資格です。タバコ産業の内部文書は1969年、疑念こそが自らの製品であると一文にまとめました。喫煙が無害だと誰も説得する必要はありません。問いが開かれているように見えれば十分なのです。単に検討すること自体がすでに命中であり、不安にさせることが目標なのです。この武器は、犠牲者の美徳――その人の開かれ――を、犠牲者自身に対して向けます。「私はただ質問しているだけです」（DE: „Ich stelle ja nur Fragen“）という言葉は開かれに訴えかけます。それを手で払いのける者は独断論者として立たされ、確かめずに乗る者は、攻撃者が望んだものをすでに与えています。すなわち、注意と、本物の論争という外観です。その強化された形態は氾濫です。主張は、確かめられるよりも速く行うことができます。二十の主張を部屋に投げ込む者は、相手がそれを一つずつ処理し始めた瞬間に勝っています――そのうちの一つが正しかったからではなく、相手が確かめる力こそが本当の標的だからです。

したがって防御は、一段階前から始まります。つまり、実質の問いではなく、ある事柄が確かめに値するかどうかという問いから始まるのです。誰がそれを持ち出すのか、その人はそれから何を得るのか、これまでのその人の主張はどの程度持ちこたえてきたのか、そしてなぜそれがまさに今、この量で来るのか。最後の問いはキャンペーンを狙います。それが企業、運動、政府のいずれから来るものであれ。あなたは、大声で要求されるというだけの理由で、あらゆる疑いに調査を負うわけではありません。あなたが自分自身に負っているのは、それを払いのけるために名を挙げられる理由です。

22.5 分析が障壁になるとき

この章が述べていることは、悪用されることもありえます。反論を、確かめることなく「それはただの操作だ」（DE: „das ist doch Manipulation“）で片付ける者、あるいは疑いを「不当に得られた」で片付ける者は、防御を障壁に変えています。それゆえ、テストは公式の提示に対してもその反対者に対しても、自分の陣営に対しても他方の陣営に

対しても、そしてこれらのページに対しても他のどれに対しても妥当します。

本物の確かめは、テストの鏡像によって見分けられます。それは、それに従う者をより自立させます。つまり、何を信じるべきかを学ぶ代わりに、自分がすでに何ができるかを発見させます。それは自分の尺度を開示するので、他者はその尺度をそれ自身に適用することができます。そして、秘儀的な教えを知りません。そしてそれは修正可能であり続け、したがって、矛盾に対して免疫化する代わりに、よりよく反駁できるようにします。方法は、人がそれを誠実に適用するなら、このようにして自分自身を守ります。その偽造に対する最良の防御は、本物をよく知ることです。これらの章があなたの役に立ったかどうかは、あなたがよりよく区別できるようになったか、それともあらゆる確信に対して単にいっそう不信になっただけか、という点に現れます。

第10章：較正

前の二つの章の転倒と捏造は、偽なるもの、あるいは不当に得られたものによって見分けることができます。いま問題になる課題には、欺瞞も意図も必要ありません。それはおそらくこの本のなかで最も難しい課題です。それは日常生活のなかで始まります。

10.2 外国についてあなたが知っていること

あなたが一度も行ったことのない国について、あなたは多くのことを知っています。映画や連続ドラマ、ニュースやルポルタージュ、オンライン動画を観て、本を読み、その国に行ったことのある友人から話を聞いてきました。アメリカ合衆国についてはおそらく最も多く知っており、イギリス、フランス、イタリアについてもかなり知っています。インド、中国、ロシアについてはそれより少ないでしょう。「アフリカ」や「中東」全体については、たいていの人は大まかなイメージしか持っていません。そして大まかなイメージは容易に偏見になります。

そのほとんどは正しいかもしれません。難しさは別のところにあります。あなたはそれに重みづけをすることができません。アメリカについての映画のほとんどは、ニューヨーク、カリフォルニア、一部はテキサス、西部劇は中西部というように、いくつかの大都市を舞台に

しています。アラスカ、ネブラスカ、アイダホを舞台にしたものはほとんどありません。50の州のうち登場するのは少数で、そのなかでも主に大都市です。その国の地域文化を研究する人は、州の境界を横切る十ほどの地域文化に行き着きます。テキサスだけでも複数の文化圏にまたがっています。あなたはテキサスの銃暴力についての報道を目にし、バーモントの環境保護についての報道を目にし、デトロイトの貧困についての報道を目にし、シリコンバレーの発明についての報道を目にします。四本とも正確で、どれも何か現実のものを映し出しています。アメリカ合衆国という像のために、これらの部分をどのように重みづけますか。

匂いや食べ物の味のように、そもそも映せないものもあります。撮影された当時にしかなかったものもあります。毎日同じであるためニュースにならないこともたくさんあります。報告もまたフィルターがかかっています。ある国と商売をする人は、家では商売とホテルの話ばかりします。

その後実際にそこへ旅した人は、何が欠けていたかに気づきます。1980年代半ばにマンハッタンに2週間滞在した人は、道路の下の配管から蒸気がいたるところで立ちのぼるのを目にしました。映画はどれもその光景を予告していませんでした。タクシー以外の車はほとんど走っていませんでした。違法駐車の罰金が高額であるからだと説明されました。歩道は当時、主に店主たちによって清潔に保たれていました。近隣地区はそれぞれ大きく異なっていました。ハーレムについては警告されました。バスで通り抜けた人は何か悪いものを目にすることはありませんでしたが、家の中に入ったわけでもありませんでした。その場にいると、人々がどのように歩き、どのくらい速いか、互いにどのように接し、どのように話すか、屋台がどこにあり、陳列台に何が置いてあるかがわかります。何よりも、すべてがどのようにつながっているかという印象を得ます。映画はその断片を示すにすぎません。

1980年代初めに初めてインドに来た人は、すべてが知っていたものと異なることに気づきました。見慣れた植物はほとんどなく、動物も違い、鳥の鳴き声も違い、匂いも違い、音楽も違い、車も交通も異なり、騒音の大きさも違いました。手作りの靭皮の寝床に横たわる乞食がおり、寝床のない者、ほとんど衣服をまとわない者もいました。スーパーはほとんどなく、包装もほとんどありませんでした。知らない香辛料を使った料理があり、身のこなしが異なる人々がいました。若い兵士たちは互いに腕を組んで歩いていました。ドイツの兵士からは見られない姿です。インドについての映画は、こうしたことの何ひとつ予告していませんでした。今日ではその多くが違うかもしれませ

ん。そしてそのことも問題の一部です。一度見たものは、たとえ当のものがとっくに変わっていてもイメージのなかに留まるからです。

滞在そのものもまた一つの切り取りです。マンハッタンに2週間いた人は、ニューヨークの一部を知っているのであって、まだアメリカ合衆国を知っているのではありません。そこで見たことを彼は今度は位置づけなければなりません。そのうち何がアメリカ的で、何がこの都市に、この地区に属するのか、と。それはどの国にも当てはまります。バイエルンでさえ、よく見ればフランケン、シュヴァーベン、旧バイエルンに分かれ、バーデン＝ヴュルテンベルクもバーデンとヴュルテンベルクに分かれます。20を超える言語を憲法で認めているインドは、訪れる者にとって一つの国というよりも、それ自体が一つの大陸のように映ります。自分自身の目で見ることは、画像やイメージのなかに欠けているものを示してくれるという点で貴重です。しかしそれもまた一つの標本であり、ほかのすべてと同様に重みづけされなければなりません。

これは第5章の盲目の学者たちの問題です。ただし一つの違いがあります。あちらでは各人が一片を触れて確かめ、大切だったのはその断片をまとめることでした。ここでは何かが欠けているのですが、何が欠けているのかわかりません。完全に欠けているものはまだ易しい部分です。ネブラスカについて何も知らないことに気づいた人は、調べればよいからです。難しいのは、示されているものを正しく重みづけすることです。報道に出てきた銃暴力は頻繁なのか稀なのか、映画の地区は通例なのか例外なのか。最も難しくなるのは数値に関してです。統計は、それが測定するものを正確に示し、測定しないものについては何も示しません。

ここでは、除外することを避けられません。すべてを盛り込んだ地図はその国と同じ大きさになり、役に立ちません。あらゆるカメラにはフレームがあり、あらゆる問いは何かを除外し、あらゆる統計は確定されたものを数えます。除外されたものは、その問い、そのフレーム、これまでの発見の外にあります。人はそれを見ないので、それが欠けていることにも気づきません。

較正とは計測技術に由来する言葉です。ある装置の表示を既知の尺度と比較し、それがどれだけずれているかを確定します。そのために権威は必要ありません。公的な検査は「検定」と呼ばれるでしょう。ここで較正するとは、現実に照らして、何が頻繁で何が稀か、何が正常で何が極端か、何が合意で何が争いかを自分自身の尺度で吟味し、それがずれているところではその尺度を調整し直すことです。他の人が助けてくれることはできますが、誰もそれを全面的に代わってはく

れません。この本の他の吟味は、存在するものに向けられています。この吟味は、存在しないものにも向けられています。

10.1 すべての言明が正しいとき

日常でひとりでに起こることは、意図的に行うこともできます。

> □□20□□□□□□□□□□
> 以下の報道を、今朝ニュースで見つけたかのように読んでください。
>
> > 象——過小評価された危険？　ある学者が、滑らかで硬い槍（牙）を手探りで見つけた。二人目は、巨大な力について報告する：力強い柱、強くて堅い（脚）。三人目は、長くて動くもの、大きな蛇のようなもの（鼻）にぶつかった。
> >
> > > DE: „Der Elefant - eine unterschätzte Gefahr? Ein Gelehrter ertastete einen glatten, harten Speer (Stoßzahn). Ein zweiter berichtet von enormer Kraft: eine mächtige Säule, stark und fest (Bein). Ein dritter stieß auf etwas Langes, Bewegliches, wie eine große Schlange (Rüssel).“
>
> 少し立ち止まってください。この報道はあなたにどんな影響を与えましたか。この動物について、どんな印象が生まれましたか。
> では、答え合わせです。あなたはこの報道の出所をすべてとっくに知っています。それは、第5章に出てくる六人の盲目の学者のうちの三人であり、彼らの誰も嘘をついていません。細部はすべて正しいのです。しかし全体像は歪んでいます。なぜなら、脅威となる側面だけが選ばれ、無害な側面は省かれたからです：扇、壁、縄は単に登場しないのです。
> たとえかすかであれ、あなたの中に脅威の印象が形成されたなら、その報道は、それが作られた目的を果たしたことになります。もしそうでなければ、何があなたを守ったのかを検証してみてください——おそらく、あなたは出所をよく知りすぎていたのでしょう。

これは、個々の言明の検証では何も対抗できないような欺瞞です。それは嘘をつくのではなく、重みづけをするのです。そしてそれは、

あなたが信じているものではなく、あなたが測定に用いるものを打ちます。

同じことが、公開の場なしに、ある人が別の人のために決定を準備する場合にも起こります。経営陣に提案書を書く部門は、経営陣よりもその事柄をよく知っています。だからこそその部門が必要とされ、だからこそ誰にも気づかれずに重みづけができるのです。経営陣はそのことを知っており、推測される意図を差し引いて計算します。その際、提案書に含まれている知識までも捨ててしまうことがよくあります。部門の側もまたそのことを知っていれば、さらに強く重みづけします。最終的に、双方が根拠をもって相手を不信に思い、相手が知っていることを知ることができなくなります。助けになるのは、重みづけを見えるようにする形式だけです。すなわち、却下された可能性や、自らの提案に反する点にも言及した提案書、そして、なぜ自分たちが異なる決定を下すのかを述べる決定者たち、です。

10.3 プロパガンダ

重みづけについて最も練習を積んでいるのはプロパガンダです。人はそれを嘘だと考えます。実際、そのなかには嘘もあります。1990年10月、イラクに対する戦争が議論されていたとき、15歳のクウェート人の少女がアメリカ連邦議会の人権擁護団体の前で涙ながらに証言しました。イラク軍の兵士たちが病院で保育器から乳児を取り出し、床に放置して死なせたというのです。この話は世界中を駆け巡り、戦争をめぐる議論のなかで何度も引用されました。後に、証言者は駐ワシントンのクウェート大使の娘であり、彼女の出演は広告代理店が準備したもので、その代理店はクウェートから資金を受けた組織に依頼されていたことが明らかになりました。この話の証拠は見つかりませんでした。戦争をめぐるこの種の報道は、どの側にもたくさんあります。しかし、それらはむしろ、規則がそれによって見えてくるような例外なのです。嘘は反駁できます。そして反駁された嘘は、それを流した者に害を与えます。

規則はもっと地味で、もっと効果的です。相手方については悪いことが示され、自分の側については良いことが示されます。そして個々の報道はどれも真実でありえます。像を作るのは選択です。洗練された形では、両方の側が示されますが、等しくはありません。望ましい側にはより良い発言者、より強いイメージ、そして最後の言葉が与えられ、望ましくない側には最も弱い代表者が当てがわれます。こうして釣り合いの外観が生まれ、まさにそれによって重みづけが見えなく

なります。反対の形式は量を用います。あまりに多くの反対意見とあまりに多くの混乱を示すため、最後には何も確かには思えなくなります。それが第22.4章の洪水です。プロパガンダが、悟性が問われる前に感情にどのように語りかけるかは、第14.3章で述べられました。

したがってプロパガンダに対して助けになるのは、嘘を暴くことよりも、何が欠けているかを問うことです。相手方の報道を読めば自分の側について何を知ることになるでしょうか。自分の側の報道から相手方について何を知ることになるでしょうか。バランスが取れているように見える放送で、最も強い発言権を得ているのは誰でしょうか。これらの問いは、自分が傾いている側を含め、あらゆる側に向けられています。

10a.3 第一のレベル: 個々の陳述を検証する

誤ったことを主張する単純な欺きに対しては、手段はとうの昔に発展しています。情報源の専門知識と利益への問い、出来事への近さへの問い、独立した情報源との一致への問い、そして、提示された根拠が、それが基礎づけるべきものよりも多くを語っているかどうか——あるいは単にもう一度それに名前をつけているだけかどうか、眠らせる手段が「眠らせる結果を持つから」 (DE: „weil es eine einschläfernde Wirkung hat“)というようなもの——への問いです。これが探偵の原理であり、情報源に適用されたものです。

第一のレベルにはまた、自分自身の確信を段階づけることも属しています。すべてが同じ度に値するわけではなく、度は高さにおいても種類においても異なります。七掛ける八は五十六だということは、計算しなおせるので確かです。地球は丸いということは、多くの独立した道が同じ所見へ導くから確かです。友人が信頼できるということは、彼がしばしばそうだったから確かです。あなたが今考えているということは、それについての疑いでさえそれを確認するから確かです。パーセンテージは、これらの確信を、あたかも一つの種類であるかのように一つの尺度の上に置きます。それは、何かにどれだけ賭けるかという場合には有用です。誤解を招くのは、計算がより多くの証人によってより確実になるとか、友人への信頼が計算によってより確実になると考える場合です。

そして第一のレベルには、そもそも何が検証に値するのかという決定も属しています。第22.4章で詐取された検証価値の防御が始まったあの問いです。検証することは時間と注意を要し、あらゆる主張を調査する人は、次の洪水が来る前に自分の検証力を使い果たしていま

す。庭のUFOについてのあらゆる報告のたびに外へ飛び出していく人は、何かを理解していません。較正には基準率、つまりこの種の主張がこれまでどのように実践的に検証されてきたかという問いが属しています。それに加えて、賭け金——私が誤っていたら何がかかっているのか——と、情報源の実績があります。そして誰も単独では検証しません。薬が効くかどうかは、研究、認可手続き、専門家たちの論争が私のために検証してくれます。それに頼ることは、小麦を栽培する代わりにパン屋でパンを買うのと同じくらい理性的です。ただ、それによって自分が何を得ているのかを知らなければなりません。専門家が何かを言っているという指摘は、それを信じるための一つの根拠であり、しばしばよい根拠ですが、事柄そのものの説明ではありません。その指摘だけを持つ人は、なぜそうなのかを知らず、したがって、いつそうでなくなるのかを認識できません。しかし、自分自身が専門家でなくても、専門家たちがどのように検証したかを検証することはできます。つまり、彼らの根拠が開示されているかどうか、彼らが、どこで一致がありどこで不確実性があるかを言っているかどうか、そして反論が読み返せるままであるかどうか。気候変動に関する政府間パネルは、たとえば、自分の所見について、それらがどれだけよく証拠づけられており、専門家たちがどれだけ一致しているかを示しています。まさにそれゆえ、その方法と重み付けにおいてそれを批判することができ、それ全体を信じたり、それ全体を拒否したりする代わりに。

この検証の経済には、互いを映し合う二つの危険があります。一つは、故障したフィルターで、あらゆる奇跡の治癒やあらゆる囁くような示唆が調査を受けるというものです。この故障の上に詐取された検証価値が築かれます。もう一つは、詰まってしまったフィルターで、政府、多数派、専門家、伝統がとにかく言っていることしか通さないというものです。これら四つはよい概算法則ですが、どれもそれ自体では支えません。専門家の合意は、彼らの独立性と同じだけの価値しかありません。互いに書き写している百の声は一つの声です。そして逸脱を罰する多数派は、もはや多くが検証したことを示すのではなく、多くがあえて言うことを示しています。同様のことを、事柄そのものに固有の利益を持つ政府や、別の世界で実践的に検証されてきた伝統に問うことができます。あなた自身のフィルターが傾いているかどうかは、対称性が最も確実に示します。都合の悪いものを都合のよいものと同じくらい速く払いのけていますか。傾いたフィルターは、まさに自陣営の限界に沿って走っています。それは、自分の側を乱すものは何も検証せず、相手側が言うことはすべて検証します。健全なフィルターは労力を節約し、傾いたフィルターは恐怖や同調を節約し

ます。検証が危険になったために未検証のものが支配した社会がありました。

同じ試しが、逸脱する人を突きます。ある意見が支配しているからといって、それが逸脱しているからといって、それが真になるわけではありません。多数派は誤ってきましたが、たいていの逸脱者も誤っており、ただ誰も彼らのことを覚えていないだけです。ほとんどすべての人々、政府、報道、専門家世界が誤っていると考える人は、それゆえまず、自分自身が誤った道を走っていないかを問わなければなりません。彼は自分の推測に反する証拠も探しているでしょうか。彼は反対側の最強の代表者を知っているでしょうか、それとも最弱の代表者だけを知っているでしょうか。彼は、事態がどうであるかを知りたいのでしょうか、それとも自分が他の人々より賢いと確認されたいのでしょうか。ある主張がよく検証されたものから遠く逸脱していればいるほど、それだけ多くのものを提示しなければなりません。それはその主張についての判断ではなく、負担の分配です。そしてよく検証されたものも誤りうるのです。ただ、それは証拠によって動かされうるのでなければなりません。

この経済には一つの限界があります。それは注意を分配するのであって、真理を分配するのではありません。低い基準率は、証拠へのより厳格な要求を正当化しますが、何も反駁しません。利益を持つ人も正しいことがあり、独立した人も誤りうるのです。真と偽については、まず検証そのものが決定します。そうでなければ、これまで稀だったことはもはや決して検証されず、何も新しいものは新しいものとして認識されえないでしょう。

10b.1 第二のレベル：配分

> **□□ 21□□□□□□□□□**
>
> 第10.1章の象の学者たちについての報道を取り上げ、第一のレベルが提供できるすべてのものでそれを吟味してみてください。あなたは何を見いだしますか。
> 情報源は申し分なく、学者たちは自ら触れて確かめました。何の利害も見受けられません。報告は互いに矛盾せず、どれも直接の体験に基づいています。そこに何か不自然な点はありません。存在するものについてのあらゆる吟味は合格します。それでも全体像は歪んだままです。あなたが誤りを見つけられるのは、六つの報告を自分で読み直し、何が欠けているかを確認した場合だけで

> しょう。しかし、これらの吟味のどれもそこには向けられていません。それらは語られたことを吟味するからです。

限界を知っている道具は、何にでも信頼される道具よりも価値があります。

この道具が機能しない欺瞞は、象についての報道や第10.3章のプロパガンダのように、真実しか主張しません。そして配分を用いて働きます。何が選ばれ、何が選ばれないか、何かがどのくらい頻繁に繰り返されるか、どのような文脈でどのような順序で現れるか、という配分です。「みんながXについて話している」（DE: „Alle reden über X“）しかし、たいていの人はまったく別の心配を抱えています。「専門家が警告している」、しかしそれは百人のうち三人です。例外が通常の事例として示され、一瞬の断面が傾向として示され、あらゆるデータに反して一つの個別の運命が示されます。あるいはその逆です。個々の言明はどれも真でありえます。攻撃されるのは、何が頻繁で何が稀かについてのあなたの感覚です。そしてこの感覚は議論によって生じるのではありません。それは千もの報道、会話、イメージから沈殿してきます。第4章の前判断はここで、もう一段深いところで私たちと出会います。持ち込まれた内容としてではなく、持ち込まれた頻度として。

第一のレベルでの問いは「それは真か」です。第二のレベルでは「それは代表的なものか。そしてなぜ私はまさにこれを見るのか。私は何を見ていないのか」です。有名な探偵小説では、シャーロック・ホームズが、夜に吠えなかった犬を通じて事件を解決します。決定的な手がかりは、欠けていた手がかりでした。その方法の濫用において、捏造は、そのなかに現れなかった選択肢を通じて自らを裏切りました。外国について自然に欠けていたことが、ここでは主要なことになります。真なるものだけを示す者は、示すものによってではなく、省くものによって自らを裏切るのです。

それは実際のところ、どれほど頻繁なのでしょうか。真実の単一事例は頻度について何も語りません。逸話を世界についての言明に変えるのは、率だけです。もし反対が真であるなら、私は何を見るはずでしょうか。そしてもしそれを見ないのなら、それは欠けているのでしょうか、それとも私に示されていないのでしょうか。この問いは、世界を、あなたが持つ世界像から区別します。私に届くものを選んでいるのは誰か、あるいは何か。そしてどの尺度によってか。真理によってか、怒りによってか、費やされた時間によってか。完全に信頼できる情報源の流れも、選択が歪んでいれば歪むことがあります。そして最も重要な選別者はあなた自身です。あなたが自分で一面的な流れ

を組み立てるなら、誰もそれを強制する必要はありません。そして最後に、新しい論拠を挙げられないまま、私の「正常」についての感覚がずれていないでしょうか。本物の学びは、自分の根拠を示すことができます。名づけられる根拠のない変化は、較正操作のしるしです。ゆっくり温められた水のなかで、熱くなりすぎた瞬間を名づけられない、よく知られた寓話の蛙のように。

10.5 誰も検閲しないのに、それでも濾過されるとき

最も深刻な形態には宛先がありません。何が真と見なされるかを定める官庁は（第21.8章）、較正にとっては簡単な事例です。それは名指しできます。捉えがたいのは、誰も設置しない操縦です。官庁が指摘を与え、プラットフォームがそれに従い、ある委員会が住民にどう語りかけるべきかを勧告します。各段階にはもっともな根拠があり、誰も検閲しておらず、そして最後には、誰もそれを決定していないのに空間が濾過されています。パンデミックの間にそれがどのように見えたかは、第21.8b章が示しました。そのような操縦が行われるかどうか、またどの程度行われるかは、指摘とその遵守が公に読み取り可能である場合にのみ検証できます。

このような濾過の場合、第二層の検証も容易に機能しなくなります。なぜなら、手段は作動しているのに、結果がそれでも正しくないからです。官庁はこれまで信頼できると判明しており、コンセンサスは広く、個々の言明は成立しています。ところがそれは、それに反するものが取り除かれた像についてなのです。何が欠けているかという問いに答えることができるのは、ここでは矛盾との取り扱いにおいてだけです。反対の立場は反駁されたのか、それとも単に分類されたのか。それは片づけられたのか、それとも消えてしまったのか。それはまだ読み返せるのか。もはや見つけることができない立場は、それによって反駁されたのではありません。おそらくそれは除去されたのであり、反論なしに成立したコンセンサスは、まずそれが成立した空間についての所見です。それはそれでも真でありえます。同じ規則が逆方向にも当てはまります。反論がないことから操作を推論するのは、反対側からの同じ誤りです。というのも、事柄が明瞭だったがゆえに成立したコンセンサスもあるからです。反論があったかどうか、そしてそれがどうなったかは、自分で見に行くことができます。単にそれが存在しないことからは何も帰結しません。

これらすべてに対して、すべての人に正しい重みづけを定める機関で応えるという誘惑は身近です。権威づけられたファクトチェッカ

ー、真なるものを上へ並べ替えるアルゴリズム。実際にほとんどすべての専門家がある立場を支持している場合、少数意見は同じ空間を得るべきではありません。それは、重みづけの問題であり続け、少数意見がその証拠の支えるだけの空間を得る限り、正しいことです。罠になるのは、重みづけから排除になるとき、もはや誰も、大きな多数派がどのように成立したかを問わなくなるとき、「危険」という分類が検証に取って代わるときです。そのような機関は問題を解決せず、移し替えます。そうなるとすべては、誰がその機関を占めるかにかかっており、誰が回路を占めるかが、その機関を信頼するすべての人の較正を占めることになります。分散した自前の較正には、切り替えることのできる主電源がありません。だからこそそれは、自由な社会が市民に必要とする能力なのです。人々に自ら検証する能力があるとみなす者は、彼らに自ら決定することも信じなければなりません。

このことは、今日読み取り、書き取りに加わる言語モデルにも当てはまります。そのようなモデルが正常、論争中、またはコンセンサスとみなすものは、それが学習したテクストの沈殿物であり、この堆積の下をモデルはほとんど覗き込むことができません。まさにそれがもっとも流暢に「ほとんどの専門家」を引き合いに出すところで、しばしば語っているのは沈殿物であり、検証ではありません。それでも、第二層の道具としては強力でありえます。反対意見、基準率、欠けているものを探させればよいのです。対抗策は、そのようなモデルにとってもあなたにとっても同じです。多数派や頻度が問題になるところでは明示された不確実性、欠けているものの探索、コンセンサスについての自分の感覚への不信、他者による検証です。

関連する歪みは、選択によってではなく、測定そのものによって生じます。ある状態を示すはずの数値が、人々がそれによって評価される目標になると、人々は数値が合い、状態が合わなくなるまで行動を変えます。学校は教科の代わりに試験を練習し、役所は簡単な事例を先に処理します。その数値は当初は良い道具でしたが、その使用によって認識価値を失いました。誰かがそこに何かを偽造したわけでもないのにです。そのような数値に出会う人は、それがどのように測定されたかだけでなく、それによって誰が評価されるのかも問います。

この層に対しては免疫はなく、警戒があるだけです。人は、個々の言明がすべて正しいところでも、重みづけを検証し訂正することを学ぶことができ、それを何度も繰り返し行わなければなりません。

さらに読む： 較正 (2026), 倫理学 – 私たちがすでに行っている善 (2026), 章 15.8, 組織 (2026), 章 5 and 6

第v部：過程としての真理

第23章 真理と真理の過程

16.4 「真理は全体である」が意味すること

終わることのない吟味、修正可能なままの秩序――結局のところ、暫定的な知見の寄せ集めがあるだけだと考える人もいるかもしれません。これに抗するのが、本書で何度か出てきた一文、すなわち「真理は全体である」です。この言葉はしばしば完全性への呼びかけとして理解されます。つまり、あらゆる事実を集めれば真理を手にする、と。しかし、それは意味されていることではありえません。

生き物を解剖して、あらゆる器官を記録し、あらゆる細胞を顕微鏡で観察することができます。そしてまさにそのとき、生命は消えています。ゲーテはこのことをメフィストフェレスの口に載せています。「生きているものを認識し記述しようとする者は、まず精神を追い出そうとし、そうして部分を手にするが、ああ、精神的な絆だけが欠けている。」 思考においても同じことが起こります。あらゆる論拠を集め、あらゆる視点を列挙し、あらゆる問いをつぶさに検討しても、それらを一つの洞察へと結びつけるものをなお欠くことがあります。全体が何も変わらないまま各項目を省略したり別の項目に置き換えたりできるような列挙は、整然と見えても絆を持ちません。リストが目的に仕えている場合、たとえば航空機の整備では、それは生きた秩序に属しています。それが理解の代わりになる場所では、リストは死んだものになります。

> DE: „Wer will was Lebendigs erkennen und beschreiben, Sucht erst den Geist heraus zu treiben, Dann hat er die Teile in seiner Hand, Fehlt, leider! nur das geistige Band.“

したがって、何かが全体であるのは、何も欠けていないからではなく、諸部分が互いを規定するからです。これを、集めてチェックを付けるだけの機械的完全性に対して、生きた完全性と呼ぶことができます。良い肖像画は、人物の特徴を、すべてのほくろを記録しなくても示します。良い探偵は、いかなる手がかりも見落としませんが、すべ

てに同じ重みを与えるわけではありません。事件がかかっている手がかりを探し、残りはそれぞれの場所を得るか、未解決の項目として見えるままにしておきます。真理とはこの意味で、生きた、論理的に秩序づけられた、発展する全体です。

生きた、とは、諸部分が相互関係のうちにあることです。それぞれが他を指し示し、他を通じて自らを規定し、他とともに発展します。あたかも、各有機体が他の器官との相互作用においてのみ働く有機体のようにです。

論理的に秩序づけられている、とは、諸関係の認識可能な構造があることです。すべてが恣意的にすべてと結びついているのではなく、段階、移行、発展の線があります。秩序は外部から押しつけられるのではなく、事柄そのものから生じ、事柄に対して自らを実証しなければなりません。

発展する、とは、全体が初めから完成したものとしてあるのではなく、それがそれであるところのものに初めてなることです。したがって、このテキストもまた、秩序を前提するのではなく、遂行のうちで秩序を展開してきました。

全体とは、連関を理解するために本質的なものが何も欠けていないことです。だからといって、可能なことがすべて言及されなければならないわけではないことは、肖像画が示すとおりです。

したがって、真理は本質的に結果ですが、完成した製品ではありません。真理は思考のうちで生じ、矛盾を通じて発展し、私たちの願いに抵抗するものをも取り込む体系的統合において完成します。この全体には、それを求める私たち自身も属しています。

23.5a 過程としての真理

到達されたあらゆる秩序が開かれたままであることは、真理が存在しないことを意味しません。それは、真理が展開することを意味します。しかも二重の意味で。私たちの認識が発展し、そしてしばしば、私たちが認識するものもまた発展します——生命、都市、社会が、しばしばまさにそれを理解しようとする私たちの努力を通じて発展します。

真理とは何かを、本書は前もって固定してきませんでした。本書はそれを一歩ずつ展開し、それぞれの歩みは前の歩みにまだ何が欠けていたかを示しました。初めにあったのは、自らを前提する問いです。「真理とは何か」と問う者は真の答えを望み、吟味に異を唱える者は、そうすることで吟味しているのです。この自己関連性だけでは、

真理とは何かはまだ説明されません。それが示すのは、私たちがすでにそのただ中にいるということです。盲目の学者たちは、事柄は多くの視点をまとめ上げることで初めて開かれることを示しました。そして、そのまとめ上げが生きた全体であり、諸部分が互いを規定するからこそ、それは付け足しではありません。視点が互いに矛盾した場合、拒絶することも、単に並置することも助けになりませんでした。助けになったのは、両者を説明し保存する原理だけです。探偵は、あらゆる手がかりが自分の場所を見つけることを要求しました。そして第11章は、私たちの願いや解釈に抵抗するものもまたこの連関に属しており、その外にあるのではないことを示しました。真理とは、これらすべてがかみ合う過程です。

その時点で到達されたものは、認識された真理と呼ぶことができます。それは単なる意見ではありません。なぜなら吟味を通過しているからです。しかし、最後の言葉でもありません。それは、より良い秩序がそれを止揚するまで持ちこたえ、その際に保存されたままになります。ニュートン力学が相対性理論のなかで極限事例として保存されているのと同じです。さらに先へと駆り立てるのは、本書の歩みが展開してきたことです。矛盾が開いたままになっている秩序、手がかりが場所を持たない秩序、本質的な何かが欠けている秩序は、まだ全体ではありません。探し、見いだし、さらに探し続けることの全体が真理の過程と呼ばれます。それは、真理が随意に作られる交換ではありません。なぜなら、そのうちで妥当するものは、いかなる願いにも多数者にも屈しないものに耐えなければならないからです。

ここから、別の言い方も理解できるようになります。それは一つの反転によって生じます。秩序が見いだされると、視線はその秩序そのものへ向かいます。説明は、それが事柄を完全に、矛盾なく説明するならば真と呼ばれます。報告は、それが本質的なものすべてを適切な形でもたらすならば真と呼ばれます。概念は、それによって全体が把握できるならば真と呼ばれます。そして、得られた概念によって、事柄そのものが測られます。脚が二本で倒れてしまう椅子は、本来の椅子ではありません。困ったときに信頼できることを示す人は、真の友人です。作品は、それがそうあるべきものであるならば、成功しています。この事柄の真理は、第一の真理に対立しません。それは第一の真理から生じます。なぜなら、事柄が測られる概念は吟味のうちで獲得されてきたものであり、その概念もまた、一つの生または一つの作用の全体においてのみ自らを示すからです。

認識された真理は、より良い秩序だけが明るみに出す誤りを含むことがあります。フロギストン説は、一時期、燃焼についての最良の説明であり、それにもかかわらずより良い説明に取って代わられまし

た。そのうちで現象を説明していたものは、後者の中に保存されたままでした。だからこそ、真理の過程は停止することがありません。

23.5 踏み車と他なる無限

一つの反論が浮かびます。探求が決して終わらないなら、それは無駄ではないのか、と。到達できないままの目標は、目標ではなく踏み車にすぎないように思われます。

この反論は、無限についてのある特定の像、すなわち「つねにあと一つ」という像を突いています。あと一つの事実、あと一つの研究、あと一つの視点、そして目標は同じだけ遠いままです。ちょうど、いつでも1を足すことができる数のように。もし真理がこのように無限であるなら、反論は正しいでしょう。

しかし、この像を、あなた自身が本書をたどった道と照らし合わせて吟味してみてください。水の中の棒が折れて見えるのはなぜかを本書が示したとき、あなたは遠い目標へ向かう一歩を踏み出しただけでしたか。それとも、何かを認識しましたか。その理由を理解した人は、何かを認識したのであり、この洞察は全体でした。半分ではありませんでした。その後に光学が問い続けたことは、その洞察を不完全にしたのではなく、それを生きたものにしました。個々の探求は、その機縁が、それが問われた目的にとって明確にされたとき、終わります。それが属している過程は終わりません。

それが他なる無限です。終わりなく遠いものではなく、その歩みの一つひとつにおいて現実的である過程です。全体は道の終わりで待っているのではなく、あらゆる認識のうちですでに働いており、認識を超えてさらに駆り立てます。あらゆる洞察は認識された真理であり、そのどれも最後のものではありません。外から見れば、真理の探求は、近づけば近づくほど遠ざかる地平線に似ています。内から見れば、一歩ごとに地歩が勝ち取られています。地平線は遠ざかり——地歩は残ります。

哲学はこの二つの像に名前を与えています。つねにあと一つは悪無限と呼ばれ、それぞれの歩みにおいて自分自身のもとにある過程は真無限と呼ばれます。このことにかかっているのは、真理の探求の終わりのなさが無益を意味するのか、前進を意味するのかということです。

23.1 多くの道、一つの方向

吟味には方向があります。すなわち、何も抑圧しない全体へ向かう方向です。だから、すべての道が同じように良いわけではありません。とはいえ、この全体は吟味においてのみ開かれるので、多くの道がそこへ通じています。この立場を「方向づけられた多元主義↑」と呼ぶことができます。方向づけられているのは、方向があるからであり、多元的であるのは、同じ事柄についての異なる視点が互いに補い合うからです。この方向を示すのは、特定の結果ではなく、吟味そのものの仕方です。すなわち、根拠が与えられること、視点がまとめられること、矛盾が徹底的に考え抜かれること、そしてあらゆる結果が他の人びとにとって吟味可能であり修正可能であり続けることです。オーケストラがそれを示しています。各自が自分のためだけに演奏すれば混沌が生じ、全員が同じものだけを演奏すれば一様などろどろが生じます。音楽が生じるのは、異なる声が一つの全体へと適合するときです。

第5章の区別はここでも当てはまります。ある立場は部分に触れています。すなわち、一緒になって初めて像を与える知見、データ、観察です。それらは全体への適合性が吟味されます。他の立場は、ペソアの異名者たちのような全体としての見方です。それらは、構成要素へと縮減されることなく、何を見ているのかを問われます。このことは、すべてを調和させることを意味しません。救い出せるものもあれば、境界を画することしかできないもの、耐えることしかできないものもあります。真理の探求は区別し、根拠をもって退け、まだ誠実な媒介を見いだしていないものを開かれたままにします。統合は吟味の後であって、吟味の代わりではありません。それが、まえがきが語っていた第三の道です。陣営のあいだの中間ではなく、各人に対してまず、その人が何を見てきたのかを問うことです。

だからこそ、多様性には限界があります。ある立場は、吟味が始まる前に吟味を終わらせてしまうところで問題になります。すなわち、自分自身の真理を不可侵と宣言すること、あらゆる真理を権力ゲームと宣言すること、あるいは判断を専門家に委ねてしまうことによってです。原則的に根拠づけを拒む者は、共通の吟味から自らを排除します。吟味への敵意までも正当と宣言する開かれた態度は、自らを廃棄します。吟味を開かれたままに保つ立場は、次の二つを結びつけます。「私は間違うことがあるが、私には十分な根拠がある。」 (DE: „Ich kann mich irren, aber ich habe gute Gründe.“)それは、他者を遠ざけるのではなく求め、自分の頭のなかでは吟味できないものを相互に吟味し、まだ知らないことを率直に語ります。

第24章：このテキストは、自らが言っていることを実行しているか？

17.2 道のり

これまで歩いてきた道のりを振り返ってみてください。それは、自分自身を前提とする問いから始まりました。すなわち、真理とは何かと問う人は、真なる答えを望んでいる、という問いです。それは、使うことなしには否定できない前提へと導き、最も単純な知覚のうちにある活動へと導き、それを導く前判断へと導きました。多くの報告から象が、矛盾から扉が、手がかりから事件が生まれました。そしてこれらすべての一歩は、そのどれもが問わなかった問いへと向かいました。確かめること、前提すること、組み合わせることがすべて経験のうちで起こるとすれば、現実との一致とは何を意味するのか、という問いです。その答え――現実は、経験の外ではなくその内で、抵抗のうちに自らを知らせる――は、第一部が準備してきたものを一つにまとめました。そこから、異なる領域は異なる仕方で抵抗し、異なる仕方で理解されることを求めること、確かめることは方法へと展開できること、そして、確かめることは人を自由にするから、真理の名においてそれを妨げる者たちに対しても守られなければならないことが示されました。最終的に最も確かめにくいのは、まったく存在しないもの、すなわち省略されたものです。それは、真実だけからなる像を歪めます。その後になってはじめて、真理が何であるかをまとめることができました。

> **□□22□□□□□□□**
>
> その順序は偶然だったのでしょうか。私たちは探偵の原則から始めて、自己言及で終わることもできたでしょうか。
> 試してみてください。まず、異なる視点のつながりについて話さないまま、誰かに探偵の原則を説明してみてください。あるいは、矛盾を実りあるものとして経験したことのない人に、弁証法を説明してみてください。道のりの後半の部分についてはどうでしょうか。一致が何を意味するかが明らかになる前に、確かめることの悪用について語ることはできるでしょうか。あるいは、手がかりに重みを与えることを学ぶ前に、較正について語ることはできるでしょうか。何が起こるでしょうか。
> おそらく、どの場合もうまくいきますが、より難しくなります。時には何かが欠けており、時には多くが抽象的なままです。別の

> 順序も考えられたでしょう。選ばれた順序は恣意的ではありません。

道のりには、歩くうちに初めて生まれる必然性がありました。ここで必然的とは、他の道のりが考えられなかったということではなく、それぞれの一歩が前の一歩に根拠を持っていたということです。それぞれの概念は、自らにまだ欠けているものを示し、そうして次の概念へと駆り立てました。しかし、回顧はお世辞になることがあります。後から見ると、単に起こっただけの多くのことが必然的に見えます。より厳しいテストは、このテキストが自ら言うことを実行しているかどうか、すなわち遂行的に一貫しているかどうかです。

24.1 試し

主張されました。真理は遂行のうちに生じる、と。真理は出来上がった文として受け取られるのではなく、自分自身の検証のうちで形成されます。このテキストは、あなたが信じるべき定義から始まったのではなく、あなたがすでに行っていることから始まりました。それがそこにとどまっていたかどうかは、あなただけが判断できます。あなたが自分で検証した箇所はどれだけあり、あなたがただ従うべきだった箇所はどれだけあったでしょうか。

主張されました。すべては互いに噛み合わなければならない、と。それを検証してください。ほつれた端はありますか。各章は全体に組み込まれていますか。そうでない箇所では、このテキストはその箇所で誤っています。

主張されました。先-判断は不可避だが、意識的で改訂可能でなければならない、と。このテキストも何かを前提しており、しかもすべてを同じ仕方で前提しているわけではありません。真理が重要であること、根拠が妥当すべきであること、他者が、その根拠を負うべき可能的な検証者であることは、改訂可能な先-判断ではありません。それを否定する者は、根拠によって正しくなろうと欲し、それによって、自分が否定しているものを要求しています。この本はそこから出発しました。検証する者はさらに、判断が事柄そのものにしたがうのであって願望にしたがうのではないこと、したがってあらゆる結果が訂正されうることを要求しています。内容を要求しているのではありません。個々の場合に何が真であるかは、これらの前提のどれからも帰結せず、検証のうちで初めて示されなければなりません。これらの前提をこのテキストは外部から持ち込んだのではなく、検証すること

の遂行において露出させました。しかし、検証するのではなくただ正しくありたいだけの者には、いかなる論証も届きません。共通の探求へと導く証明はなく、ただ根拠を受け入れる用意があることだけが導きます。テキストが人間について想定していること、つまり人間は理性的でありうること、そして相互理解が成功することは、これとは別です。これらは条件ではなく期待であり、経験はそれらを裏切ることがあります。個々の場合にはしばしば十分に。前者は、それらを要求する遂行によって確保されており、後者は実証によってのみ確保されています。

このテキストの例も天から降ってきたものではありません。中古車、探偵、祖母のレシピ、それは特定の言語、特定の文化、特定の時代です。別のテキストは別の例を選んだでしょう。要求は例のうちにあるのではなく、例において見えるようになる遂行のうちにあります。そしてそれらは、あなた自身の別の例においても同様に示されなければなりません。そうでなければ、この本は誤っています。

主張されました。検証することは自由にする、と。あなたがより自由に感じるかどうかは何も証明しません。偽造もこの感情を生み出すことができます。第22章の方向テストが残ります。あなたは今、この本なしで、以前よりよく検証できますか。

主張されました。諸原理は転倒されうる、と。これはこの本にも当てはまります。この本を使って、自分が優れていると感じる人は、「私は啓蒙されている、他の人々は陣営思考だ」 (DE: „ich bin ja aufgeklärt, die anderen sind Lagerdenker“)「私は操作を見抜いている、他の人々は見抜いていない」 (DE: „ich durchschaue die Manipulation, die anderen nicht“)などと考える人は、この本を誤解しています。その概念は棍棒として用いられえ、その試しは、自分に合わないあらゆる確信に対して用いられえます。それに対して守るのは、それらをまず自分自身に適用することだけです。私はどこで独断的か。私のどの確信を批判から守っているか。そして第11a.4章の問い。私にとって重要だった事柄について、私が最後に考えを改めさせられたのはいつだったか。

主張されました。真なるものばかりでも、欠けているものによって歪んだ像を生み出しうる、と。これはこの本にも当てはまります。第IV部の事例は、あらゆる報告と同じように選択されています。それらにおいて、第10章が要求することを検証してください。それらはすべての陣営から来ているか、それぞれに同じ問いが立てられているか、そして何が欠けているか。

残るのは、このテキストが批判に対して開かれているのか、それとも自己言及性によって免疫化されているのかという問いです。あなた

が定式化できるあらゆる反論は歓迎されます。このテキストが自分自身の原理に反論していることを示してください。そうすれば、それはその箇所で論駁され、変更されなければなりません。攻撃できないのはその出発点だけです。それが崩れるのは、検証することを、その際に検証することなしに否定する者が見つかった場合だけです。この条件は誰も満たすことができません。しかしそれは隠れ家ではなく、第22.3章の検証することの開かれた論駁不可能性です。論駁可能なのは、この根拠の上に築かれたすべてのものです。それには、どのように検証されるかということ、そしてこの本がそれについて語るすべてのことが属します。その検証の概念に至るまで。否定できないのは、検証されているということ、そしてあらゆる検証がその際に要求しているものだけです。検証の概念を訂正する者も、検証しています。「ここでは一文を除いてすべてが改訂可能だ」という反論は、したがって的を射ていません。除外されているのは文ではなく、改訂が存在しえないような遂行です。

真理過程についてのテキストは、したがって決して完成することができません。もし自分を完結したとみなすなら、それは自分自身の定立に反論することになります。最後の判断を下すのは、このテキストではなく、あなたです。

25.1 ここから先へ

ここで遂行において展開されてきたものは、二つの方向へと自らを越えて指し示しています。

一つは、確かめることの諸形態がどこから来て、どのように連関しているのか、つまり、重要であるものを失わずに、どのように秩序づけるのかという問いです。確かめることは、みずからを理解しようとします。それに熟達した人は自発的であり続け、方向を変えなければならないときにより早く気づきます。

もう一つは、行為することです。あなたはすでに、交通の場面では、他者を、障害物としてではなく、決断し、誤りを犯す行為者として認めています。料理をするとき、あなたは味、健康、時間、お金を、考えもせずにまとめ上げています。夕方、子どもがまだ遊び続けたがり、翌朝には十分休息していなければならないとき、あなたは両方の懸念に応える解決を探します。そして、誰もいない通りで午前二時に、歩行者として赤信号の前に立つなら、あなたはその規則が何のためにあるのかを問います。これらは、あなたが確かめるときに使う

のと同じ能力です。したがって、自分の考えるときに何を行っているのかを理解する人は、より意識的に行為することもできます。

真理には多くの顔がある——しかしそれは一つです。そしてあなたはそれを認識することができます。

さらに読み進めるには：思考 – 失わずに秩序づける (2025), 章 13、倫理学 – 私たちがすでに行っている善 (2026)

付録b：真理の諸理論が見てきたもの

B1 導入: 古い論争

二千五百年にわたって真理について論争されてきたサロンを思い浮かべてください。一方の端では、誰かが最も古い見解に固執しています。文が、あるものを言うとき、その文は真である、と。もう一方の端では、整合説の論者が叫びます。「いったい何とその文を比較しようというのですか。私たちは自分の判断しか持っていません。真であるとは、私たちの知識の全体へ適合するものです！」 (DE: „Womit wollen Sie den Satz denn vergleichen? Wir haben nur unsere Urteile. Wahr ist, was sich in das Ganze unseres Wissens fügt!“)その間では、プラグマティストたち（「真であるとは、長い目で見て実践的に検証されるものだ」 (DE: „Wahr ist, was sich auf die Dauer bewährt“)）、討議論者たち（「真であるとは、自由な検証においてすべての人の前で成立しうるものだ」 (DE: „Wahr ist, was in freier Prüfung vor allen bestehen könnte“)）、構成主義者たち（「私たちは自分の現実を自分で構築する」 (DE: „Wir bauen unsere Wirklichkeit selbst“)）が議論しています。

誰もが説得力のある論拠を持ち、他者の弱点を示すことができます。論争は終わりがないように見えます。

第5章の盲目の学者たちの物語は、一つの推測を示唆します。おそらく誰もが、自分が触れたものに関しては正しく、それを全体だと見なすや否や誤っているのでしょう。そうだとすれば、本来の問いは、誰が正しいかではなく、どの観点において見解が互いに適合するかということになるでしょう。この付録は、その推測を理論そのものにおいて検証します。それは各理論について、この本がその理論から何を取り入れ、何を取り入れないかを述べ、ほとんどの理論について、どこで問いが開かれたままであるかを述べます。

B2 論争はいかにして生じたか

同じ探求の異なる契機

真理の探求には、本文が示してきたように、異なる契機がある。何かが自らを示さなければならない（第3章、第11章）。それは残りのものと適合しなければならない（第8章）。他者がそれを検証できなければならない（第11章a.1、第20章5）。そしてそれは自らを実践的に検証しなければならない（第11章3b）。

これらの契機は互いに属し合っているが、それぞれを単独で考察することもでき、哲学史は実際にそうしてきた。経験論者たちは経験から出発し、合理論者たちは悟性がそれとともにもたらす秩序から出発した。プラグマティストたちは実践的検証を中心に置き、ディスクルス理論家たちは共同での検証を中心に置いた。

なぜそれぞれが順番に尺度となったのか

これらの契機のそれぞれには、それだけが決定するように思われる事例がある。タブレットが機能するかどうかは経験が示す。証明が正しいかどうかは諸文の連関が示す。橋が支えるかどうかは、それが支えること自体が示す。そのような事例から出発する者は、自分の契機をいたるところに見いだし、他の契機は単なる付け足しとしてしか見いださない。これらの理論のほとんどは、他の契機を知っており、それらを組み込んでもきた。論争は、どれが他の契機の尺度であるかをめぐるものだった。

それは哲学史における学者たちの状況であり、ただより精緻な形をとっている。各人は手にしているものを正しく記述し、それを、他の部分がそれに照らして測られるべき基準と見なすのである。

B2a ピュロン主義的懐疑主義：判断保留

教説の争いから、古代の哲学者たちはすでに独自の結論を引き出していた。すなわち、決定しないことである。その祖とされるのが、エリスのピュロン（前360年頃〜前270年頃）であり、彼は何も書き残さなかった。体系的にまとめられた教説は、ギリシア人医師セクストス・エンペイリコス（後2世紀）の『ピュロン主義綱要』によって知られている。そこでは懐疑主義者とは、探求を続ける探究者を意味する。

第2章の懐疑主義者と、このピュロン主義者には共通点がほとんどない。彼は、人は何も知ることができないと主張するわけではない。自分自身の定式さえ差し控える。セクストスにとって懐疑主義とは一つの能力である。すなわち、あらゆる言明に対して、それと同じ強さの言明を対置する能力である（『綱要』I 8）。同等の強さ、ギリシア語でイソステネイアから、判断保留、つまりエポケーが帰結し、その影のようにして無動揺、つまりアタラクシアが従う。セクストスはこの関連で画家アペレスについて語っている。彼は馬の口元の泡を描き出すことができず、最後に絵に向かってスポンジを投げつけた。その跡が泡を生み出したのである。人は結局、それによって生きることができる。懐疑主義者は、自分に現れるもの、空腹、自国の慣習、自分の技術の規則に従うのであって、それがまさにそうであると主張することはない。

同等に強力な反対言明をどのように見いだすかは、トロポス、すなわち、あらゆる判断を停止させることができる転回によって教えられる。そのうち五つは、伝承によればアグリッパという後代の懐疑主義者に帰せられている（『綱要』I 164-177）。あらゆる事柄については争いがあり、それを決定しようとする者は根拠を必要とし、その根拠にはさらに別の根拠が必要であり、以下無限に続き、どこかで断ち切る者は何かを前提しており、反対者は同じ権利で反対のものを前提することができ、根拠を根拠づけられるものから取る者は循環に陥る。さらに、すべては判断する者との関係においてのみ現れる。無限背進、断ち切り、循環は、第1章のミュンヒハウゼンのトリレンマにおける三つの逃げ道である。

本書はこのことの多くを取り上げる。第2章の反論はピュロン主義者には当たらない。何も主張しない者は、主張するという点で自己矛盾に陥ることはない。トロポスは、確かめようとする者なら誰もが問う、確かめるための真正の問いである。すなわち、根拠は何に支えられているのか、何が前提されているのか、根拠は互いに支え合っているだけなのか、判断はどの程度まで立場にかかっているのか、という問いである。そして、根拠が実際に同等に強いところでは、判断保留が正しい答えである。本書はそれを、問いを開いたままにしておくことと呼ぶ（第23.1章）。

矛盾するのは、遂行であって、文ではない。二つの言明が同等に強いことは、出発点ではなく、所見である。それに達するために、懐疑主義者は、反対言明が最初の言明と互角になるまで、反対言明を探し求め、重みづけなければならない。したがって彼は、みずからはコミットしたくないと思っている、よりよく根拠づけられているものとより悪く根拠づけられているものとの、まさにその区別を用いて、確か

めるのである。もし彼が、同等性は自分にはただそのように現れるにすぎないと言うなら、それは別様にもなりうる所見であり、実際しばしば別様になる。7×8＝56であることは再計算でき、それに勝る反対言明はない（第10a.3章）。現れるものに従って生きることも同様である。セクストス自身もそうであったように、医師は病人に、実証済みの治療薬を与えるのであって、任意のものを与えるのではない。彼に現れるものは、すでに確かめられ、重みづけられている（第3章、第11.3b章）。したがって、違いは行いにあるというより、むしろ名称にある。ピュロン主義者は知識という言葉を用いることを差し控える。本書がその言葉で呼ぶのは、その根拠が支えるのと同じだけの確実性を主張し、みずから訂正されることを許す判断である。

それゆえ本書は、アグリッパのトロポスに対して、無限背進を受け止める第一の文をもって応答することはしない。そうした文は、反対者が逆転させうる前提になってしまうだろう。本書は、遂行における支えをもって応答する（第1章）。判断保留もまた、確かめることを通してのみ生じる。それは確かめることの一つの在り方であり、その反対ではない。その上に築かれるものは、反駁可能なままである（第24.1章）。古代懐疑主義を同時代のそれよりはるかに高く評価したヘーゲルは、1802年には、五つのトロポスを、有限なものを無制約者として定立するあらゆる教説に対する最も適切な武器と見なし、そうしない哲学に対しては使用できないと見なした。

開かれたまま残るのは、平静である。ピュロン主義者は、決定をやめるその場に平静を見いだし、本書は、確かめることのうちに自由を見いだす（第20章）。判断保留が心を静めるのか、それとも答えられうる問いを未解決のまま放置するのかは、個々の事例だけが示す。

B3 対応説——抵抗が方向を示す

最も古い答えは、アリストテレスにある。「あるものについて、それがないと言うこと、あるいはないものについて、それがあると言うことは偽であり、あるものについて、それがあると言い、ないものについて、それがないと言うことは真である」（独:「Zu sagen, das Seiende sei nicht oder das Nichtseiende sei, ist falsch; zu sagen, das Seiende sei und das Nichtseiende sei nicht, ist wahr」）（*Metaphysics* Ⅳ 7）。スコラ学は、そこから、悟性と事物そのものとの一致という定式、*adaequatio intellectus et rei* を作り上げ、トマス・アクィナスはこれを *De veritate* において引用している。それによって見えてくるのは、あらゆる真理の探求が依

拠しているものである。すなわち、われわれの思考は、われわれの恣意から逃れ去る何ものかに、自らを測り合わせねばならない、ということである。

この点を、本書は保持する。引き継がないのは、その定式にしばしば付きまとう描像、すなわち、あたかも意識の外へ出て、思考と事物とを並べて置かねばならないかのような描像である。一致は、ある種の経験がわれわれの願望や解釈に逆らう抵抗のうちに示される。鍵をポケットに入れたと確信している人は、いくらでも強く自分にそう言い聞かせることができる——しかし、ポケットが空かどうかは、その人が決めることではない。この限界において、対応は経験される——経験を超えたところではなく、経験の内で。深淵を越えた比較は消え去る。現実の比較は、思考と知覚のあいだで行われる。それは、比較ではない比較についての章（第11.3a章）が展開したとおりである。

開かれたまま残るのは、出会うことのできないものについて語る真なる文に対応するのは何か、ということである。数、規範、存在しないもの。真理制作者についての節が、この問題に立ち返る。

B4 整合説——体系は適合しなければならない

真理の整合説は、ひとつの展開された理論としては、1900年前後にイギリス観念論のなかで、フランシス・ハーバート・ブラッドリーとバーナード・ボザンケットとともに生まれた。ドイツにおける先駆は、それより20年早くロッツェとヴィンデルバントに見いだされる（B7a節）。ハロルド・H・ジョアキムは『真理の本性』（1906年）において、それを完結した形にまとめ、ブランド・ブランシャードは『思考の本性』（1939年）において、それに最も影響力のある形を与えた。その出発点は、並置することへの異論である。私たちは判断において以外には決して事物に到達することがないので、判断は他の判断に照らしてのみ測られうる。真であるのは、私たちの知識の包括的で矛盾のない全体に適合し、その全体によって担われているものである。探偵の場合と同様に、すべての手がかりは最終的にそれぞれの場所をもたなければならない。

整合説の論者たちは、妄想でさえそれ自体としては整合的でありうるという、明白な異論を知っていた。ブランシャードは、そこで意図されているのは、経験されるあらゆるものとの、知覚も含めた連関であって、選別されたものとの連関ではない、と答えた。それによって彼は、第11章が到達する地点に立っている。すなわち、この広い意味

での整合性は自らを押しつけてくるものを含み、対応による検証はその最も要求の厳しい場合なのである。ニコラス・レッシャーは後年、この理論をより控えめに提示した。整合性は真理が何であるかではなく、それによって私たちが真理を認識する基準である（『真理の整合説』、1973年）。ドナルド・デイヴィッドソンは1983年に、整合性は正しく理解されるならば対応をもたらすということを示そうと試みた。

第7章と第8章は、その核心を取り上げる。すなわち、一つの洞察が連関のうちにその支えをもつということ、そして矛盾は秩序の及ばない場所を示すということである。しかし、とりわけブラッドリーとジョアキムは、本書が彼らに従わない一点を主張した。すなわち、完成された体系だけが全面的に真であり、あらゆる有限な判断は部分的に、程度においてのみ真である、と。ジョアキム自身はこのことから、彼自身の理論も部分的にしか真ではありえないと結論した。これに対して、そのつど到達される洞察は、全体であって半分ではなく、しかし最後のものではない（第23.5章）。それは遠い体系の断片ではなく、私たちが今知っていることの可能な限り最善の秩序であり、より良い秩序のすべてにおいて保存されたままである。

イギリス観念論者たちは、ヘーゲルの「真理は全体である」という命題を好んで拠り所とした。それがヘーゲルにおいて何を意味するのか、そして本書の歩みがヘーゲルとどう関係するのかは、付録Cに述べられている。

B5 プラグマティズム：果実が木を示す

チャールズ・S・パースは1878年に、真理を、長い目で見ればすべての探究者が収束していくであろう意見として、また実在を、その意見において表象されているものとして規定しました。ウィリアム・ジェームズはこのことから、それ自身を証明するという教説を展開しました。すなわち、真なるものとは、われわれの思考において有用なものであり、「長い目で見て、そして全体として」（ドイツ語原文：「auf lange Sicht und im Ganzen」）そうである、と。真理は観念に「起こる」のであり、観念は、生起することによって真になるのです（『プラグマティズム』、1907年）。ジョン・デューイは最終的に、この語を「正当化された主張可能性」（ドイツ語原文：「gerechtfertigte Behauptbarkeit」）に置き換えました（『論理学』、1938年）。彼らがそれによって認識したのは、真なる観念と偽なる観念の違いがその帰

結において示されるということ、そして帰結を持たない観念は検証できないということです。

第11章第3節bはここに接続します。つまり、われわれは行為することによって検証するのです。プラグマティズムに対して好んで持ち出される反論は、それ自身もすでに見て取っています。つまり、すべての成功が真理を示すわけではない、と。欺瞞はしばらくの間は機能し、嘘は短期的には有用でありえます。だからこそジェームズは長期的な視点と全体について語り、パースは探究の終わりについて語ったのです。

遂行的見解はこれに同意します。真理は遂行であり、静的な状態ではなく、実践において自らを示さなければなりません。ただし、それは区別します。すべての成功が真理なわけではない、と。基準となるのは恣意的な有用性ではなく、抵抗するものとの開かれた対決における持続的な証明です。そして、自らを証明することは、機能すること以上のものです。なぜなら、行為することを把握する思考がそれに属しており、その思考なしにはそれは手探りで進むことにすぎないからです（第11章第3節b）。この点で本書に最も近いのはパースです。彼にとって真理は探究の過程にあり、個々の成功にあるのではありません。

一つの問いにおいて道は分かれます。つまり、痕跡が失われてしまったために、いかなる探究も決して到達しないであろう真理についてはどうなのか、という問いです。パースにとっては、その場合、なおも真理について語ることは難しくなります。第11章第3節cは、原理的にいかなる仕方でも自らを示すことができないような誤りの意味を否定します。しかし、痕跡がかすんでしまった過去は、原理的に接近不可能なのではありません。その痕跡は検証を可能にしたはずであり、ただ失われているだけなのです。開かれたままなのは、本書が他の場合にはすべてをそこにかける抵抗が、もはや自らを知らせることができない場合、なおどこまで真理について語ることができるのか、ということです。

B6 合意説: 真理の基準としての共同的探求

ユルゲン・ハーバーマスは、その論文「真理論」 (DE: „Wahrheitstheorien“)（1973年）において、真理を、ある主張が提起し、討議の中で償還されうる一つの要求として捉えました。真であるとは、強制と欺きから自由に検証に参加するすべての人々が同意しうるもののこと

です。カール＝オットー・アーペルは、パースに連なって、議論する人々の無制限な共同体の合意を考え、そして議論することの前提は、それを否定する際に利用せずには否定できないということを主張しました。それを試みる者は、遂行的自己矛盾を犯します。両者は、議論する誰もが前提していることを示しました。つまり、自分の根拠はすべての人に対して妥当すべきだということ、そしてあらゆる異議は聞かれなければならないということです。

ここでは、この本との一致が最も大きいのです。真理探究は決して孤独ではありません。他者は、私たちが根拠を負っている者として私たちに抵抗し（第11a.1章）、基礎づけを原理的に拒否する者は、自分自身を共同的探求から排除します（第23.1章）。

これに対して拒否されるのは、合意が真にするという考えです。すべてがあるものを真だと見なしているからといって、それが真になるのではありません。理想的条件の下での合意も同様です。合意が可能なのは、検証する人々が、盲目の者たちが同じ象に関係しているのと同じように、同じ現実に関係しているからです。この一歩は、ハーバーマス自身が後になって踏み出しました（『真理と正当化』、1999年）。真理はどれほどよい正当化をも超え出ており、討議は、共同で想定された客観的世界へ関係しています。この地点で、後期ハーバーマスは象の原理と出会います。討議はそのとき、真理が検証され見出される場所であり、真理が発生する場所ではありません。

まだ解明されていないのは、個々の論争において、合意が事柄そのものに基づいており、圧力に基づいていないことを何が示すのかということです。第10a.3章と第10.5章はそのための試しを挙げました――一致する人々の独立性、逸脱する自由、そして反論に何が起きたか――、公式は存在しません。

B7 カント――内部からの限界

イマヌエル・カントは、真理の名目的定義、すなわち真理とは認識とその対象との一致であるという定義を、明示的に「認め、前提した」（『純粋理性批判』A 58/B 82）。事物との比較を彼はこれによって主張しているわけではない。彼は、あらゆる内容についてこの一致を読み取ることのできる標識が存在することを否定する。彼の問いは別のものであった。そもそも何かがわれわれにとって対象でありうるのは、いかなる条件のもとにおいてか、と。われわれの認識は直観と概念を必要とし、われわれの直観は感性的であり、空間と時間、そして

原因のような概念もまた、われわれに由来する。それゆえわれわれは物を、それが現れるままに認識するのであって、それがそれ自体においてあるままに認識するのではない。

ここで現象とは仮象を意味しない。空間のうちにある物は現実的であり、夢と現実はカントによれば連関において区別される。すなわち、諸表象が規則に従って一つの経験へと結びつくかどうかにおいて区別されるのである。ヌーメノン、すなわち物自体の概念を、彼は「限界概念」と呼び、これはただ消極的にのみ使用されるものであるとする（A 255/B 310 f.）。それは感性の僭越を制限するためのものであって、第二の世界を記述するためのものではない。単なる否定である制限から、カントはこの限界を明示的に区別する。われわれがこの限界を知るのは、われわれの直観が感性的であることを知っており、しかも別の、非感性的な直観を少なくとも考えることができるからである。

カントが見て取ったのは、認識が能動的であって、それが見出すものに対して何かを持ち込むということ——第3章の「見出すこと」——であり、また、自らの限界を吟味しない理性は矛盾に巻き込まれるということである。本書もまた、深淵を越えた比較を斥け、現実と欺瞞を経験の連関によって区別する点で（第8章、第11.3a節、第11.3b節）、彼に近い立場にある。所与に関しては、本書はヘーゲルよりもカントに近い。思考は、みずからをそれに照らして吟味するものを生産するのではない。願望に屈しない何かが自らを示さなければならないのである（第11章、第11a章）。カントの命題「内容なき思考は空虚であり、概念なき直観は盲目である」（DE: „Gedanken ohne Inhalt sind leer, Anschauungen ohne Begriffe sind blind“；A 51/B 75）を、本書は抵抗という姿において保持している。ヘーゲルは論理学においてこの命題を概念については斥けたが、哲学がその発展を経験科学に負っていることは認めている。

第7章が水の中の棒における矛盾を解消する手続きを、カントもまた示していた。彼の二律背反は、世界全体についての一対の命題、たとえば世界は時間において始まりを持つ、および世界は始まりを持たない、といった命題であり、これらは互いに矛盾しながら、どちらも証明可能に思われる。カントが示すのは、矛盾が対象についての暗黙の想定にかかっているということ、すなわち世界全体が物自体であるという想定にかかっているということである。その想定が崩れれば、矛盾は仮象であることが判明し、カントはなぜ双方が必然的に思われるのかを説明することができる。水の中の棒についても同様である。「まっすぐである」は棒について妥当し、「折れている」は水中でのその見えについて妥当し、光の屈折がなぜそのように見えるのかを説

明する。ヘーゲルはこの手続きをカントから受け取り、それを転倒させた。ヘーゲルにおいては、矛盾はわれわれが思考する諸規定にかかっているのであって、われわれが何も知らない対象にかかっているのではなく、その解消はより豊かな規定への前進である。本書がこの見方に近いのは、矛盾が事物そのもののうちにあって、それをさらに先へと駆り立てるところにおいてである。すなわち、矛盾なしには規定されえない概念において（第11a.2節）、あるいは、もはや自らの不整合を担いきれなくなった世界観において（第19.2節）。

引き継がれないのは、したがって諸形式はわれわれのものでしかなく、限界はあらかじめ固定されているという結論である。第11.3c節は、この異論とその最も強いバージョンにおいて取り組んでいる。より弱いバージョン——制限を真なる物との比較によって知るのだという、章の前半で斥けられたもの——はカントのものではない。彼はそれを限界概念そのものによって排除していたのである。限界が知られるのは、われわれが少なくとも別の認識を考えることができるからであるというカント自身の答えを、本書は次のように受け取る。すなわち、物はわれわれの描像以上でありうることは認められる、と。本書が否定するのは、原理的にわれわれに閉ざされたままであるものをあらかじめ固定できるということである。われわれのものではないということ以外には何も知らない認識は、そのための尺度を与えない。それは、いかなる仕方でも自らを示しえない誤りが真理から区別されえないのと同様である。

論争の的として残るのは、カントを最も強く捉えていた問い、すなわち、個々の経験以上を語る判断（たとえば原因についての判断）が、いかにして普遍的にかつ必然的に妥当しうるのかという問いである。カントは必然性を、あらゆる経験に先立って固定された条件のうちに求める。本書はそれを、与えられうる根拠のうちに求め、その根拠はみずからを実証しなければならないとする。これはカントが主張したものより少ないが、必然性の放棄ではない。カントもまた、みずからの主張についてはみずからの根拠、すなわち経験の条件についての論証を持っており、幾何学においては、物の空間がどのように構成されているかを人はあらかじめ知らなかったことが示されたのである（第11.3c節）。

もう一つの点においても、本書はカントに感謝を負っている。自然目的という概念、すなわち芸術作品とは異なりその目的が外にあるのではない、内的合目的性を持つ有機的存在者という概念は、第15.2節における合目的性の諸段階の基礎をなしている（『判断力批判』第64–66節）。

B7a カント以後――一致ではなく妥当性

カントの一世紀後、彼を継承した哲学者たちは、彼自身が引き出さなかった結論を彼の限界から引き出した。ヘルマン・ロッツェはその『論理学』（1874年）で次のように述べた。われわれが外界について知っているすべては、表象のうちに持っている。したがって、われわれの表象の総体が真であるかどうかは、それ自体がわれわれに表象においてのみ知られるようになる現実との比較によっては決定できない。真なる文を他から区別するものは、ロッツェにとって、文の傍らにある存在ではなく、その妥当性である。真なる文は、誰かがそれを考えるかどうかに関わりなく妥当する。誰かがそれを考えることは頭のなかの過程であるが、それが妥当することはそうではない。

ロッツェのもとで博士号を取得したヴィルヘルム・ヴィンデルバントは、1881年、カント『純粋理性批判』百年を記念する論文において、その帰結を公然と述べた。われわれは表象以外のものを表象と比較することは決してできないのだから、真理概念はもはや表象と物との一致を意味することはできず、「表象相互の一致へと還元される」（DE: „er reduziert sich auf die Übereinstimmung der Vorstellungen untereinander“）のである。つまり、ヨアヒムより四半世紀前に、整合説が一文で述べられている。しかし、妄想でさえそれ自体として一致しうるので、ヴィンデルバントはどの一致が有効であるかの尺度を必要とした。彼はそれを規範のうちに見出した。真であるのは、結びつくべきようにつながっているものである。すなわち、自分自身の境遇の偶然にではなく、すべての者に妥当するものだけに従う意識が判断するであろうようにつながっているものである。この「規範意識」は、どこかに存在する人間ではなく、各人が自分の判断を測る基準である。こうして論理学は、クリストフ・ジークヴァルトの場合と同様に、規範科学になる。すなわち、人々が実際にどのように考えるかを記述するのではなく、真理を求めるならばどのように考えるべきかを述べるのである。

これによって見えてくるのは三つのことであり、本書はそれを受け継ぐ。第一に、深淵を越えた比較は行われない。われわれは自分の表象のほかに、表象を物と突き合わせるための立脚点を持たない（第11.3章）。第二に、判断が妥当するかどうかは、誰かがその判断を下すかどうか、またどのように下すかという問いとは別のことである。だから根拠は、その起源の歴史によって片付けられることはできない。第三に、真理の探求は当為のもとにある。確かめる者は、自分の私事ではない規則に従う。そして、正当化を原理的に拒む者は、共通の探求から自らを排除する（第18.3章、第23.1章）。

引き継がれないのは、彼らが整合説へと至った道筋である。彼らがそこへ至ったのは、対応説が物自体のところで挫折したからである。すなわち、こちらに思考、あちらに物という構図を彼らは保持し、物が到達不可能であることが判明すると、一方の側だけが残った。しかし、彼らが物自体とともに放棄したのは、決して彼方にあるものではない。表象そのもののうちには、みずからを押しつけ、いかなる願望によっても、いかなる解釈し直しによっても取り除くことのできないものが存在する。空っぽのポケットも一つの表象だが、それは退かない表象である（第11.4章）。彼らに欠けているのは、抵抗というカテゴリーである。それによって対応説は、経験の内部で、彼方で失われたものを取り戻す。現実の比較は、思考と知覚のあいだで、互いに支え合いあるいは訂正し合うアクセスのあいだで行われる（第11.3a章）。「表象相互の一致」（DE: „Übereinstimmung der Vorstellungen untereinander“）は、それが屈しないものとの一致をも意味するならば、そのとき正しい。ブランシャードは後にそのように述べた（B4節）。抵抗がなければ、規範は、正しく結びつけるべきであると言うだけで、二つの表象が矛盾するとき、どちらの表象が譲らなければならないかは言わない。

未解決のままなのは、ロッツェの言葉がどこまで届くかである。数、規範、存在しないものについては、対応説は出会うことのできる対象を欠いている（B3節）。出会われるいかなるものもそれに対応しないまま文が妥当するということが、これらの場合のより正確な記述であるかもしれない。妥当性と抵抗が、そこで同じ経験――すなわち、われわれが文の真理を意のままにできないという経験――の二つの名前であると判明するかどうかは、本書が決定しない問いである。

B8 構成主義：私たちは現実を創造する

ハインツ・フォン・フェルスターは、客観性を、主体が自分自身なしに観察できるという、主体の錯覚と呼んだ。エルンスト・フォン・グラーザースフェルトは、「真理」の代わりに「実行可能性」について語ることを提案した。私たちの知識は、鍵が錠前に合うように現実に適合する。鍵は錠前を描き出すことなく、それを開けるのである。この見解のうち正しいのは、認識する者の活動なしには認識は存在しないということである。一見すると直接的である経験でさえ、すでに媒介されている。

第3章は、それ自身の経路で同じ知見に到達する。そしてグラーザースフェルト自身、しばしば彼に対して持ち出される限界をわきまえていた。実行可能なものとは失敗しないものに限られる。そして、失敗することにおいて、私たちが恣意的に構成しているのではないことが示される。まさにここで、抵抗を通じた吟味が始まる。構成物が失敗するその抵抗において、対応が何を意味するかが示される。判断の方が物に従わなければならず、物の方が判断に従うのではない（第11章3a）。

失敗から何が帰結するかは、依然として争われている。グラーザースフェルトにとって、私たちが現実について知るのは、現実が私たちの通過を許さない箇所においてのみであり、その像を得ることはない。象の原則は、さらに多くのことを言う。多くの独立した経路が同じ箇所で失敗し、同じ箇所で通過するならば、そこから物の像が生まれ、この像は自らを実証することも、修正されることもできる（第5章、第11章3c）。それを現実の認識と呼ぶか、それとも不断により良く適合することと呼ぶかは、個々の判断の吟味においてはほとんど問題にならない。それが重要になるのは、適合していることから、現実についてはその「否」のほかに学べるものは何もないと推論される場合である。

B9 言語論的・語用論的転回：ウィトゲンシュタイン、オースティン、ストローソン

言語ゲームとしての真理

ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタインは、視線を語からその使用へと向けた。それゆえ「真である」は、隠れた性質の名前ではなく、われわれの言語ゲームのなかで役割を果たす語である。それが何を意味するかは、それがどのように使われるかを学ぶことによって学ばれる。多くの事例の部類について、語の意味とは言語におけるその使用である、と彼は言う（『哲学探究』 *Philosophical Investigations* § 43）。

ジョン・L・オースティンは、ある種の文は何かを記述するのではなく、何かを遂行することを示した。「私は約束する……」は、約束について報告するのではなく、約束をするのである。講義『言語と行為』（*How to Do Things with Words*、1955年講義、1962年刊行）において、彼はさらに、一見したところ単なる陳述でさえ、成功することも失敗することもある行為であることを示した。真理そのものへ

の一歩を踏み出したのは、ピーター・F・ストローソンである（1949年）。「It is true that ...」 (DE: „Es ist wahr, dass …“)（独：「Es ist wahr, dass …」）は、文を記述するのではなく、文を確認するのである――それは同意するのと同じような行為である。オースティンは1950年に彼に反論し、事実との一致を主張した。

両者はそれぞれ何かを見ていた。ストローソンが見ていたのは、使用における「真である」が行為であるということであり、オースティンが見ていたのは、この行為が、その行為自体が作り出すのではない何かに照らして測られるということである。遂行的見方はこの両方を必要とし、視野を広げる。すなわち、「それは真である」と言うことだけが遂行であるのではなく、探すこと、確認すること、退けることもまた、認識可能な規則に従うのである。

真理ゲームの規則

第18.3章は、科学の確立と同じ規則を述べている。ある事柄を真であると見なす者は、根拠を与えることができなければならない。異なる、正当化された見方は、考慮に入れられなければならない。対立は、素通りされるのではなく、闘い抜かれ、解決されなければならない。すべては整合しなければならない。そしていかなる立場も、より良い論証に対して免疫をもたない。

ウィトゲンシュタインならば「真である」という語の文法について、ストローソンならば確認するという行為について、オースティンならばこの行為が何において失敗しうるのかについて語ったであろう。

B9a ハインリヒス：真理の四重概念

ドイツの哲学者ヨハネス・ハインリヒス（1942年生）は、真理をもっぱら語ることから規定した。彼にとって真であること／真でないことは、まだ思考の連関ではなく、ただ人が他者に対して立てるものにすぎない。「語用論的な定立、主張、および言語行為のうちでその上に反省的に築かれるすべてのものにおいて初めて、真理と非真理について語ることができる」（DE: „Erst bei der pragmatischen Setzung, der Behauptung und allem, was an Sprechakten auf ihr reflexiv aufbaut, kann man von Wahrheit und Unwahrheit sprechen“）（『Sprache』第3巻、299頁）。そのとき真理は「言語的行為の暗黙の規範の総括、ただしその

認識内容に関して」を意味する（DE: „Inbegriff der impliziten Normen des sprachlichen Handelns, allerdings im Hinblick auf ihren Erkenntnisgehalt“）（同前）。あらゆる語ることは、つねに同時に、事象へ、語り手自身へ、聞き手へ、そして共有された意味連関へと関係するのだから、この規範は四つの側面をもつ。すなわち、事象に関する正しさ、語り手の誠実性、聞き手に対する責任、そして整合性である（304–320頁）。その際に新しいのは、彼自身の説明によれば、誠実性と責任が真理に属するものと数えられることである（321頁）。正確であることがすべて、どこでも語ってよいわけではない。医師が末期患者にその病状をいつ、どのように伝えるかは、ハインリヒスによれば、単なる配慮だけではなく、その伝達そのものの真理に関わるのである（311頁以下）。

B12節が諸理論について示していること、すなわち、各理論が真理の一つの側面を残りの側面の尺度にしてきたということを、ハインリヒスは本書よりはるか以前に示していた。彼自身の言明によれば、最初は三部構成で、彼が1973/74年に執筆し1975年に発表した論文において、1975年の講義においては四部構成で示され、1981年の『Sprachtheorie』において練り上げられた。「真理の区別された諸次元のうちのただ一つを、唯一の基準をなし定義を与えるものと宣言することは、言語のただ一つの次元を言語の次元そのものへと高めることと同様に誤りであろう」（320頁）。事象との一致は、彼にとっては対応説が見てきた側面であり、整合性は整合説の側面、聞き手に対する責任は合意説の正当な契機である。ほぼ同時期に、ユルゲン・ハーバーマスはエッセイ『真理論』（Wahrheitstheorien, 1973年）において、あらゆる発話が提起する四つの要求を区別した。すなわち、了解可能性、真理、正しさ、誠実性である。彼が真理と呼ぶのは、主張に当てはまるものだけである（B6節）。両者より古いのは、一面的諸規定がその場所をもつ全体が真理であるという命題、すなわち「真理は全体である」という命題である。それはヘーゲル『精神現象学』（1807年；付録C.4）の序文にある。ハインリヒス自身、それを最高水準の整合性の名として引用し、その際に「『その』真理という語り方の準神学的な含意」を断念している（DE: „die quasi-theologischen Implikationen der Rede von ‚der‘ Wahrheit“）（317頁）。

ハインリヒスはまた、なぜ整合性が他の側面を自分自身のうちに取り込むことができないのかを見ていた。真理には「*facta bruta* の知覚」、運命的なもの、導出不可能なものの知覚が属しており（DE: „das Wahrnehmen der facta bruta“）（321頁）、真理は他の側面から「可触性、導出不可能性、歴史性、驚き」という性格を受け取る

DE: „den Charakter der Handgreiflichkeit, Unableitbarkeit, Geschichtlichkeit und Überraschung“）（320頁）。そして真理は、与えられたものへのこの受容性を含むがゆえに、いかに「もっとも全会一致の合意」といえども真理をつくり出すことはできない（317頁）。

この点で、本書は彼の側に立つ。ハインリヒスが *facta bruta* と呼ぶものは、本書では抵抗である（第11.4章）。彼が合意に対して言うことはB6節が述べており、無条件的真理についての問いに対する彼の答え、すなわちそれは存在する、「ただし人間的なものとしては、条件づけられた歴史的実現においてのみ」存在するDE: „aber als menschliche nur in bedingt-geschichtlicher Verwirklichung“）（323頁）という答えは、第23.5a章の認識された真理、すなわち全体ではあるが最後のものではない真理である。

引き継がれないのは、その語の意味の拡張である。本書では「真である」はどこでも同じことを意味する。異なるのは、何を用いて吟味するかである（第13.1章）。手紙が、書かれていることを実際に意味しているかどうかは、その手紙自身に固有の問いであり（第15.13章）、末期患者にいま真理を告げてよいかどうかは、行為の問いである。ハインリヒスは、実践的諸側面なしには、真理は「イデオロギーから区別されえない。というのも、このものは理論的虚偽とは或る他なるもの、すなわち実践的非真理だからである」DE: „nicht von Ideologie unterscheiden, weil diese etwas anderes ist als theoretische Falschheit, nämlich praktische Unwahrheit“）（322頁）と異論を唱える。本書は、イデオロギーを、それが吟味に対して何をするかによって見分ける。すなわち、欺く者はそれを妨害しなければならない（第20.4章、第21章）。そして、ハインリヒスが伝達の真理と呼ぶものは、本書が事象の真理について語る箇所にその場所をもつ。すなわち、友人が真の友人であるという意味においてであり、ある伝達が、伝達があるべきものであるかどうか、ということである（第23.5a章）。この第二の真理は、第一の真理から生じる。正確でありながら、誤った時に語られた文は、依然として真のままである。取り逃がされるのは、その語ることである。

未決のまま残るのは、二つの捉え方がどれだけ隔たっているかである。ハインリヒス自身、文が言っていることと、人が文を用いて行うことを区別している。彼はただ、その両方を真理と呼びたいだけなのである。予見できるほど破壊的な真理は、ひとたび語られれば「真理ではない」(DE: „keine Wahrheit“)DE: „keine Wahrheit“）（313頁）と彼が書くとき、彼が意味しているのは語ることのほうであって、内容ではない。内容は「論理学における事象の真理」のままである（同前）。

とすれば、両者を隔てているのは、事象というよりはむしろ言葉である。

B10 分析哲学による精密化：真理述語から真理多元主義へ

二十世紀の分析哲学は、真理の問題を、それ以前の理論には欠けていた精密さで追究してきました。その成果の一部は、それぞれが一つの契機をより鮮明に捉えているため、ここに属します。

タルスキ：形式に限定された特殊ケースのための精密さ

アルフレッド・タルスキは1930年代に、形式言語に対して正確な真理述語がどのように定義できるかを示しました。彼の有名な図式は、一見すると自明に見えます。「雪は白い」は、雪が白い場合にのみ真である、というものです。しかし、この見かけの自明性の背後には厳密な構成があります。真理は常に、対象言語についてのメタ言語において定義され、この階層化が、無頓着な真理定義を破綻させる古い嘘つきのパラドックス（「この文は偽である」 DE: „Dieser Satz ist falsch“））を無力化します。タルスキ自身は、この図式を古いアリストテレスの答えの正確な定式化と理解していました。

正当な契機は、言語が厳密に構築されているところ、すなわち論理学と数学においては、真理を厳密に把握できるという点にあります。タルスキ自身が引いた限界は、自分自身について語ることができる自然言語に対しては、彼の定義は利用できないという点です。そして、真理を探求する実践については何も語っていません。彼の定義は述語を定義するのであって、過程を定義するのではないからです。

タルスキの精密さは、ここでは形式に限定された特殊ケースのための道具として役立ちます。それ以外のすべてについては、彼の定義が捨象している実践が必要となります。

デフレ主義：薄い述語と濃密な実践

タルスキ以前に、フランク・ラムジー（1927年）は、「雨が降っているということは真である」 DE: „Es ist wahr, dass es regnet“）は「雨が降っている」と同じことしか言っていないことに気づいていま

した。タルスキの後、クワイン、そして後にポール・ホーウィッチ（『Truth』、1990年）がそれを理論化しました。真理述語は深い性質ではなく、実践的道具であり、とりわけ、文を一つずつ繰り返すことができない場合の一般化（「彼女が言ったことはすべて真である」 DE: „Alles, was sie gesagt hat, ist wahr“））に有用である、という理論です。

正当な契機は、一見したところより大きいものです。デフレ主義は、真理が文に外から貼り付くラベルではないことを示し、それによって遂行的見解に近づきます。ホーウィッチは、自分の学説を、言葉の意味は使用にあるという理論と明確に結びつけました。「真である」という語が主張に何も付け加えないのだとすれば、真理について語りうる実質的なことのすべては、主張するという実践、すなわち吟味し、正当化し、撤回するという実践の中にあります。まさにそこに、遂行的見解の領域があります。

デフレ主義が説明しないのは、この実践です。なぜ私たちは主張を吟味するのでしょうか。なぜ私たちは、ある主張を恥じながら撤回し、他の主張をあらゆる抵抗に抗して擁護するのでしょうか。述語は薄いかもしれませんが、それが使用されるゲームは濃密です。デフレ主義者にとって、それは言葉への問いではなく、実践への問いです。そして、まさにこの問いがここでは問われています。

真理作成者：抵抗が名前を得る

真理作成者理論は、デイヴィッド・アームストロング（『Truth and Truthmakers』、2004年）らによって練り上げられ、逆の方向に問います。世界の中の何が、真なる文を真にするのか、と。テーブルが茶色であることが、「テーブルは茶色である」 DE: „Der Tisch ist braun“）という文を真にします。真理は存在に基づいており、自由に浮遊しているわけではありません。これが、対応の契機の最も率直な形です。真理は恣意的ではなく、何かがそれを支えていなければなりません。

古い対応説と同じ箇所で、それは困難になります。何が「一角獣は存在しない」 DE: „Es gibt keine Einhörner“）を真にし、何が「七は素数である」 DE: „Sieben ist eine Primzahl“）を真にするのでしょうか。アームストロングは否定的文のために特別な総体的事実を想定しましたが、そうした提案が説得力をもつかどうかは、真理作成者理論の内部でも争われています。一つの答えは、「比較ではない比較」についての章から私たちは知っています。真理作成者は経験において抵抗として、つまり私たちの解釈に対立するものとして現れ、私たちは経験の

外に立ってそれを直接検分することは決してできません。数についても存在しないものについても、それが困難の別名以上のものであるかどうかは、それによっては決まらないのです。

真理多元主義：諸領域の分析哲学的近接性

1990年代以降、クリスピン・ライト（『Truth and Objectivity』、1992年）と、後にマイケル・リンチ（『Truth as One and Many』、2009年）が真理多元主義を展開してきました。真理は異なる領域では異なる仕方で機能します。物理学的文は道徳的文とは異なる仕方で真であり、数学的文は美的文とは異なる仕方で真です。それにもかかわらず、私たちはどこでも同じ語を用います。なぜなら、彼らの定立によれば、真理はどこでも同じ役割を果たすからです。

現実の諸領域についての章（第13章）と、これは密接に関わりますが、完全に一致するわけではありません。本書は実際に真理の異なる形態について語りますが、それによって意味しているのは、判断が自らを実証し、吟味されることができる異なる仕方です。「真である」という語が異なる領域で異なる性質を指示するとは本書は述べていません。より本書に近いのは、定立の後半、すなわち唯一の概念という点です。異なる実証と異なる真理との区別が最終的に維持されるのか、それとも解消されるのかが、近接性が開かれたままになっている問いです。

方法論上の隣人：ベイズ較正

最後に、この系列には方法論からの隣人が属します。ベイズ確率計算です。それは、私たちが段階づけられた確実性と較正として展開してきたものを数学的に精密化します。信念は度合いをもち、新しい手がかりはその度合いを理解可能な規則によって変化させます。強い手がかりは強く、弱い手がかりは弱く、という具合です。ベイズ主義者は計算尺を持った探偵です。

正当な契機は次の点にあります。確実性の度合いが数量化できるところでは、この計算は、直観から逃れる思考の誤り、たとえば基本比率の悪名高い無視を明らかにします。本書の本文が吟味の経済、基本比率、情報源の実績として展開しているものは、この計算の日常言語による形態であり、ベイズ主義者はその数学を練り上げます。賭け金、つまり誤りの際に危険にさらされるものは、計算そのものに属するのではなく、それを補完する決定理論に属します。限界は、最初の

確率がどこから来るのかを、この計算は述べないという点です。これらの出発値は判断力によって設定されなければなりません。そして、それとともに較正の技が再び始まりますが、それはいかなる公式も私たちの手から取り去ってはくれません。また、この計算は、自分の前にある手がかりだけを考慮します。除外され、それゆえ計算に入らなかったものは、どんな度合いも動かしません（第10b.1章）。

B11 批判理論：真理と解放

ホルクハイマーとアドルノが見たもの

マックス・ホルクハイマーは1937年、社会における自らの位置を反省しない伝統的理論を、みずからが研究対象とする諸関係の一部であることを自覚し、その変革をめざす批判理論から区別した。テオドール・W・アドルノとともに、彼は『啓蒙の弁証法』（1944年／1947年）において、ただ手段を計算するだけの理性がいかにして支配の道具になりうるかを示した。「誤った生命のうちに正しい生命はない」（独語：「Es gibt kein richtiges Leben im falschen」）とアドルノは『ミニマ・モラリア』（1951年）で書いている。この一文は、生命が誤ったものとして認識可能になるための尺度を前提している。すなわち、偽りの条件のもとでは送ることのできない正しい生命である。真理と解放は互いに属し合っている。

真理の探求が解放する理由

第20章と第22.5節は、別の道を通って同じ地点に達する。誠実に真理を探求する者は、人を操作する代わりに、認識能力をもつ主体として扱う。その者は、秘密の教説ではなく開かれた論証によって仕事をし、訂正可能であり続け、権威を主張する代わりに、自分の主張することを誰もがたどれるようにすることを望む。これらの特質のそれぞれには、鏡像として、その特質が排除する抑圧の一形式が対応している。

無知の上に権力を築く体制は、それゆえ、吟味を妨害しなければならない。なぜなら、吟味が成功するたびに、その権力が何に基づいているかが示されるからである。

何が残り、この本がどこへ進むのか

批判理論とともにこの本は次のことを堅持します。真理は中立的ではなく、もはや手段（Mittel）しか計算しない理性（Vernunft）は、支配に仕えることがありうる、と。解放はここでは、真理が仕えるべき目標としてではなく、確かめること自体の帰結として現れます。『啓蒙の弁証法』があらゆる理性に対して、確かめる理性に対しても向ける疑いは残り続けます。すなわち、理性は支配へと転倒（Verkehrung）しうる、という疑いです。この本はその疑いを真剣に受け止めます。第21章は、真理の名において確かめることがいかに妨げられ、諸原則そのものがいかに転倒されるかを記述し（21.5）、自己適用（Selbstanwendung）によって応えます。それは保証ではありません。

B12 それぞれの立場が見たもの

諸契機とその絶対化

それぞれの立場は、真理の探求の現実の一契機を見てきました。対応説は現実の抵抗を、整合性説は連関を、プラグマティズムは実践的検証そのものを、合意説は共同の点検を、カントは認識そのものが持ち込む形式を、構成主義は認識する者の活動を、言語語用論は遂行を、分析哲学的な精密化は個々の契機の鋭さを、そして批判理論は真理と解放の結びつきを見てきました。

これらの立場のいずれも単なる誤りではありません。しかし、いくつかの立場においては、あるものが退けられています。対応説では思考と事物の並置が、整合性説では程度差を持つ真理が、プラグマティズムと合意説では、実践的検証そのものあるいは合意が真理を作るという考えが、カントでは形式が我々のものにすぎないという結論が、構成主義では現実からはその「否」のほかには何も学べないという結論が退けられています。残るのは、それぞれの立場が見てきた現象であり、崩れるのは、点検の単一の契機が残りのすべての尺度であるという主張です。そうした理論の秩序づけを、ヨハネス・ハインリヒスは（B9a節）本人の言明によれば1975年以来提示してきました。彼はそれらを語ることの諸側面に割り当て、この本はそれを点検の諸契機に割り当てます。「判断は、それが在るものを言い当てるときに真である」という古い答えは、このことによって揺るがされません。その

答えは点検のどの契機を名指すのではなく、すべての契機が目指す当のものを名指すのです。

なぜこれは折衷主義ではないのか

それぞれの理論から一部を取り出し、それらの断片を並べるならば、それは折衷主義でしょう。ここでは、それぞれが同じ問いで測られます。すなわち、真理の探求のどの契機を見たのか、そしてそこから何を結論したのか、という問いです。その契機が残るのは、点検する者はだれでもその契機を遂行するからであり、結論が崩れるのは、その結論がこの遂行において挫折するからです。

なぜこれは調和の探求ではないのか

長い論争が生じたのは、それぞれの立場が他の立場の現実の困難を暴いたからです。対応説の論者たちは正当にも問いました。「自分たちの整合性がただの美しい空想ではないと、どうして知るのか」と（DE: „Woher wisst ihr, dass eure Kohärenz nicht nur schöne Fantasie ist?“）。整合性説の論者たちは正当にも問いました。「この比較のために、自分たちの意識の外へどうやって出ようというのか」と（DE: „Wie wollt ihr aus eurem Bewusstsein heraustreten für diesen Vergleich?“）。

どちらの問いも正当であり、どちらの懸念も取り除くことができます。ただし、それはどちらの側も抹消しないことによってのみです（第11章）。このことが導く一致は、交渉によって得られた結果ではありません。どの理論に対しても、それをなだめるために何かが譲歩されたわけではありません。それぞれは、自分がどの現象を見たのかを問われました――そして、それらの現象は、一つの過程の諸契機であるがゆえに、互いに噛み合うのです。これらの理論のそれぞれが真理を探求するかぎり、その代表者たちは同じ道をたどることによって一致に達することができます。彼らがまだそこに達していないところでは、一つの問いが開かれたまま残ります。それは、事柄そのものに即して決せられるべき問いです。

B13 象の原則の哲学史への適用

並行関係

哲学史は、象の異なる部分を触れる六人の盲目の学者たちの話に似ています。ここで意見を述べてきた思想家たちは——私たちすべてと同様に——限られた接触しか持っていません。各人は自分が見出したものを語り、各人は自分の部分を全体と取り違えがちであり、誰が正しいのかをめぐる論争が生じます。

解決は物語と同じく、二重のものです。全員が正しいのです。各人は、自分が感じ取ったものに関して正しいのです。そして、自分の記述を唯一の正しいものと見なし、他者の記述を排除する限りにおいて、誰も正しくありません。この両者によって、本当の問題が初めて立てられます。すなわち、記述同士はどの点で互いに適合しているのか、という問題です。第5章は、それが何によって決まるのかを示しました——すなわち、全員がそれへと関係づけている象が存在するかどうかによってです——。そして第8章は、適合しないものがどうなるかを示しました。観察は救われ、解釈は退けられ得ます。

象

物語と同じように、ここにも象がいます。そしてすべてはその象にかかっています。それこそが、真理の探求の構造です。この構造を、これらの理論のどれかを検証する人は誰でも、望むと望まざるとにかかわらず遂行しています。

この構造は、検証するすべての人の中に、いつの時代にも敷かれています。それに対して、それを明示的に養うことは、苦労して獲得されるものであり、失われうるものです（第5章）。

自らの方法の検証

これによって、遂行的理論は自らの方法を自らに適用します。それは異なる視点を統合することを要求し、そして哲学史の諸視点を統合します。それが成功したかどうかは、この付録に基づいて検証できます。すなわち、それぞれの立場が、その代表者たちがそれと認めるであろう形でここに示されているかどうか、そして退けられるものが、彼らが受け入れざるを得ないであろう根拠に基づいて退けられているかどうか、によってです。

B14 実践的帰結：論争から協力へ

哲学史の理解のために

このように読むと、古典は共通の課題における共同作業者となり、学派間の論争は分業になります。時代遅れとみなされる立場でさえ、その立場が見てきたものを保ち続けています。そうした立場のうち時代遅れな部分は、そうすることでより正確に言い表すことができます。

現在の議論のために

「どの真理論が正しいのか」と問う代わりに（DE: „Welche Wahrheitstheorie ist richtig?“）、こう問うことができます。「この立場は真理のどの側面を正当に強調しており、そこから、成り立たないものを何と結論しているのか」（DE: „Welchen Aspekt der Wahrheit betont diese Position zu Recht, und was schließt sie daraus, das nicht trägt?“）と。

こうすることで議論はより実り豊かになります。相手を論駁する前に、その人が何を見てきたのかを問います。その上で論駁されるのは、残っているものであり、しかもより正確に論駁されます。

哲学的陣営戦争に反対して

政治の領域と同様に、哲学においても陣営思考があります。「分析哲学」対「大陸哲学」、「実在論者」対「反実在論者」、「自然主義者」対「解釈学者」――まるで一方の側を選ばなければならないかのように。これらの対立のうちには、詳しく見ると同じ事柄の異なる側面であることが分かるものもあります。また別のものは、事柄そのものに即して決着をつけなければならない本物の論争問題です。目の前にあるのがどちらの場合なのかは、そうしたラベルによってではなく、確かめることによってのみ示されます。

B15 生きた資源としての伝統

この概観が果たすこと

遂行的真理理論は、論争の上に立つ審判者として現れるのではなく、他のどの立場とも同じように、ここで自らが確かめられることを受け

入れなければなりません。この理論を特徴づけるのは、その出発点です。それは、あらゆる理論が互いを論駁し合うときに、それぞれが自ら行っていると主張する、その遂行から始まります。それゆえ、この理論は、それぞれの理論を、その理論が見てきたもの、そしてその理論が説明しないものに照らして測ることができます。収支が合わないところでは、問いは開かれたままです——そのいくつかは上で名指しされています。

生きた伝統

伝統は博物館ではありません。各世代は古い問いを新たに考え抜かなければなりませんが、ゼロから出発する必要はありません。伝統は、確かめられた部分的な答えを、それらが確かめられてきた根拠や、それらが失敗した箇所とともに差し出してくれます。このように読む者は、伝統を権威としても、誤りの一覧表としても受け取らず、共に確かめる者たちとして受け取ります。

課題

もし、真理をめぐる二千年半にわたる論争が無駄な努力ではなく、同じ事柄の異なる諸契機の探究であったと示せるなら、そのことは、陣営に分裂する対話の文化への貢献でもあります。その貢献は、呼びかけなしに、他者のうちにまず、その人が見てきたものを探し、そのうえでより正確に反論することにあります。

いくつかの異論は、特定の真理理論に対してというよりも、体系的に秩序づけること自体に向けられています。すなわち、アドルノの非同一的なものという異論、ドゥルーズ、デリダ、フーコーの異論、そして自然の鏡としての認識へのローティの訣別がそれです。したがって、それらはここでは扱われません。思考 – 失わずに秩序づける (2025)は、その付録において、それらをそれぞれの形で提示しています。

さらに読み進めるには：思考 – 失わずに秩序づける, 付録 B2

付録c：真理の探求とヘーゲルの論理学——相互的な解明

C.1 なぜこの付録なのか

本文は、哲学者に依拠することなく、自らの思考を遂行します。哲学者の名前が挙がる場合、その名前は後から添えられるにすぎません。それは、同じ思考をすでに掴んでいるのが誰であるかを示す手がかりであり、議論には何も貢献しません。このことは方法上必要でした。吟味する際にあなたがすでに行っていることを示そうとする本は、信じなければならない誰かに依拠することはできないからです。

しかし、振り返ってみると、本文とヘーゲルの『大論理学』は互いを照らし出します。ここでヘーゲルが何かを正当化するわけではありません。この比較が示すのは、一方は体系的・思弁的、他方は遂行的・実践的という、非常に異なる二つの道が、どこで似た構造へと行き着くのか、どこでこのテクストがヘーゲルから受け継いでいるのか、どこで両者が分岐するのか、ということです。

C.2 三つの段階：存在—本質—概念

ヘーゲルの論理学は、存在論、本質論、概念論という三つの部分からなる。本文の歩みは、おおよそこの順序に沿って読むことができる。各章を逐一対応させることはできない。というのも、本書はそれ自身の秩序に従うからである。しかし、直接性から媒介を経て自己規定へと至る運動は、そのうちに再び見出される。

存在論：直接的な経験

ヘーゲルにおいて存在とは、直接的なもの、端的にあり、まず私たちに出会うものであり、質、量、尺度である。その諸性質をもつ物は、ようやく本質論に属する。本文もまた、何か直接的なものから始ま

る。すなわち、読みながらすでに進行している吟味（第1章）と、背後へ遡ることのできない前提（第2章）からである。いずれの場合にも、一見自明なものは、見かけよりも錯綜していることが明らかになる。

このことは、論理学の始まりにおける古くからの困難を照らし出す。ヘーゲルが純粋存在から始めることは、しばしば、思考と存在の統一を彼が前提しているかのように読まれる。そしてその統一へは、特別な通路——「知的直観」——が必要であるとされる。ヘーゲル自身はこの読み方を退けている。すなわち、知的直観は、第一のものとされるならば、その純粋な直接性において存在以外の何ものでもないであろう（『エンツュクロペディー』 第86節、注釈）。論理学が始まる立場は、彼がまず『精神現象学』 において獲得したものであり、『エンツュクロペディー』 では予備概念がそこへ導く。始まりそのものは、彼によれば、「純粋に思考することを意欲する決断」 (DE: 「Entschluß, rein denken zu wollen」）（第78節、注釈）によってなされるが、しかしこの決断は第17節によれば、始める者にのみ関わり、学そのものには関わらない（ヘーゲルの論理学 – 思考の論理 (2026), 章14）。本書の側からは、これを控えめに言い表すことができる。始まりに立つのは、直観された第一のものではなく、背後へ遡ることのできない吟味の遂行であり、人はつねにすでに真偽の区別に関わっている。「思考と存在の同一性」 (DE: 「Identität von Denken und Sein」）は、その場合、前提された統一ではない。それは、内的なものと外的なものの分離が、それ自身経験の内部での区別（第11章）であり、その区別は抵抗において初めて客観性へと分化する、ということを意味する。こう読むなら、始まりは絶対者の直観を必要とせず、自己に対して透明になる遂行だけを必要とする。

本質論：反省の諸構造

ヘーゲルにおいて本質とは、媒介されたもの、「自らのうちに映るもの」であり、同一性と差異、根拠と帰結、内的なものと外的なもの、可能性と現実性である。これらの規定のいずれも、それ自体だけで何かであるのではなく、それぞれが他者との関係を通してのみ、みずからがみずからである。本文では、諸章の大部分が、それ自身の秩序においてこれに対応する。第3章は知覚の見かけ上の直接性からその媒介へと導き、第5章は同じものに対する異なる視点を展開し、第7章は認識の推進力としての矛盾を扱い、第8章はすべてが互いに適合し合わなければならないという要求を扱い、そして第11章では整合性と一

致が一つになる。両方のテキストに共通しているのは、いかなる規定もそれだけで成立するものとしては残さないことである。

近さが最も明らかになるのは、一致という問題においてである。「内的なもの」と「外的なもの」、「思考」と「存在」は、第11章では、その間にまず橋を架けなければならないような、できあがった対立項ではない。「思考から現実へどうやって至るのか」（DE:「Wie kommen wir aus dem Denken zur Wirklichkeit?」）という問いは、両者を分離したものとして前提する場合にのみ生じる。しかし、この区別は経験の内部で、願望に屈しないもののところで獲得される。その際に作り出されるのは世界ではなく、何が私たちに属し、何がおのれ自身の法則に従うのかについての私たちの知識である。ヘーゲルは、内的なものと外的なものの統一を次の文で捉えている。「内的なものはまた外的に現存し、逆もまた同様である」（DE:「Was innerlich ist, ist auch äußerlich vorhanden und umgekehrt」）『エンツュクロペディー』第139節）。本文では、これに対応するのは、物は視点の背後にあるのではなく、その視点のうちで自らを示し、真理はそれらの統合のうちにある（第5章、第11章）ということである。

概念論：自己規定

ヘーゲルにおいて概念とは、自己を規定し、自らの他者のうちでも自己自身のもとにとどまるものであり、概念論は主観性と客観性を経て理念へと至る。これに最も近づくのは、吟味が自分自身を手に取る諸章である。方法となった吟味としての学（第19章）、自らの判断力としての較正（第10章）、そして諸原則のこのテキスト自身への適用（第24章）である。両方のテキストにおいて、道は単なる反応から、媒介された関係を経て、自己規定へと至る。

概念論は理念で終わり、ヘーゲルにおいて理念は「真理」である。すなわち、概念とその客観性との統一である（『エンツュクロペディー』第213節）。真理はそこで、より深い意味で、物がその概念に適合していることを意味する。あたかも、そのふるまいが友情の概念に適っている真の友について語るように（第24節、補遺2）。本文は同じ像を用い（第13.3章、第23.5a章）、吟味からの転回によってこの意味を獲得する。ひとたび秩序が見出されると、物そのものもまた、その概念に照らして測られるのである。ヘーゲルは物から出発し、これをより深いものと呼ぶ。判断の真理と通常呼ばれるもの、すなわち判断と物との一致を、彼は正しさと呼び、「われわれの表象とその内容との形式的な一致」（DE:「formelle Übereinstimmung unserer Vorstellung

mit ihrem Inhalt」）（第172節、補遺）と呼ぶ。これは矛盾ではない。というのも、両方の意味は互いに結びついているからである。「ハムレットは偉大なドラマである」（DE:「Hamlet ist ein großes Drama」）という判断が真であるのは、この劇がドラマであるべきものになっている場合である。このより深い意味が、真理は全体である（C.4）という文の背後にある。ちなみに、ヘーゲルの客観性は経験の素材ではなく、対象という姿をとった概念であり、それは機構、化学的過程、目的の関係においてである。対象がそれと対峙するのは、もっぱら目的の関係においてである。秩序が、それが秩序づけるものに対して自らを実証しなければならないということは、彼にあってはここに位置をもつ。

C.3 主要な主題の詳細

映現と反省

有論では、ヘーゲルによれば、諸規定は互いに「移行」します。一方が到来すると他方は消え去ります。本質論では、諸規定は互いに「映現」します。それぞれはとどまり、自分の他者のなかに自らを示します。この一例は第11章が示しています。そこでは整合説と対応説は互いを置き換えません。自分で見て確かめることが示すものは、それが属する文脈においてのみ妥当し、その文脈は自分で見て確かめることによって点検されます。二つのそれぞれが他方のなかに自らを示し、どちらもそのなかで消え去りません。

現象と現実性

ヘーゲルはこの関係を三つの段階で展開します。まず本質は現象の背後に隠れているように見えます。次に次のことが示されます。「本質は現象しなければならない」（DE: „Das Wesen muß erscheinen“『エンツュクロペディー』§131）——現象しない本質は本質ではありません。最後に、「単なる現象よりも高次のもの」（DE: „das Höhere als die bloße Erscheinung“）が現実性です（§131、補遺）。それは本質と実存、内的なものと外的なものとの統一です（§142）。

本文は同様の道をたどります。最初は、パースペクティブ的な現象の背後に「実際の真理」を求めます。次に、原理的に自らを示すことができないような真理は探求されえないことが示されます。探求が見

出そうとするものは、自らを示すことができるものでなければなりません。そして真理の諸形態は、自らを示すものの開示において成立します。したがって、原子、遺伝子、場は、現象の背後にある背後世界ではありません。それらは、現象のなかに自らを示すものであり、測定、介入、成功または失敗する予測のなかで自らを示すものです。それらが現象の領域の秩序以上のものであるかどうかは、事前の決定ではなく、調査が決めます（第11章3c、第18章1）。

根拠の三形式

本質論の根拠に関する節で、ヘーゲルは三つの段階を区別します。形式的根拠は、事柄を別の名前で反復します。根拠と根拠づけられたものは同じ内容を持ちます。実在的根拠は、別のものを名指しますが、多くの規定のなかから一つを取り出すだけで、まさにこの一つである理由を述べません。完全な根拠は両方を同時に含みます。すなわち、別のものを名指すとともに、まさにこれが根拠であるところの関係をも含みます。したがって諸段階は、空虚なものから不完全なものを経て、充実した根拠づけへと成長します。事柄そのものが現れるのは、その後の条件論においてです。「或る事柄のすべての条件が揃うとき、その事柄は実存へ入る」（DE: „Wenn alle Bedingungen einer Sache vorhanden sind, so tritt sie in die Existenz.“）

本文からの例を挙げると次のようになります。「手段は、それが有効であるから作用する」（DE: „Das Mittel wirkt, weil es wirksam ist“）は形式的根拠です。「これは真である、なぜならこの証拠がそれに賛成しているからである」（DE: „Das ist wahr, weil dieser Beleg dafür spricht“）は実在的根拠ですが、不完全です。「これらの所見は、互いに独立した経路で得られ、組み合わさり、どれ一つとして余りません」（DE: „Diese Befunde, auf unabhängigen Wegen gewonnen, fügen sich, und keiner ist übrig“）は完全な根拠です。権威からの論拠——「専門家がそう言うから」（DE: „weil Experten es sagen“）——は、この梯子の上には属しません。それは何かを信じるための根拠であり、しばしば良い根拠ですが、事柄そのものの根拠ではありません（第10章a.3）。研究分野全体の状況をまとめる報告は、完全な根拠づけの試みであり、それ自体が点検可能かつ改善可能であり続けます。

ミュンヒハウゼンのトリレンマの解決も、この層構造に関わっています。「文が文を支える」という連鎖は、実在的根拠を超え出ません。それぞれの環は別のものを名指しますが、まさにこの環が支える理由を述べるものはありません。第1章がその代わりに置くものは、

文の連鎖でも文の循環でもなく、それ自体を遂行せずには異論を唱えることができず、そこから生じる構造に照らして自らを実証する遂行です。それを表す像はアーチ門です。アーチ門は、条件の共属だけが支えるという点を、ヘーゲルの条件論と共有しています。ヘーゲルの論理学 – 思考の論理 (2026) の冒頭の思考運動は、ヘーゲルの言葉を用いずに同じ層構造を遂行し、互いを支え合う条件のために同じ像を用いています（ヘーゲルの論理学 – 思考の論理, 章 7）。そこでも同様に、アーチはそれ自体が支えていない橋脚の上に立つという限界が記されています。

止揚

この語は三つの意味を持っています。ヘーゲル自身、「二重の意味」、すなわち保存することとやめさせることを強調しています（『大論理学』、止揚についての注）。高めることは、その両方のうちに考えられています。前の段階で真であるものは保存され、一面的で限られたものは克服されます。残るものは、より展開した形態へ入ります。

本文はこれを第7章で方法として展開し、第14章で感情と悟性の葛藤に適用し、第11章7と第19章で科学革命において示しています。「偽の理論」もこのように止揚されます。フロギストンの場合、燃焼の観察が保存され、説明の誤った方向性が克服され、両方が酸化理論においてより高く高められます。周転円の場合、観測された軌道への良好な近似が保存され、軌道を円から合成することが克服され、両方がケプラーの楕円軌道においてより高く高められます。

C.4 方法論的収束

遂行的自己適用

ヘーゲルの論理学は、自らの諸原理を自らに適用します。それは思考についての理論であるだけでなく、自らが教えることを実践しています。本文も、それ自身の仕方でこれを行っています。つまり、真理の探求は、それについて考えられている間に遂行され、第24章では、本文が自らを自らの基準に照らして吟味します。本文の遂行的な始まり（第1章）には、フィヒテにも先駆者がいます。フィヒテは『知識学への第一序論』（1797年）において、一文ではなく読者への呼びかけ

で始めます。「君自身に注意を向けよ」（DE: „Merke auf dich selbst“）。この始まりには、アーペルが練り上げた遂行的自己矛盾という思想がさらに近くにあります（付録B、コンセンサス真理論）。

定義ではなく発展

ヘーゲルは自らの諸概念をあらかじめ定義せず、それらを発展させます。ある概念が何であるかは、その展開のうちに自らを示します。本文もまた「真理とは……である」という仕方では始まりません。それは、あなたが真理を探求するときにすでに行っていることから出発し、したがって実践から概念へと進みます。

体系的完全性

ヘーゲルにおいては、あらゆるカテゴリーが先行するカテゴリーから必然的に発展すべきであり、それによって何も恣意的に措定されないようになっています。本文はこの要求を同じ厳密さでは掲げません。本文は各段階を先行する段階に基礎づけようとし（第17.2章）、それが成功しない箇所を未決のまま残します（第11.6章）。

「真理は全体である」

第8.7章、第15.10章、第16.4章が出典なしで用いている文は、『精神現象学』（1807年）の序文にあり、そこで次のように続きます。「*Das Wahre ist das Ganze. Das Ganze aber ist nur das durch seine Entwicklung sich vollendende Wesen. Es ist von dem Absoluten zu sagen, daß es wesentlich Resultat, daß es erst am Ende das ist, was es in Wahrheit ist; und hierin eben besteht seine Natur, Wirkliches, Subjekt oder Sichselbstwerden zu sein.*」（「真理は全体である。しかし全体とは、自らの発展を通じて自己を完成させる本質にほかならない。絶対者については、それが本質的に結果であり、終わりにおいて初めて、それが真理においてあるところのものであると言わねばならない。そしてまさにこのことに、現実的なもの、主体、すなわち自己自身になることであるという、その自然が存する。」）したがってヘーゲル自身、全体を総和としてではなく発展として読んでおり、この点で第16.4章と一致します。彼の論理学では、それゆえ、後続の各規定は先行する規定の真理と呼ばれます。それは、先行する規定によって意味されていたことをより適切に表現す

るからです。先行する諸規定は、ただ「それらの孤立において自らのために固定されている」（DE: „in ihrer Isolierung für sich festgehalten“）（『エンチクロペディー』第83節、補遺）場合にのみ、真理ではありません。後続の諸規定の契機としては、それらは残り続けます。第16.4章がこのことを捉える定式、すなわち真理は生き生きとした論理的に秩序づけられた発展する全体であるという定式は、ヘーゲルのものではなく、この書独自の一つの定式化です。本文もまた全体を運動として捉えます。そこでは認識と、しばしば認識されるものも発展します。そして、そのうちのそのつどの時点で到達されているものを、認識された真理と呼びます（第23.5a章）。ヘーゲルにおいては、全体は、結果として初めて、真理においてそれであるところのものである、そのような事柄です。この点で両者は一致します。すなわち、真理は固定された蓄えとしてではなく、それがそれ自身であるところのものへと生成してゆく過程として捉えられるべきです。

悪無限と真無限

第23.5章が果てしない反復という反論に答えるために用いる二つの図像は、ヘーゲルの存在の論理学に由来する名称を持っています。悪無限とは、常にもう一つ先へというあり方です。有限なものが超え出られ、その超え出ることが繰り返され、無限なものは決して到達されることのない彼岸にとどまります。真無限、すなわち本来的な無限は、何かが他なるものへと移行する際に、ただ自己自身とともにあるという運動です（『エンチクロペディー』第95節）。それは、終りなく走り続けるのではありません。ヘーゲルが前者に対して用いる図像は直線であり、後者に対しては自己内へ折り返した円です。第23.5章は、このうちから真理の探求に必要なものを受け取ります。つまり、到達された各洞察は、半分ではなく全体であり、それでも最後のものではない、ということです。ヘーゲルにおいてこの概念は諸カテゴリーの発展のうちにあり、ここではそこから図像と区別だけが引き継がれています。そこでは、真無限は、その限界を見出すことになるような自己の外のものを何も持ちません（ヘーゲルの論理学 – 思考の論理 (2026), 章 2）。これに対して、第23.5章が真理過程と呼ぶものは、外部からそれに抵抗するものに対して開かれたままです。ヘーゲルの概念と共有しているのは、各段階が全体であるということであり、何も未解決のまま残らないということではありません。

C.5 テクストが異なる仕方で進む箇所

ヘーゲル：体系的・思弁的

ヘーゲルは、最も抽象的な思考である純粋存在から始まり、内在的批判を通じて展開し、完全性への百科全書的な要求を掲げます。その言葉は、術語的で、要求が高く、凝縮されています。

このテクスト：遂行的・実践的

このテクストは、直接的な経験から始まり（「あなたは今まさに吟味しています」）、その遂行を意識化することによって展開し、実践的関連性へと焦点を向けます。その言葉は日常言語への近さを求めています。

ヘーゲルが示そうとするのは諸構造の体系的必然性であり、このテクストが示そうとするのはその実践です。

C.6 我々がヘーゲルから学べること（ヘーゲル主義者にならずに）

ヘーゲル主義者にならずにヘーゲルから取り出せるもの、それは方法である。矛盾は真剣に受け取られるべきである。すなわち、誤りとして退けるのではなく、発展を駆動するものとして受け取られるべきである。実際に矛盾が生じるところこそ、しばしば先へ進む地点である。これには忍耐が求められる。というのも、洞察は素早い定義によってではなく、各段階がそれぞれの権利をもつ発展によって生じるからである。方法は、自らの立場に特別な地位を与えることなく、自己自身に適用可能でなければならない。それゆえ、先行する諸立場からは、正当な契機が止揚される。そしてこの背後には、いかなるものも孤立して存在しないという洞察がある。あるものが何であるかは、他のものとの関係によって規定されるのであり、これらの媒介を明らかにすることが仕事である。

C.7 ヘーゲルがこのテキストから学べること

ヘーゲルがこのテキストから学べることは、何よりもその形式にかかわる。理解可能な言葉で言い表せる思考は、考える人なら誰でも著者とともに検証することができ、そうなれば真理はもはや秘儀参入者だけの事柄ではなくなる。また、理解が生に何をもたらすかという問いもあり、それは体系的完結性と並んで固有の権利を持つ。そしてヘーゲルは、全体を発展として考えた。彼によれば、理念は「本質的に過程」である（独:「wesentlich Prozeß」）（『エンツュクロペディー』§ 215）。同時に彼の体系は、この発展を完全に提示するという主張を立てている。それがどの程度まで完結性の主張になるのかは、彼の読者の間でも争われている。主テキストは、到達されたあらゆる秩序が抵抗を通じて訂正可能であり続けることを明示しており（第23.5a章）、その秩序がそこから生まれてきた検証の数々を示している。

C.8 結論：相互照明

二つの道が似た構造に至るということは、その類似がどこから来るのかを区別しないかぎり、ほとんど何も語らない。その一部は引き継がれたものである。それは、「真理は全体である」という命題、悪無限と真無限の区別、止揚という語、正当化の諸段階である。これらの一致は何も確証しない。なぜなら、第10a.3章の基準からすれば、他から写し取る声は第二の声ではないからである。本文が自らを吟味することから得るものは事情が異なる。すなわち、内と外の分離が経験のうちで引かれること、原理的に自らを示すことのできない真理は探求されえないこと、始まりに立つのは直観された第一のものではなく遂行であること、これらである。これらの思考がヘーゲルの構造と出会うところでは、そのことは、両者が同じ事象そのものに取り組んでいるという示唆である。それは証明ではない。というのも、ヘーゲル抜きで始まると考える思考のうちに、ヘーゲルによって形成された伝統がどれほど入り込んでいるかを、誰も正確には言えないからである。それでも、両者の道は吟味可能な点で分岐する。たとえば、本文は到達されたあらゆる秩序を訂正可能であると明示的に宣言するのに対し、ヘーゲルの体系は展開を完全に提示すると主張する（C.7）。このことは、一方の道が他方をたんにたどり直しているにすぎないということに反する。

『大論理学』と真理探求の実践は、したがって、同じ事象そのものへの二つの接近法であり、互いに補い合い、個々の点で互いに訂正し合う。ヘーゲルを読んだ者は、ここに、そこで抽象的に展開されている諸構造の実践的適用を見いだす。このテクストしか知らない者は、ヘーゲルのうちに、ここで遂行的に遂行されているものの体系的実行を見いだすことができる。それが相互照明であり、循環による証明ではない。

さらに読み進めるには：ヘーゲルの論理学 – 思考の論理 (2026)、とりわけその始まりにおける思考の運動（ヘーゲルの論理学 – 思考の論理, 章 1.

付録d 根拠

第19章から第22章、および第10章は、思考が現実のものの中で目に見えるようになるために、事例を挙げています。事例は思考を証明するものではありません。しかし、事例は正確でなければなりません。その出典をここに示します。末尾には、付録Bのピュロン主義的懐疑論、カント、ハインリヒスに関する各節の根拠が続きます。

第19章について

原子。異なる経路によって同じ粒子数へと至った諸測定は、ジャン・ペランによってまとめられ、一部は彼自身によって実施された：*Les Atomes*、パリ：Alcan 1913年。懐疑的だった人々の中には、物理学者エルンスト・マッハと化学者ヴィルヘルム・オストヴァルトがいた。

新しい科学的真理に関する引用：マックス・プランク、*Wissenschaftliche Selbstbiographie*、ライプツィヒ 1948年、22頁。

大陸移動。アルフレート・ヴェーゲナーは1912年にその説を提示した。それが受け入れられたのは1960年代のことであり、駆動力を説明したプレートテクトニクスとともに受け入れられた。

第21章について

アメリカ大陸への移住。南チリの遺跡モンテ・ベルデ：Tom D. Dillehay, *Monte Verde. A Late Pleistocene Settlement in Chile*, 2巻、Washington 1989年および1997年。1997年の共同現地調査とその結果：David J. Meltzer ほか、「On the Pleistocene Antiquity of Monte Verde, Southern Chile」, *American Antiquity* 62 (1997), 659–663頁。

恐竜の絶滅。論争の調子について：Malcolm W. Browne, 「The Debate Over Dinosaur Extinctions Takes an Unusually Rancorous Turn」, *The New York Times*, 1988年1月19日; Bianca Bosker, 「The Nastiest Feud in Science」, *The Atlantic*, 2018年9月。現在の状況について：Peter Schulte ほ

か, 「The Chicxulub Asteroid Impact and Mass Extinction at the Cretaceous-Paleogene Boundary」, *Science* 327 (2010), 1214–1218頁; Pincelli M. Hull ほか, 「On Impact and Volcanism across the Cretaceous-Paleogene Boundary」, *Science* 367 (2020), 266–272頁。衝突と絶滅の同時性について（32,000年以内）： Paul R. Renne ほか, 「Time Scales of Critical Events Around the Cretaceous-Paleogene Boundary」, *Science* 339 (2013), 684–687頁, doi:10.1126/science.1230492; 執筆者たちは、衝突がすでに圧力を受けていた生態系を襲った可能性を認めている。火山活動に関するモデル計算： Alexander A. Cox, C. Brenhin Keller, 「A Bayesian Inversion for Emissions and Export Productivity across the End-Cretaceous Boundary」, *Science* 381 (2023), Nr. 6665, 1446–1451頁, doi:10.1126/science.adh3875。

Bosker (2018) による職業上の帰結について。地質学者Dewey McLeanは、衝突説の主唱者が大学当局での自分の昇進を妨害したと非難し、当人はそれを否定した。地球物理学者Charles Officerは、*Science* が12年間にわたり衝突説に45本の寄稿を掲載し、他の仮説にはわずか4本しか掲載しなかったと苦情を述べ、編集部はそれをえこひいきとして退けた。McLeanは後に結局昇進し、Officerは1994年に絶滅研究から身を引いた。その際、双方はプランクの言葉を引き合いに出した。すなわち、新しい考えは、その反対者が死に絶えるときに受け入れられるという言葉である（Courtillotは火山説、Smitは衝突説について；第19.2章参照）。Schulteほか (2010) の寄稿には41人の執筆者が署名したが、数十人の専門家が *Science* への投書で異議を唱えた。Bosker: 「Science is not done by vote.」。この記事はアーカイブ版の文言に照らして確認されている。

作られた反論。 2020年10月4日の公開の声明は、*Great Barrington Declaration* として知られている。アメリカ国立衛生研究所所長による2020年10月8日の内部メッセージ（「three fringe epidemiologists」、「a quick and devastating published take down of its premises」）は、情報公開請求を受けて2021年12月に公開された。

作られた疑い。 タバコ産業については第22章の証拠を参照。気候については： Naomi Oreskes, Erik M. Conway, *Merchants of Doubt*, New York 2010。気候がさらなる温室効果ガスにどのように反応し、どのような不確実性を伴うかは、気候変動に関する政府間パネルが各評価報告書で幅として示している。

イラク。 *The Report of the Iraq Inquiry*, London 2016, Executive Summary（John Chilcotを委員長とする調査報告書）。

東ドイツにおける報道操縦。 指示はSED中央委員会の扇動部から出された。書籍には文化省の出版社・書籍販売総局の印刷許可が必要だった。

認知的戦争。中国の教義については：2003年に改訂された中国人民解放軍の政治工作規定で「三つの戦争」（世論戦、心理戦、法律戦）を掲げている。その説明はStefan Halper (編), *China: The Three Warfares*、米国防総省ネット・アセスメント局のための研究、2013年。ロシアの教義については：2016年12月5日のロシア連邦情報安全保障ドクトリン。

西洋の概念については：François du Cluzel, *Cognitive Warfare*, NATO Innovation Hub, Norfolk, 2021年1月（2020年6月–11月の研究、Allied Command Transformationの助成による。自らの表明によればACTまたは加盟国の立場を反映していない）；「The Human Domain of Operations refers to the whole human environment, whether friend of foe」（29頁；「of」は原文のまま）；「Any user of modern information technologies is a potential target」（6頁）；Bernard Claverie ほか (編), *Cognitive Warfare: The Future of Cognitive Dominance*、認知的戦争に関する最初の科学NATO会議の論文集（ボルドー、2021年6月）、NATO Collaboration Support Office 2022、その中のEric Autellet, 「Cognitive Warfare - Contribution of the French Armed Forces Deputy Chief of Defence」、第1章、1-1頁以下、敵の頭脳への侵入について、そして自らの防護については1-2頁（フランス語初版：*Cognitive Warfare: La guerre cognitique*, NATO-CSO, 2021年10月、第3章）。パンデミックに関する寄稿：Dale F. Reding, Bryan Wells, 「Cognitive Warfare: NATO, COVID-19 and the Impact of Emerging and Disruptive Technologies」、所収：Ritu Gill, Rebecca Goolsby (編), *COVID-19 Disinformation: A Multi-National, Whole of Society Perspective*, Cham: Springer 2022, 25–46頁、特に26頁と43頁（頁数はTögel, *Kognitive Kriegsführung*, 第I章による）。

これらのテクストの集成と批判的解釈：Jonas Tögel, *Kognitive Kriegsführung. Neueste Manipulationstechniken als Waffengattung der NATO*, Berlin: Westend 2023, ISBN 978-3-86489-422-0, 第I章（「2022年のCOVID-19とCognitive Warfareに関する一出版物」の節）および第VI章（「Cognitive Warfareの照準には誰がいるのか」の節）。この概念が計画的に自国の住民にも向けられているという読みは、Tögelの解釈である。

強靭性。同盟諸国の義務：*Strengthened Resilience Commitment*、ブリュッセルでのNATO首脳会議、2021年6月14日、第4–7項（「Resilience is a national responsibility and a collective commitment」、第4項；「The COVID-19 pandemic has severely tested our nations and our resilience」、第6項；「hostile information activities, including disinformation」、第7項）。

オランダ。*NRC Handelsblad*、2020年11月15日付の陸軍Land Information Manoeuvre Centreに関する報道；国防大臣から第二院への2020年11月29日付書簡（暫定的停止、省のデータ保護担当官による審査）。

ドイツ。連邦首相府に設置されたコロナ・パンデミック対処のための連邦政府危機管理班を、2021年12月からカールステン・ブロイアー少将が率いた。

プラットフォーム。パンデミックにおける外国の虚偽報道について：欧州対外行動庁, *EEAS Special Report: Short Assessment of Narratives and Disinformation around the COVID-19 Pandemic*, 2020年4月、およびその後の報告書。ウイルスが「man-made or manufactured」であるとする投稿を削除する規則は、Facebookが2021年2月8日に導入し、2021年5月26日に「in light of ongoing investigations into the origin of COVID-19」として撤回した。関連の裁判記録：*Missouri v. Biden*、ルイジアナ州西部地区連邦地方裁判所、2023年7月4日の命令；最高裁判所は2024年、訴訟上の理由でこの訴えを退けた（*Murthy v. Missouri*）。Twitterの内部文書は2022年12月から「Twitter Files」として公開された。Metaの最高経営責任者から米国下院司法委員会への書簡は2024年8月26日付である。

内務省のペーパー。「Wie wir COVID-19 unter Kontrolle bekommen」、連邦内務省、2020年3月、「VS - Nur für den Dienstgebrauch」に分類、第4a節「Worst case verdeutlichen!」（13頁）。2020年4月8日に連邦議会内務委員会へ送付され、後に情報自由法に基づく請求により公開された（FragDenStaat）。連邦政府の回答（連邦議会、hib 441/2021）によれば、同省の示唆を受けてさまざまな専門分野の科学者たちが、プロボノで自らの責任において執筆した。このサークルとペーパーの成立過程を、その一員であるHeinz Budeが記述している。Heinz Bude, 「Aus dem Maschinenraum der Beratung in Zeiten der Pandemie」, *Soziologie* 51 (2022), Heft 3, 245–255頁： 国務長官Markus Kerberと Hanna Katharina Müller（「政治秩序とハイブリッド脅威」 (DE: „Politische Ordnungen und hybride Bedrohungen“) 課長）によるサークルの創設（246頁以下）；「修辞的定式の刻印」 (DE: „Prägung rhetorischer Formeln“)（247頁）；知っていたことと知らなかったこと（247頁以下）；ベルガモ、「強い正当化」、グラムシ、「Flatten the Curve」と「Hammer and Dance」（249頁）；電話会議、参加者、議事録なし、RKIによる書類とメール通信の公開（注3）、予測ではなくシナリオ（250頁）；何もしない最悪の場合の死者100万人、10日間の助言、2020年3月末にコロナ内閣への引き渡し（251頁）。後の「服従の用意」についての発言：パ

ネル討論「Gesellschaft im Ausnahmezustand - Was lernen wir aus der Coronakrise?」、Heinz Bude、Alexander Bogner、Klaus Kraemer、グラーツ大学、2024年1月24日、YouTubeでの録画（2024年2月27日アップロード、https://www.youtube.com/watch?v=5j5WHi67-go）；とりわけ *Apollo News*, 2024年3月21日が報じた。

英国の諮問委員会。SPI-B, *Options for increasing adherence to social distancing measures*, 2020年3月22日（「The perceived level of personal threat needs to be increased among those who are complacent, using hard-hitting emotional messaging」）。

欧州連合。デジタルサービス法（規則(EU) 2022/2065）、第22条（信頼できる通報者）。

第22章について

タバコ産業の文書：ブラウン・アンド・ウィリアムソン、『喫煙と健康に関する提案』（Smoking and Health Proposal）、1969年（「疑念こそが我々の製品である。なぜなら、それは一般大衆の心の中に存在する『事実の総体』と競争するための最善の手段だからである」）

第10章について

アメリカ合衆国の地域文化。コリン・ウッダード、*American Nations. A History of the Eleven Rival Regional Cultures of North America*、ニューヨーク、2011年。より古い地域区分でも同程度の数に達している。

保育器の証言。米国議会人権コーカス（Congressional Human Rights Caucus）の前での公聴会は1990年10月10日に開かれた。証人がクウェート大使の娘であり、市民団体「Citizens for a Free Kuwait」から委託されていたエージェンシー、ヒル・アンド・ノウルトンがその出演を準備していたことは、ジョン・R・マッカーサーによって明らかにされた：「Remember Nayirah, Witness for Kuwait?」、*The New York Times*、1992年1月6日。詳細は同著者、*Second Front. Censorship and Propaganda in the Gulf War*、ニューヨーク、1992年。

IPCC。証拠と一致度に関する段階的な表明：マイケル・D・マストランドレアほか、*Guidance Note for Lead Authors of the IPCC Fifth Assessment Report on Consistent Treatment of Uncertainties*、IPCC、2010年。

付録Bについて：ピュロン的懐疑

セクストス・エンペイリコスは、*Grundriss der pyrrhonischen Skepsis*（ギリシア語 *Pyrrhoneioi hypotyposeis*）の巻と節に従って引用される。ドイツ語訳はMalte Hossenfelder、フランクフルト・アム・マイン1968年。

懐疑、同等の強さ、判断保留、平静。探求を続ける探究者としての懐疑論者：I 3および7。現れるものと思い浮かべられたものを相互に対置する能力としての懐疑の規定：I 8。同等の強さ：I 10。あらゆる言論には同等の強さの言論が対峙するという原則：I 12。懐疑の諸形式は自らをも含み込む：I 14以下。画家アペレスと、判断保留に影のように従う平静：I 28以下。

現れるものに従う生。基準としての現れるものと、四重の生活の導き（自然の導き、感覚の強制、法と慣習の伝承、技術の教示）：I 21–24。

五つのトロポイ。I 164–169、その適用はI 170–177。アグリッパを唱えた者として挙げるのは、ディオゲネス・ラエルティオス *Leben und Meinungen berühmter Philosophen* IX 88；ピュロンのアレクサンドロスとの旅行：同前 IX 61。

ヘーゲル。「Verhältnis des Skeptizismus zur Philosophie」(1802)、Gesammelte Werke 第4巻、218頁以下；Theorie-Werkausgabe 第2巻、245頁：五つのトロポイは「gegen den Dogmatismus der Endlichkeiten, aber […] völlig unbrauchbar gegen die Philosophie」[有限なものどもの独断論に対する最も有効な武器であるが、しかし……哲学に対してはまったく使いものにならない]；独断論の本質は、「daß er ein Endliches […] als das Absolute setzt」[有限なものを……絶対者として措定する]ことにある。

付録B カントについて

カントの引用は、『純粋理性批判』⊠A は初版、B は第二版、1781年と1787年）および『プロレゴメナ（将来の形而上学のための）』（1783年）による。

真理と基準　名目的定義は「与えられ、前提された」ものであり、あらゆる内容に対する普遍的な基準は存在せず、ただ消極的にのみ妥当する形式的な基準が「conditio sine qua non」としてあるだけである：A 58–60⊠B 82–84。

現象と限界　夢と真理は、諸表象の規則に従った結合によって区別される：『プロレゴメナ』第13節、注解III。限界概念としてのヌーメノン、およびただ思考されうるのみの非感性的直観：B 307–311。限界と制限：『プロレゴメナ』第57節および第59節。

所与　ヘーゲルは、カントが概念を直観に結びつけることを、『論理学』の概念論「概念一般について」（DE: „Vom Begriff im allgemeinen“）（理論著作集第6巻、260頁以下）において斥ける；哲学が「その発展を経験諸科学に負っている」（DE: „ihre Entwicklung den empirischen Wissenschaften verdankt“）『エンチュクロペディー』第12節、注解。

二律背反と棒の例　第一の二律背反（世界の時間における始まり）：A 426頁以下／B 454頁以下；その解決：A 497–507／B 525–535、その中に「良い香りがする」または「良い香りがしない」物体の例がある、A 503／B 531。カントの解決が矛盾を前提された対象の規定性のうちに位置づけること、そしてヘーゲルがこの発見を判断から諸規定へ移し替えること：ミヒャエル・ヴォルフ、『矛盾の概念――カントとヘーゲルの弁証法研究』（*Der Begriff des Widerspruchs. Eine Studie zur Dialektik Kants und Hegels*）、ケーニヒシュタイン、1981年；改訂第3版、ベルリン、2017年、59–62頁および226頁以下。「すべての対象における」二律背反：ヘーゲル、『エンチュクロペディー』第48節、注解。

必然性　必然性と厳格な普遍性は、アプリオリな認識の標識である：B 3頁以下；その論証、すなわちカテゴリーの超越論的演繹：B 116–169。

付録Bについて：ハインリヒス

ハインリヒスは*Sprache*、第3巻：*Die Handlungsdimension. Psychologik der Sprechakte und Dialoganalyse (Pragmatik)*、ヴァルナ/ミュンヘン：Steno 2008年、すなわち彼の*Sprachtheorie*／*Reflexionstheoretische Semiotik*、第2部、ボン：Bouvier 1981年；その中に真理についての補説、262–275頁）の語用論部分の全面的改訂版によって挙げる。最終部の短縮版は-*Dialogik. Kann denn Liebe logisch sein?*、バーデン＝バーデン：Academia 2020年、第9章、169–193頁にある。三つの書物はすべて2025年以降、叢書「全集」の枠内でReflexivity Press、リスボン、にて入手可能であり、*Sprache*、第3巻、と*Dialogik*はページ同一のPDF復刻版（第

27巻と第45巻）、*Sprachtheorie*は本文中に原書のページ数を付した新組み版（第6巻）である。

真理の位置と規定。真理はまず語用論的措定において現れる；言語行為の暗黙の規範の総括としての真理：299頁。

四つの側面。事柄：304–308頁；誠実さ：308–310頁；責任：311–314頁、その中に死の床にある者311頁以下と破壊的な伝達313頁；凝集性：314–319頁、その中に全体についてのヘーゲルの命題317頁。

いずれの側面も他の側面の尺度ではない。320頁以下、その中にfacta bruta 321頁；真理を作り出すことのできない合意：317頁；実践的非真理としてのイデオロギー：322頁；条件的に実現された無条件性：322–324頁。

初期の諸稿。ハインリヒス自身の記載によれば、最初は三項構成で「Theorie welcher Praxis?」（1973/74年執筆、1975年刊行、所収：ルートヴィヒ・ベルチュ編、*Theologie zwischen Theorie und Praxis*、フランクフルト・アム・マイン 1975年、62頁以下）、四項構成はフランクフルト・アム・マインでの社会哲学講義、1975年（299頁、注；*Dialogik*、172頁、注5）。ローレンツ・B・プンテルは論文「Wahrheit」（*Handbuch philosophischer Grundbegriffe*、ミュンヘン 1974年）において「統合的真理概念」を主張し、それはハインリヒスの記載によれば「Theorie welcher Praxis?」の草稿を用いている（同所）。

同時代人と先駆者。ユルゲン・ハーバーマス「真理諸理論」、所収：*Wirklichkeit und Reflexion. Walter Schulz zum 60. Geburtstag*、プフリンゲン 1973年。ヘーゲルの命題「真理は全体である」：*Phänomenologie des Geistes* (1807)への序文、付録C.4参照。

用語集

本書の使い方

この用語集は、あらかじめ読むためのものではない。概念は本書のなかで展開される。ここで先にそれらを調べる人は、その規定へ至る道のりなしに規定を得ることになる。

この用語集は三つの場合を想定している。ある語が、通常の意味から外れた意味で現れる場合。逐次的に読んでいないために、導入を読み逃した場合。そして、ある表現が本書のなかで終始一貫して同じように用いられているかを検証し直したい場合である。

章の記載は、概念が展開される箇所を指す——すべての言及箇所を指すのではない。

「意図されていないもの」は、もっともな読み方を退ける必要がある箇所に置かれている。

参照は、この用語集の関連項目を示し、概念が隣接する書物のいずれかでさらに展開されている場合には、そこでの項目を示す。

種別は見出し語の由来を示す。私たちの方法論は、本書とその隣接する書物が独自に行う区別について。一般哲学的は、伝統のなかで導入され、ここでは特定の意味で用いられる表現について。

パラダイム転換

種別: 一般哲学的

説明: 個々の前提ではなく、思考の構築物の基本概念が置き換えられる転換。それは、相対性理論がニュートン力学を保存するように古い理論を極限事例として保存することもあれば、量子力学への移行におけるように、ある領域についてはその基本概念を全面的に置き換えることもある。より広い意味では、そのような転換はすべて、その激変も含めて、一つの止揚である。すなわち、諸現象を保存し、その理解を新たな水準へと高める。

規則: あらゆる転換は現象を救わなければならない。すなわち、長期的には、古いパラダイムが説明できたことを説明し、さらにそれが説明できなかったことも説明しなければならない。最初のうちは、この点でまだ遅れをとることがある。たとえば、太陽中心モデルは、当初はより正確に計算できなかった。

ここでいうものではない: 根拠のない転換は、ここでいうものではない。パラダイム同士が比較しにくいことがあるからといって、転換が恣意的になるわけではない。なぜなら、転換は通常の研究と同じ真理探究の原則に従うからである。

展開箇所: 第19章

参照: 現象を救うこと、止揚、実践的検証

ミュンヒハウゼンのトリレンマ

タイプ: 一般哲学的

説明: あらゆる正当化が、無限後退、循環、恣意的な中断という三つの状況のいずれかへ行き着くという知見。自らの髪をつかんで沼から自分を引き上げたという、あの男爵にちなむ。

答え: このトリレンマは、正当化を、文が文を支える連鎖として考えます。この前提のもとでは、それは正しいのです。しかし真理の探求は、最初の文ではなく、それを否定しようとすると、その否定がまさにその遂行を行ってしまうために否定できない、一つの遂行です。そしてそれは、その上に築かれるものの中で自らを証明します。これを表す像が、石どうしが互いを支え合うアーチ門です。

意味していないこと: 互いを前提し合う文の循環。そのような循環が保証するのは整合性だけです。第1章のアーチ門は、文のアーチ門ではなく、一つの遂行の自己確認です。

展開箇所: 第1章；付録C.3参照

参照項目: 遂行的、自己言及

先-判断

種別： 一般哲学的

説明： 或る人が或る事柄そのものを検証する前に、その事柄そのものに取り組むときに抱く期待。先-判断は不可避であり、たいてい有用

である。それなしにはいかなる知覚も不可能であろう。なぜなら、何ものも或るものとして現れないからである。

意図されていないもの：軽蔑的な意味での偏見。ハイフン付きの表記はその差異を示す。先-判断は判断に先行し、偏見は判断を拒否する。

差異は訂正可能性のうちにある。先-判断は抵抗によって変化する。軽蔑的な意味での偏見は抵抗に耐え続ける。どちらが存在しているかは、前もってではなく、抵抗との関わりのなかで初めて示される。訂正されうる偏見も、まさにそれによって先-判断であることが明らかになる（第4章）。

展開される箇所：第3章、第4章

参照：実践的検証、抵抗、免疫化；思考 – 失わずに秩序づける (2025), 用語集: 偏見、倫理学 – 私たちがすでに行っている善 (2026), 用語集: 他者についての像

免疫化

種別: 一般哲学的

説明: ある確信は、いかなる可能な所見（Befund）もそれを突けないように、そう組み立てられ、あるいは防衛されます。反例は例外（Ausnahme）と宣言され、批判は裏付けへと読み替えられ、批判者はその反論の代わりに攻撃されます。こうして経験（Erfahrung）に対して自らを遮断する前判断（Vor-Urteil）は、偏見（Vorurteil）になります。

見分け方: 何が反対のことを納得させることになるのかという問いによって見分けられます。答えが「無（Nichts）」であるなら、ドグマが存在します。

意図されていないこと: 確かめること自体の反駁不可能性です。自分が確かめていることを否定する者は、その否定において確かめています。しかしこの構造は開かれています。誰でも反証テスト（Gegenprobe）を行うことができます。免疫化は自らの反駁不可能性を隠し、反証テストを禁じます。

展開されている箇所: 第4章、21.6、22.3、24.1

関連項目: 前判断、転倒、基礎の偽造

吟味の経済

種別: 私たちの方法

説明: 何が吟味に値するかについての決定。吟味には時間と注意がかかる。すべてを吟味する者は、重要なことに割く余力を何も残さない。労力を決めるのは、賭け金、基礎率——この種の主張がこれまでにどれほどの頻度で実証されてきたか——、そして情報源の実績という三つの大きさである。さらに分業が加わる。誰も一人で吟味するのではない。

限界: 吟味の経済は真理ではなく注意を配分する。低い基礎率は、より厳しい証拠上の要件を正当化するが、何も反駁しない。何が真で何が偽かは、吟味そのものによってのみ決まる。

傾いたフィルターの見分け方: 非対称性によって。それは都合のよいものを素通しさせ、都合の悪いものだけを吟味する。その境界は、自分の陣営の境界に沿って走る。同じテストは、逸脱する者にも当てはまる。ある意見が優勢であることは、その意見が逸脱していることと同様に、その意見をより真にはしない。

展開箇所: 第10a.3章；何かが吟味に値するかという問いについては、第22.4章

参照: 較正、確実性、陣営思考

基礎の偽造

種別: 私たちの方法

説明: 遂行的方法そのものの濫用です。基礎の偽造は、本物の方法と同じように、実際にそこにあるもの——確かめようとする衝動、違和感、意味への憧れ——から始まり、初めから固定されていた結果へと一歩ずつ導いていきます。最後には、語りかけられた人の経験が証明と宣言されます。

見分け方: 見分けられるのは、本物のものに似ている第一歩においてではなく、その後の歩みにおいてです。見分けるための問いは次のとおりです。その確かめは違う結果になりうるか。逆の確かめは提供されているか。時間はあるか。その経験は手がかりとして扱われているか、それとも証明として扱われているか。誰がそれを解釈するのか。そして、その過程は人をより自立させるのか、それともより依存させるのか。

ここで意図していないこと: 確かめること自体が反駁不可能であることです。それは開かれており、逆の確かめを招いています。隠れ場所を必要とするのは基礎の偽造のほうです。

展開箇所: 第22章

関連項目: 免疫化、転倒、遂行的

実践的検証（Bewährung）

タイプ: 一般哲学的

説明: ある想定が、その後の使用において確かなものと示される——あるいは示されない——過程。実践的検証は、一回だけの検査ではなく、続いていく。すでに実践的検証を経たものも、後になって不十分であることが判明しうる。

これは意味しない: 証明。実践的検証を経た想定は、証明されているのではなく、これまでのところ失敗していないだけである。

同じく意味しない: 機能すること。欺瞞はしばらく機能することがある。慰めは助けになることがある。イデオロギーは社会を効果的に秩序づけることができる。実践的検証を経たものとは、増大する吟味に耐えるものである。

真理との関係: 真理とは、増大する吟味に耐えるものである（第11章3b）。これまでのところ実践的検証を経たものは、それが妥当し続ける限り、認識された真理とみなされる。

展開箇所: 第4章、第11章3b、第13章3

参照: 前判断、抵抗

実験

種別: 私たちの方法

説明: 主張されていることが成り立つかどうかを、読者が自分で確かめられる印のついた箇所。その大半は証明であり、例示ではない。中には単に問いを鋭くするだけ、あるいは何かを明るみに出すだけのものもある。

種類は、示す度合いが異なる。 観察実験は結果が開かれている——十分多くの読者のあいだで結果が食い違うなら、その記述は偽である。遂行的テストは結果が開かれていない。反対のことを遂行することができない。思考実験は実行できず、考え抜くことしかできない。

そして何かを確立する代わりに問いを鋭くする。自己探求は、その人が持ち合わせているものを明るみに出す。食い違う結果は反論ではなく、それ自体が主題である。応用は、開発された道具を一事例で確かめる。その結果は、他の事実問題と同様に争われる。限界テストは、道具そのものを確かめ、それがもはや成り立たない場所を見いだす。

違いが何にかかっているか: 反論が的中するのは、それが問題となっている種類に対してふさわしい種類の反論である場合に限られる。

展開箇所: 第1章、第2章、第4章、第9章、第10b.1章（それぞれ各種類の初出箇所）

参照: 遂行的、自己言及

対応

種別： 一般哲学的

説明： 言明が、その言明が述べている事柄と一致していること。哲学において最も古い真理概念であり、日常的用法において自明である。

古典的問題： 一致を検証するためには、言明から独立に事柄そのものを知らなければならないだろう——そのためには再び言明が必要になる。

解消： ある秩序に耐えるものと、その秩序に抵抗するものは、その秩序づけが行われるのと同じ経験のうちで自らを示す。外部からの比較は不要である。

整合性との関係： 対応していないものは、まさにそれによって、広い意味では整合的でもない（第11.3a章）——経験がつまずくような考えは、もはや他の部分と適合しない。狭い意味では、思考同士が互いに適合しているだけなら、誤った考えであっても整合的でありうる。それゆえ、対応の検証は、もう一つの手続きではなく、整合性の検証の最も要求の厳しい事例、すなわち、抵抗するものを考え直すことによっては取り除けない事例なのである。

展開箇所： 第11.3a章

関連項目： 整合性、抵抗

抵抗

種別： 私たちの方法論

説明：期待、願望、介入に従わないもの。抵抗は、認識において現実が気づかれる場である——外からの衝撃としてではなく、想定されていたもの、あるいは意志されていたものが成就しないこととして。

意図されていないもの：単なる硬さ。拳が机に当たることは、いずれにせよ想定されていたことを確認するにすぎない。抵抗が教えるのは、想定や願望が、譲らないものに出会うところである——見た目よりも重い石、あるいは望んだからといって持ち上がらない石（第11a.1章、第11a.2章）。

抵抗の現れ方のさまざまさ：石においては手で触れられるほど明らかに、自分自身においては粘り強さとして——そこでは習慣と焦りが譲らず、自分について抱いていた像を訂正する。他の人間においては驚きとして、そしてもっとも遅く、人間のあいだで妥当するものにおいて。他の人間はさらに、こちらが根拠を負う相手として抵抗する。彼らは論駁するだけでなく、反論する。そして彼らは答えることができる。何が正しくないかを言い、その人について、そして事柄そのものについて自分が作る像を——自分自身では何も気づかなかったであろうところでも——訂正する。彼らの抵抗は石の抵抗より強いわけではないが、別の種類である。それは、それ自体が検証されるべき根拠を与える。どれだけ答えることができるかは、その場にいることよりも重要である。読むこともまた、たとえ非対称的であっても、一つの出会いである。

同じく意図されていないもの：誰かが譲らないこと。頑固な偏見は現実に抵抗するのではなく、訂正に抵抗する——別の過程である。

一つの概念であり、度の差異である。何かが介入において従わないのか、思考において従わないのかは、二種類の検証ではない——どちらも同じ連関のなかでの断絶として現れる。差異は拒みがたさのうちにある。介入する者は、適合するかどうかの答えを受け取る。単に考え抜くだけでは、妨げとなるものをより容易に片付けることができる——補助仮定、ずらされた限界、例外によって。

展開される箇所：第8.5章、第11章、第11a章

参照：凝集性、対応、先-判断；倫理学 – 私たちがすでに行っている善 (2026), 用語集: 理由を示す責務を負う

探偵の原則

タイプ: 私たちの方法

説明: 説明は、都合のよい調査結果だけでなく、すべての調査結果を取り込まなければならないという要求。自分の疑いに合わない手がかりを脇に置く探偵は、事件を解決していない。

実践的核心: 適合しない何かが残っている場合、説明は、他のことをどれほど多く説明していようとも、まだ完成していない。すべての手がかりが同じ重みを持つわけではないが、どの手がかりも消えてはならない。

展開箇所: 第8章

関連項目: 象の原則、コヒーレンス

整合性

タイプ： 一般哲学的

説明： ある確信が、その人が真とみなしている他のすべてのものと結びつくこと。整合性が破られるのは、何かが噛み合わない場合、隙間が残る場合、あるいは二つの文が互いを排除する場合である。

意味しないもの： 単なる無矛盾性。体系は、矛盾がなくても空でありうる。整合性は、諸部分が互いに支え合うことを求めるのであって、単に互いに妨げないことを求めるのではない。

対応との関係： 両者は、内側と外側との比較として考えなくなりさえすれば、同じ吟味の両面である。広い意味では、出会われるものすべて、つまり自分に押しつけられてくるものも含めて、それらと噛み合うこととして、整合性は対応を含んでおり、対応の吟味は整合性のうちで最も要求の厳しい事例である（第11.3a章）。狭い意味では、思考同士がそれ自体で噛み合うこととして、それだけでは十分ではない。妄想体系ですら内部では噛み合いうる。

展開箇所： 第8章、第11章

参照： 対応、抵抗、統合

方向づけられた多元主義

タイプ: 私たちの方法論

説明: 硬直した独断と恣意的な相対主義のあいだにある態度です。方向づけられているのは、真理へ向かう方向があり、すべての道が等しく良いわけではないからです。多元主義であるのは、多くの道が頂上へ至りうるからであり、ともに探求する人々の多様性が豊かさだか

らです。方向は、特定の成果によってではなく、吟味の仕方によって示されます。すなわち、根拠、複数の視点を突き合わせること、矛盾を考え抜くこと、他者による吟味可能性、そして改訂可能性です。

自己限定: 正当化された立場と正当化されない立場、開かれた立場と免疫化された立場があります。原理的に正当化を拒む者は、自らを真理過程から排除します。

二つの扱い方: 部分的な知見は、全体に適合するかどうかが吟味されます。全体的なものの見方は、積み木へと還元されることなく、その真理の分け前について問われます（第5章、第23.1章）。

意味していないこと: 怠惰な妥協や、いかなる代償を払ってでも調和させることではありません。ある事柄は制限するか耐えることしかできません。統合は吟味の後に来るのであって、吟味の代わりに来るのではありません（第23.1章）。

展開されている箇所: 第23.1章

参照: 象の原則、視点、真理過程

止揚

種別： 一般哲学的

説明： 矛盾の解消であり、そこでは両側の妥当なものが消え去るのではなく、より包括的な規定のうちに保持される。この語はドイツ語では三つの意味――終わらせる、保存する、より高い段階へ高める――をもち、その三つすべてが意図されている。

意図されていないもの： 妥協。妥協は双方から何かを放棄する。止揚はそれぞれの側で何が妥当であり、何が妥当でなかったかを示し、その対立がどのように生じたかを説明する。

見分け方： 新しい立場が、なぜ古い立場が生じたのかを説明しているかという問いによって。そうしていないところでは、混合が成立している。

展開される箇所： 第3.4章、第7章、第19章

参照： 矛盾、象の原理；思考 – 失わずに秩序づける (2025), 用語集: 止揚、倫理学 – 私たちがすでに行っている善 (2026), 用語集: 止揚

現象を救う

種別： 一般哲学的

説明：あらゆる真正な観察が、説明のうちにその位置を見いだすという要求。この表現はギリシアの天文学に由来する（*sozein ta phainomena*）。観察が全面的に偽であることはほとんどない――偽でありうるのは解釈であり、その場合、解釈は統合されるのではなく、退けられる。

含まれるもの：救うとは、まだ説明できないものを保存しておくことでもあり、さらには欺きを位置づけることでもある。誰かが偽の手掛かりを置いたということ自体が、一つの手掛かりである。

展開箇所：第8.2章、第19.4章

関連項目：探偵の原則、パラダイム転換、止揚

生きている全体性

タイプ：私たちの方法

説明：あるものが全体であるのは、何も欠けていないからではなく、その諸部分が互いに属し合っているからである。各部分は他の部分へと関係し、他の部分を通じて自分を規定し、他の部分とともに展開する。その連関を理解するために本質的なものは何も欠けていないが、可能なことのすべてが挙げられる必要はない。

対極：機械的な全体性。それは収集し、付け加え、チェックを入れる。その各点は関係なく並置されており、それぞれは省いても置き換えても、全体において何も変わらない。そこには結びつきが欠けている。

意図していないこと：規則、リスト、厳密な手続きが、それ自体として死んでいるということ。ある秩序が機械的になるのは、その諸部分が互いに関係づけられず、また何のためかという問いなしに処理されるときである。

展開箇所：第6章、16.4

関連項目：統合、コヒーレンス、解釈

真理

種別: 一般哲学

説明: 本書は真理をあらかじめ定義するのではなく、遂行において展開する。初めにあるのは、自らを前提とする問いである。真理とは何かと問う者は真なる答えを望み、確かめることを否定する者も、そ

うすることによって確かめている（第1章）。次いで真理は一歩ずつ自らを示す。事柄そのものは、多くの視点を結びつけることにおいて自らを開示する（第5章）。結びつけられたものは、諸部分が互いを規定し合う全体であり、寄せ集めではない（第6章）。矛盾は捨て去られるのではなく、止揚される（第7章）。すべての手がかりは、自分の場所を見いださなければならない（第8章）。そして、私たちの願いに抵抗するものも、この連関に属する（第11章）。真理は、これらすべてがかみ合うプロセスである。それは、事実との単なる一致でも、思考の純粋な構成でもなく、それらが統合される生きたプロセスである（第11.7章）。

「真なるもの」: 生きており、論理的に秩序づけられ、発展する全体（第16.4章）である。それは、既知の文の総和ではなく、諸部分が互いを規定し合い、本質的なものが何一つ欠けておらず、探求においてさらに発展していく連関である。この文の由来については付録C.4を参照。

認識された真理: そのつど到達されたもの。それは単なる意見ではなく、かといって最後の言葉でもない。すなわち、より良い秩序がそれを止揚するまで妥当し、その秩序のうちに保存されたままである。それは、より良い秩序によってのみ明らかになる誤りを含みうる。こうして到達された洞察は、全体であり、半分ではないが、最後のものではない（第23.5a章、第23.5章）。

反転: 秩序がいったん見いだされると、説明も報告も概念も、それらが果たすべきことを果たすならば、真であると呼ばれる。そして最後には、物事そのものも、それがそうあるべきものであるならば、真であると呼ばれる。たとえば、真の友人、支える椅子、成功した作品のように。この真理は第一の真理と対立するのではなく、そこから生じる（第13.3章、第23.5a章）。ヘーゲルにおいては、これがより深い意味である（付録C.2）。

意図していないもの: 合意。皆があるものを真だと思っているからといって、それが真になるわけではない。なぜなら、妥当するものは、いかなる願いにも多数派にも屈しないものに耐えなければならないからである。

展開箇所: 全体を通して。第16.4章と第23.5a章に要約されている。

参照: 真理プロセス、認識、コヒーレンス、対応、抵抗

真理の諸形態

種別: 私たちの方法論

説明: ある判断が真であると自らを証明するさまざまな仕方——経験的、実存的、文化的、芸術的。それらは、何に対して自らを証明するかにおいて異なる。真理の概念は全体を通して同じままである（付録B、真理の多元論を参照）。

カテゴリー錯誤: 一方の形態を他方の基準で測る者は、その両方を取り逃がす。「地球は我々の母である」（DE: „Die Erde ist unsere Mutter“）は、隠喩的な開示としては持ちこたえ、生物学的主張としては偽である。

意味しないこと: 何かが役に立つから真である、ということ。実存的真理や文化的真理も、それに反する経験に耐えなければならない。

展開箇所: 第13章

参照: 実践的検証、解釈

真理過程

種別: 私たちの方法論

説明: 探求し、見出し、さらに探求し続けることから成る全体。この過程のなかで、認識された真理は獲得され、吟味され、先へ運ばれる。見出された秩序はすべて、より優れた秩序がそれを止揚し、そのうちへ入り込むまで持ちこたえる。過程をさらに推し進めるのは、本書が一歩ずつ真理として展開していくものである。すなわち、矛盾が開いたまま残る秩序、手がかりが居場所をもたない秩序、何か本質的なものが欠けている秩序は、まだ全体ではない。

意味しないこと: 真理がやりとりのなかで意のままに作られるということ。過程のなかで持ちこたえるものは、どんな願望にも多数派にも屈しないものにも耐えなければならない（第11章）。

見分け方: 次の吟味への開かれによって。到達したものがさらに改善されうることを排除する者は、その過程を止めてしまっている。何もかもがさらに改善されうるという理由で何も成り立たせない者は、その過程を始めていない。

誰がそれに参加するのか: その過程は共有されている。科学、自由なメディア、独立した裁判所のような制度はその形態である（第20.5章）。原理的に根拠づけを拒否する者は、その過程から自らを排除する（第23.1章）。

展開箇所: 第1章、第11.3c章、第20.5章、第23.5a章
参照: 真理、認識、実践的検証、方向づけられた多元主義

矛盾

種別: 一般哲学的
説明: 二つの規定が互いを排除しあい、その両方が主張される場合。矛盾は思考の誤りではなく、一つの発見である。それは、これまでの秩序が十分でないことを示す。
ここから導かれること: 矛盾は回避すべきものではなく、徹底的に取り組むべきものである。一方の側を切り捨てることで矛盾を取り除く者は、その矛盾のうちにあった情報を失っている。
意味しないこと: 互いに排除しあう二つの言明が同時に真でありうるということ。まさにそれらが同時には真でありえないからこそ、矛盾は発見である。すなわち、秩序がこの点には届いていないことを示す（第2章、第7章）。
解消の仕方: 止揚によって。求められるのは、両方の側を説明する上位の原理である。両方の観察は妥当なままであり、問題としての矛盾は解消し、理解は高まる——水の中の棒と光の屈折の場合のように（第7章）。
展開箇所: 第7章、第11.7章
参照: 止揚、抵抗

知識

種別: 一般哲学的
説明: 保証を与えることのできる認識された真理——与えることのできる根拠によって、あるいは多くの事例で自らを証明してきた正確さによって。
二つの形態: 明示的知識は説明を与えることができる。経験を積んだ人の内面化された知識は、しばしばそれができず、それでもなお、推測以上のものである。なぜなら、それは自らを証明してきたからである（第9.1章）。
意味しないこと: たまたま当たった正しい推測。
展開箇所: 第9.1章
参照: 認識、確実性、真理

確信（Gewissheit）

種別： 一般哲学的

説明： ある人が何かに依拠する度合い——最良の場合には、その根拠にふさわしい度合い。確信はまず、事柄そのものについてではなく、その人についての所見である。較正が両者を一致させる。

ここで意味していないもの： 真理。人は確信していながら誤っていることがあり、疑いながら正しいことがある。

度合いと種類： 確信には、段階づけできる度合いと、それがどのように確かめられるかを示す種類とがある。種類とは、再計算によって、同じ所見へ至る独立した経路によって、ある人との経験によって、遂行そのものによって確かめられる、というものである。一つの尺度は、あたかもそれらが一種類であるかのように、これらの種類を横並びにする。

展開箇所： 第2章、第10a.3章

関連項目： 知識、真理

統合

種別: 私たちの方法論

説明: 異なる視点や知見を、それぞれが場所を持つ一つの連関へとまとめ上げること。統合は集めること以上のものです。部分同士がどのように互いに属し合っているかが示されなければなりません。

意図していないもの: 平均化。二つの立場から中間の立場をつくり出す人は、それぞれから半分ずつ取り、それらがどのように互いに属し合っているかを示しません。

展開されている箇所: 第5章、第8章

関連項目: 象の原則、止揚、整合性

自己言及

タイプ: 一般哲学的

説明: 真理についての問いがそれ自体へと関係するという性質。真理とは何かを問う者は、真なる答えを望んでいる。その問いは、自らが問うている当の事柄を前提している。

そこから導かれること: 真理の探求は外部からは正当化できない。それは、あらゆる正当化がその上に立つ根拠である——正当化は存在しないという正当化も含めて。

展開箇所: 第1章、第2章

参照: 遂行的、ミュンヒハウゼンのトリレンマ

視点

種別: 一般哲学的

説明: 何かが把握される際の立場であり、その立場が何を見えるようにし、何を見えなくするかをも含む。あらゆる認識には視点がある。「どこからでもない」見方は存在しない。

意味していないもの: 恣意性。あらゆる見方に視点があるからといって、すべての視点が等しく多くを捉えるわけではない。

二種類: 部分を捉える視点もあれば、一つの場所から全体を捉える視点もある。両者を混同する者は、一方を過小評価するか、他方を過大評価する（象の原則を参照）。

展開箇所: 第5章

参照: 象の原則、統合、較正、方向づけられた多元主義

解釈

種別: 一般哲学

説明: 人間が作り出したもの——テクスト、像、法、道具、行為——の理解。解釈は、一文を読むときにも、微笑みを読むときにも、絶えず、そしてほとんど気づかれずに進行している。精神の産物を自然の産物から区別するのは、意識された目的である。それゆえ解釈は、テクストにその意図を、器官にその機能を、単なる自然過程にその原因を問う。

次元: 作り出されたものは目的から生じるので、解釈はその生成を再構成する。すなわち、素材、制作者、手段と手続き、目的、効果である。偉大な作品の場合には、世界の開示が加わる。それは、多くの人々に関わる経験に形を与えるのである。

テクストの種類と真理: テクストは異なる目的のために作られるので、その中で確かめる事柄も異なる。報告では、それが的を射ているかどうか。法では、それがその目的を果たし、他の法と一致している

かどうか。手紙では、誠実さ。詩では、それが、人が「真の友」について語るのとは別の意味で真であるかどうか——すなわち、それが本来そうあるべきものであるかどうか。判断という意味での真偽は、ここではテクストについての判断である（第15.13章）。

意味していないこと: 順に処理されるリストではない。それぞれの次元は、それが欠けているときに生じる盲点において姿を現す。そして、どの次元が最も重みを持つかは、作品の目的が決める。

展開箇所: 第15章

関連項目: 真理の諸形態、視点、生きた完全性

認識 (Erkennen)

タイプ: 一般哲学的

説明: それまでアクセスできなかったものがアクセスできるようになる活動。認識は過程であり、始まりと中間段階を持ち、保証された結論は持たない。

真理との関係: 真理とは、認識が出会うすべてのもの——抵抗するものも含めて——を分節された全体へとつなぎ合わせていく過程である（第11章、第23.5a章）。そのつど到達されているものは認識された真理である。すなわち、全体であり、半分ではなく、しかし最後の言葉ではない。

展開箇所: 全体を通じて。明示的には第3章と第11章。

関連項目: 真理、真理過程、知識、実践的検証

象の原則

種別： 私たちの方法

説明： 異なる立場はしばしば、同じ事物そのものの異なる真なる部分的側面を捉える。象を触る盲人たちの寓話にちなむ。その寓話では、盲人たちが象を触り、触れた場所に応じて、互いに両立しない記述——蛇、柱、扇——に至る。

この寓話の核心は、各人が何か正しいものを感じ取ったことにすでにあるのではなく、象が存在するということにある。象がいなければ、それらの記述は互いに矛盾するのではなく、互いに無関係であるだろう。それらがどの点で適合するかは、まさにその象において決まる。

正しいことと誤っていること： 各人は、自分が感じ取ったことについては正しく、それを全体と見なして他を排除するや否や誤りになる。この意味で、付録Bは真理の諸理論について、それらがすべて正しいと述べる。

二種類の立場： ある種の立場は、合わさって初めて事物そのものを構成する諸部分を捉える――手がかり、測定値、証言。別の種類の立場は、山を東から、あるいは西から見るように、一つの場所から全体を捉える。全体を捉える見方を部分のように扱う者は、その見方を貶める。部分を全体を捉える見方のように高める者は、あらゆる手がかりをそれ自体の真理にしてしまう。

ここで意味していないこと： どの立場も同じだけ多くを捉えている、ということではない。ある触れ方は他の触れ方よりも多くを捉え、また、ある記述は単純に誤りである。

限界： 異なる言明が同じ対象に言及していないところでは、統合すべきものは何も存在しない。言明が単純に不正確であるところでも、同じく統合すべきものは存在しない。

展開箇所： 第5章；付録Bで真理の諸理論に適用される。

関連項目： 視点、統合、探偵の原則、方向づけられた多元主義

転倒（Verkehrung）

タイプ: 私たちの方法論

説明: ある原理が、その形式は同じままで、自らの反対のものへと転倒すること。象の原則を用いて、あらゆる立場に一片の真理を認め、それによって真偽の区別を解消してしまう人は、象の原則を転倒させています。

起こり方: ある強みが絶対化される――懐疑は冷笑へ、連関の探求は図式へ、共感は吟味に取って代わる同情へ、開放性は任意性へと変わる。危険は、その強みを強みにしているものの裏面です。それに対抗する助けとなるのは、自己適用です。

これが固有の主題となる理由: この本の諸原理はすべて誤用されうるものであり、その誤用は外からは区別しにくいものです。それは形式ではなく、成果に現れます。それが最も認識しにくいのは、真理の名の下に吟味が妨げられている場合であり、その妨げはしばしば、真理を守っていると信じている人々によって行われます（第21章）。

展開箇所: 第21章、とりわけ21.5

参照: 免疫化、陣営思考、較正

較正

型：私たちの方法論

説明：自分の判断を、事実が実際にどうであるかに合わせて設定すること。測定器を標準器に合わせるようなものです。特に、頻度、重み、関係の見積もりが意図されています。ある事柄はどれほど広がっているか。それはどれほど重みがあるか。比較においてどう位置づくか。

なぜこれが独自の概念であるか：個々の言明はすべて正しくても、全体像はそれでも歪められることがあります。例外についての真なる文だけを聞く人は、誤った知識を持っているのではなく、誤った像を持っています。その際、省略は不可避です。どの地図も国土全体を含んではいないからです。難しいのは、示されたものに重みを与えることであり、省略されたものは見えません（第10.2章）。

二つの層：第一の層では個々の言明とその源泉が検証され、第二の層では分布が検証されます。何が選ばれ、何が欠け、自分自身の「正常」の尺度がどのようにずれるか（第10a.3章、10b.1章）。

自前の較正 とは、自分自身の、経験によって洗練された尺度に従うことであり、自分の代わりに機関に濾過させることではありません（第10.5章）。それは検証の分業を排除しませんが、自分の根拠をもはや示すことのできない信頼は排除します（第10a.3章）。

発展した箇所：第10章；詳しくは較正 (2026)

参照：視点、抵抗、確信、検証の経済

遂行的

種別：一般哲学的

説明：ある連関は、それが主張されるのではなく、遂行のうちに示されるとき、遂行的と呼ばれる。その場合の証拠は、論証ではなく、誰かが読み、あるいは反駁しながら行うことである。

見分け方：遂行的矛盾は、ある陳述の内容が、その遂行が前提しているものと矛盾するときに存在する。「私は沈黙している」と言う者は、沈黙していない。

限界：本書の主張のすべてが遂行的に確立されるわけではない。経験が記述されている箇所では、所見は異なりうる。

展開箇所：第1章、第2章

関連項目：自己言及、ミュンヒハウゼンのトリレンマ、遂行的一貫性

遂行的一貫性

種別：私たちの方法

説明：あるテキストが述べていることと、そのテキストが行っていることとの一致。真理の探求についてのテキストが遂行的に一貫しているのは、そのテキストが自らの原理を自分自身に適用するとき、すなわち、自らが要求することを正当化し、異論を受け止め、改訂に対して開かれたままであり、自分自身のテストによって自らを測らせるときである。

その反対：遂行的矛盾。そこでは、遂行が、内容が述べていることを否定する。

展開箇所：第24章

関連項目：遂行的、自己言及、生きた完全性

陣営思考

種別：私たちの方法

説明：主張を、その根拠によってではなく、それが由来する側によって分類すること。自分の陣営に資するものはより容易に信じられ、自分の陣営を害するものはより厳しく吟味される。批判は攻撃と解釈され、批判者は相手側へ割り当てられる。

見分け方：非対称性によって。傾いたフィルターは、自分の側を乱すものは何も吟味せず、相手側が言うことはすべて吟味する。

ここで意味していないこと：あらゆる側につくことが、それだけですでに陣営思考になるということではない。陣営思考は、帰属が吟味に取って代わるところから始まる。

この誘惑は一般的である：それはあらゆる時代に、あらゆる側に現れる。また、他人をそれだと非難する人々のあいだにも。それに対して助けとなるのは、正しい側を選ぶことではなく、対称性である。すなわち、相手側に対するのと同じ基準を自分の側にも適用し、しかもそれをまず最初に自分の陣営に適用することである。

展開箇所：第21.1章、第21.2章、第21.8a章；傾いたフィルターについては第10a.3章

関連項目：転倒、免疫化、方向づけられた多元主義